

文部科学省指定 2014-2019



平成 26 年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究報告書

5 年間の研究開発と
平成 30 年度 (2018~2019) の取り組みを中心に
第 5 年次・最終報告



2019 (平成 31) 年 3 月

玉川学園高等部・中学部 (東京)
Upper & Lower Secondary Division,
Tamagawa Academy, Tokyo

平成 30 年度

平成 26 年度指定スーパーグローバルハイスクール
研究報告書

研究開発課題

「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」

- ・ 研究開発完了報告書
- ・ 課題研究成果報告書

第 5 年次・最終報告

平成 31 年 3 月

玉川学園高等部・中学部

平成 26 年度指定スーパーグローバルハイスクール(SGH)
研究報告書
研究開発完了報告書・課題研究成果報告書（第 5 年次・2018～2019）

目次

| | |
|---|-----|
| ◆研究開発完了報告書（別紙様式 3） | 2 |
| ◆課題研究成果報告書 | |
| ①グローバル・キャリア講座 2018..... | 22 |
| ②Tamagawa Academy Super Global Leaders 48..... | 27 |
| ③ 12 年公民科選択科目「ワールド・スタディーズ」 | 29 |
| ④SGH 海外研修「アフリカン・スタディーズ 2018」 | 35 |
| ⑤自由研究「グローバル・スタディーズ」 | 42 |
| ⑥たまがわ会議（ラウンドスクエア実行委員会） | 43 |
| ⑦SGH 海外研修「ヨーロッパ・スタディーズ 2018」 | 49 |
| ⑧模擬国連の実践を通じた外交・国際協力の理解..... | 56 |
| ◆課題外研究について | |
| 《1》英語に対する取り組み..... | 63 |
| 《2》広報・普及に関して | 69 |
| 《3》運営指導委員会（ハイパネル）の開催..... | 73 |
| 《4》卒業生に対する追跡調査..... | 76 |
| ◆第三者外部評価 Sustainability Frontiers「Tamagawa Final External Evaluation」 | 78 |
| ◆平成 30 年度主な SGH 生徒研究成果集..... | 111 |
| ◆参考資料（SGH 概念図・教育課程表） | 128 |
| ◆執筆担当 | 130 |

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都町田市玉川学園 6-1-1
管理機関名 学校法人玉川学園
代表者名 理事長 小原 芳明 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 玉川学園高等部・中学部

学校長名 小原 芳明

3 研究開発名

国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成

4 研究開発概要

長年、国連機関において日本政府が国連へ拠出している分担金に比例して算出される「望ましい日本人職員数」の割合に関して基準を満たしたことがない。この現状が続けば、近い将来、国際機関や国際NGOにおける日本の存在感の低下が危惧され、日本の国際的な発言力の低下を招いてしまうのではないかという危機感がある。この長年の国際機関における日本人職員数の不足という社会問題へ対し、中等教育段階からその増加をはかろうという研究開発である。

そのために国際機関や国際NGOでリーダーとして活躍するために必要な、多様な文化を理解し、世界の諸問題に興味を持たせる。その上で、多角的な視点から判断をし、強い意志を持って実行するためのコミュニケーション能力・語学力とリーダーシップを育成する。グローバルな学校としての文化を根付かせるために教員研修も重点をおく。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|-----------------|------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 専任の支援スタッフの雇用 | | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 |
| 海外研修プログラムの実施支援 | | | | 実施 | | | | | | 実施 | | |
| 学内ネットワークによる広報支援 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 |
| 日英ホームページ等制作支援 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 |
| SGH 事業の進捗管理 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 |
| BLES・IB | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 |

(2) 実績の説明

- 専任の支援スタッフの雇用
 - 指定校において、SGH 事業の充実した取組推進および円滑な運営を図るため、海外諸機関との連携交渉等を担当する海外交流アドバイザー（非常勤職員）1名と、経理事務や資料整理等の事務作業等を担当する事務補助員（非常勤事務員）1名を雇用了。
- 初等中等教育部門および法人部門との連携協力
 - 指定校における海外研修プログラムの実施にあたっては、初等中等教育部門の海外研修プログラムの企画・調整・運営を担当する学園国際交流センター（3名体制）が支援を行った。
 - 成果の普及に関する取り組みにおいて、学内ネットワークによる広報については、初等中等教育部門のコンピュータ・ネットワークの管理運営を担当する学園マルチメディアリソースセンターIT支援室（3名体制）が全面的に支援した。日本語・英語ホームページ制作は、玉川学園ホームページを総括して管理運営する教育企画部広報課（4名体制）の連携協力のもと実施した。また、本学の学校案内や広報誌、学校説明会、他校との合同研修会において、SGH の取り組みを積極的に紹介し、成果の普及に努めた。ホームページへの SGH 活動状況、関連情報の掲載により、事業普及の波及効果が得られ、取り組みを参考としたい高等学校等に対する活動の促進が図られたと考えられる。
 - 非常勤職員・事務補助員の雇用、委託費の管理、物品の調達等については、法人部門の総務部、人事部、経理部との連携により、適正な運用を図るべく実施した。
- SGH 事業の進捗管理
 - 管理機関の責任者および担当者は、毎月開催される実行委員会に出席し、管理機関とし

て、連携や視点への助言を行ったほか、円滑な指定校運営がなされるよう学内諸機関・会議への協力要請等も機動的に行った。

- 今年度は運営指導委員会を平成 30 年 6 月 25 日及び平成 31 年 2 月 19 日に開催し、海外国内の有識者から、本事業の進捗、課題、今後の計画等について専門的見地から指導・助言を受けた。

● 玉川学園 (K-12) としての取り組み

- 玉川学園 K-12 では、平成 28 年度より、幼稚園の BLES-K (Bilingual Elementary School-Kindergarten) プログラム及び小学 1 年生からの BLES (Bilingual Elementary School) クラス (教育課程特例校) を開始し、日本語と英語のバイリンガル教育を通じて、国際社会において責任ある行動をとることができる人材の基礎を育てている。BLES は、本学で導入している国際バカロレア (IB) クラスへとつながる国際的な教育であり、国際化する大学進学への起点ともなる。中学部・高等部の国際バカロレア (IB) クラスでは、世界各国で通用する高水準の教育カリキュラムを実施し、世界の舞台で活躍できる人材育成に取り組んでいる。これらの国際教育については、本年度も学内外に向けて積極的に広報活動を行った。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

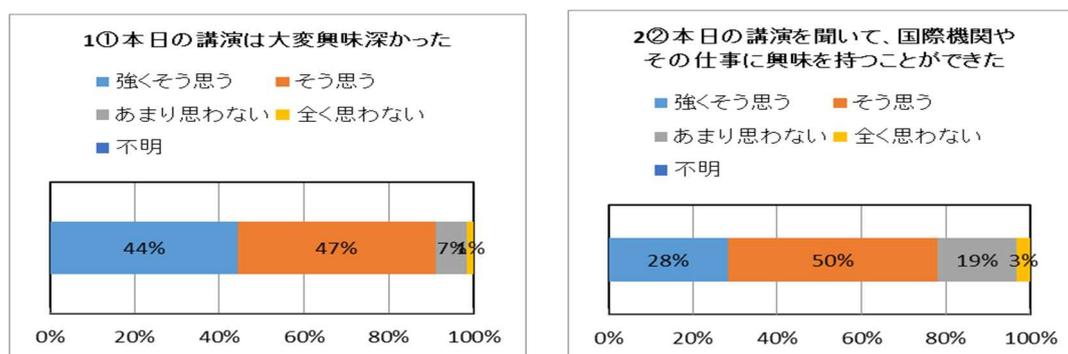
| 業務項目 | 実施期間 (契約日 ~ 平成 31 年 3 月 29 日) | | | | | | | | | | | | |
|---|-------------------------------|------------|------------|-------------|------------|----------|------------|----------|----------|----------|-------------|----------|----|
| | 4 月 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 | 1 月 | 2 月 | 3 月 | |
| ①グローバルキャリア講座 | 準備 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | | | 実施 | | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | |
| ②Tamagawa Academy Super Global Leaders 48 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | |
| ③ワールド・スタディーズ (World Studies) | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | | |
| ④アフリカン・スタディーズ (African Studies) | 生徒 募集 | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 事前指 導/実施 | | 事後 指導 | 事後 指導 | | | | 検証 | | |
| ⑤自由研究「グローバル・スタディーズ」 | 準備 | 実施 | 実施 | 実施 | 企画 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | |
| ⑥たまがわ会議 | 準備 | 準備 | 準備 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | | | | |
| ⑦ヨーロッパ・スタディーズ (European Studies) | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 事前 指導 | 事前 指導 | 実施/事 後指導 | 事後 指導 | 検証 |
| ⑧模擬国連 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | 検証 | |

(2) 実績の説明

①グローバルキャリア講座 2018

国連機関である国際通貨基金、国際 NGO の国境なき医師団とダイヤモンド・フォー・ピー

ス、国内で活動する国際的學生団体 AIESEC、大学在学中に UNV へ派遣された本校卒業生、玉川大学で米国国務省のプログラムに選出された学生、難民支援をする企業「ファーストリテイリング」、国際的に拠点を持つロート製薬、各国の外交官などを輩出している政策研究大学院大学と多様な分野で活躍する講師を迎えることができた。合計 10 回計 1963 名の参加生徒があり、そのうち TED 方式では合計 188 名の参加者があった。今年度は、全校で参加する講話形式を 1 回、学年ごとに参加する講話形式を 4 回、生徒が主体的に参加する TED 形式を 4 回実施した。以下の表は今年度 10 回分の総計（1963 人分）であるが、年間を通して約 9 割の生徒は講演内容を興味深いと感じ、国際機関やその仕事に興味をもつことができたと回答した生徒は 78% にのぼった。



②Super Global Leaders 48

年度末に全校生徒中ポイント上位 48 名/904 名を表彰した。また上位 48 名は全員 11 年と 12 年だったため、学年の公平性を考慮し、9 年生と 10 年生の上位 5 名ずつ、合計 58 名を表彰した。

③ワールド・スタディーズ（12 年生公民科選択授業 4 単位＋12 年生特別授業 12 月～1 月）

年間 34 名（ワールドスタディーズⅡ含む）が履修。年度末の SSH/SGH 合同発表会では代表生徒が各自の新聞スクラップ学習に関するポスター発表を行った。また WFP エッセイコンテストと JICA 国際協力高校生エッセイコンテストへ履修者全員で応募し、JICA のエッセイコンテストでは 1 名佳作へ入選した（応募総数約 34,738 通、入賞者約 100）。また、教師用ハンドブックの原案となるアクティビティを実践し、生徒、教師からのフィードバックを送付して、サステイナビリティフロンティアーズとアクティビティ集を作成している。

④SGH 海外研修「アフリカン・スタディーズ 2018」～アフリカ共和国での研修

今年は定員を超える応募があり、選抜面接を経て、生徒 20 名を選出して実施した。5 月より毎週 1 回、合計 7 回の事前研修を行った。JICA 職員と南ア、St.Cyprian's 校からの交換留学生（トリステンさん）を招聘し、具体的に現地での生活習慣や気候に関する質疑を行う事前研修を実施した。また、現地校で行うプレゼンテーションを作成した。その後から 9 日間、現地で研修に臨んだ。JICA プレトリア事務所、海外青年協力隊員が実際に活動している現場の視察や、スラム街（タウンシップ）、ロベン島（ネルソン・マンデラ氏が収監されていた監獄跡）の見学という貴重な体験を通じて、人権と国際協力についての理解を深めた。参加生徒は、日本と南アに両国の現状と課題解決の困難さを身をもって感じていた。本学園のある町田市は 2020 年東京オリンピック・パラリンピックで、南アフリカ共和国のホストタウンをすることになっており、現地での広報活動の一環として今回、ケープタウンにあるセント・サイプリアンス校において、町田市 PR

のためのプレゼンテーションを行った。帰国後は、報告会と課題研究発表会を3回実施した。生徒からの評価も高く SGH 関連テーマはもちろん、研究分野の貧困、人権、国際協力の現場を通してグローバルな問題に気づききっかけや研究の深化を促進する研修旅行となっている。

⑤自由研究「グローバル・スタディーズ(国際関係・言語学)」(総合的学習の時間2単位×3学年)

履修者は計39名で、各自で研究テーマを設定し、問題の探求や関連する諸活動への参加・イベントの企画等を通じて研究を進め、その成果を発表した。希望選択した生徒の意識は高く、自発的に研究を進めた。各種発表会に多くの生徒が参加、出席し、発表の機会を得た。南アフリカを研修テーマにしている3名は、地元の町田市が東京オリンピック・パラリンピックでのホストタウンとなっていることから、「町田〇ごと大作戦」のイベントへ招聘されたり、メディアの取材があったりした。また次年度のアフリカン・スタディーズ実施時に写真をテーマにしたイベントへの参加も打診され、SGHの活動が地域連携のきっかけづくりへと発展してきている。

⑥たまがわ会議

2018年7月11日(水)～13日(金)の3日間に実施し、108名が参加した。今年度のテーマを“Human-rights issue(人権問題)”と設定し、ワークショップを通じて理解を深化させた。自主運営が定着し、実行委員の中心メンバーがリーダーシップを発揮していた。日常の活動を通じて、学年の上下関係を意識せずに生徒が自由に発言できる環境が整えられている。ユニクロと UNHCR が共同で行っている「届けよう服のチカラプロジェクト」への参加も4年目となり、講師を招いての講話とともに、学内のみならず、近隣保育園の横の繋がりを活用し、その範囲を年々拡大してきている。研究と実際の行動が繋がった活動である。

⑦SGH 海外研修「ヨーロッパ・スタディーズ」～オランダ王国・スイス連邦・ポーランド共和国での研修

生徒18名(引率2名、ガイド1名)が参加し、10月より合計9回の事前研修、2019年1月4日(金)～1月13日(日)の現地研修、事後研修を5回行った。「外交」「人権」「国際協力」の分野における生徒の個人研究を深め、国際機関へのキャリア選択を実現する全人的リーダーの資質を養うグローバルな学習機会を与えることを目的とし、国際刑事法廷メカニズム、平和宮、在オランダ日本国大使館、ピネンホフ(オランダ・ハーグ)、アムステルダム国立美術館、ユダヤ歴史博物館、アンネ・フランクの家(オランダ・アムステルダム)、国連人権高等弁務官事務所、国連難民高等弁務官事務所、国際労働機関、国際赤十字(スイス・ジュネーブ)、アウシュビッツ収容所、シンドラーの琺瑯工場(ポーランド・クラクフ)を訪問し、研修を重ねた。研修後、個々のテーマに基づき更に研究を深化させ、2月16日に開催した SGH・SSH 生徒研究発表会にて発表した。

⑧模擬国連(10～12年 自由選択科目 1単位)

今年度は10年～11年生の25名(男子3名+女子22名)が履修し、毎週木曜7時限目に実施した。前期のテーマは「アフガン侵攻の是非」、後期は「イラク戦争後の平和構築」であった。また1月13日、14日には「玉川模擬国連会議」を玉川大学 UCHにて開催し、SGHを中心に12校109名の参加者があった。更に会議終了後に研修会を実施し、上智大学の東大作教授による平和構築に関する研修会を実施した。また会議の成果や各国の立場に立って調査したポジションペーパーは、SGH/SSH 合同生徒研究発表会や探究型学習発表会で発表を行った。

7 目標の進捗状況、成果、評価

①研究開発課題「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」に対して、以下の4つの目標を立てた。

(ア) IB (国際バカロレア) の教育理念を参考にして、授業内における相互作用を手段とした教育実践とカリキュラムを開発する。

SF「最終外部評価報告書」にもある通り、SGHの5年間の間にアクティブラーニングの多くの授業で導入されるようになり「もともと熱心だった教員を核にさらに広がっている」ことが確認された。ただ、すでに総合的な学習の時間として「自由研究」や、9年生の学校設定科目「学びの技(情報+国語)」などがあり、カリキュラムに余裕がなくSGHとしての教科横断的な科目の導入にはいたらなかった。

しかし、見方を変えてみると、日本の高校には類似した状況に悩む学校もあるのではないかと推察される。そのため、本校の選択科目や生徒の自主的な活動を中心としたプログラムであっても、SGHの生徒への波及効果は認められており、他校においても本校5年間の実践は参考となるのではないかと考える。

(イ) 既存の提携校やラウンドスクエアの利点を生かしたリーダーシップを滋養する海外研修のしくみを構築する。特に振り返りや成果の発表や討論の機会を持つ。

ラウンドスクエア実行委員会との連携により大変教育的効果の高い実践をすることができた。生徒の自主性を尊重しながら、生徒から講師のリクエストを聞いて実現したり、実際に自分たちでボランティア活動を企画、呼びかけを行ったりすることができた。またラウンドスクエア国際会議へ参加した生徒たちが帰国後にリーダーシップを発揮して、その成果を在校生へ分けようとする姿勢も際立っていた。

アフリカン・スタディーズが、毎年継続できたこともあり、参加生徒のグローバルな諸課題(貧困、人権、国際協力など)への理解はいっきに深まっている。また将来の進学先選択にも大きな影響を与えていることが明らかとなった。当初3年間訪問していたボツワナ共和国は入国ビザの審査が厳格化されたため、2017年度から訪問を見送ることになったのは残念であった。そのため、首都ハボロネにある提携校のMaru A Pula Schoolとの交流が断絶してしまった。

ヨーロッパ・スタディーズに関しても、毎年継続的に参加者が集まり、その教育効果は参加者の事後アンケートからも高いことが明らかになった。特に実際の国連職員で現場で研究成果をプレゼンするなど、単なる訪問だけではないことは特筆すべきと感じた。また世界遺産のビルケナウ収容所の訪問も生徒に大きな印象を与えていた。

SGH指定後、参加者に対して、訪問した経験と研究を必ず発表することとしてきた。そのため、その発表を聞いた生徒が互いに興味を示すようになり、大きな相互作用をみることができた。継続的な参加希望者がいるということはそのような機会を重視していた側面が大きいと考えている。

(ウ) 生徒の英語力を中心とした他者へのコミュニケーション能力の向上をはかるとともに、自己の内面との対話も行い他者への理解を深め、多様性を尊重できるリーダーとしてふさわしい精神的成熟をはかる。

SGH指定後、英語科の全面的な協力により、生徒の英語学習への意欲を刺激する取り組みがいくつもなされた。レシテーションコンテストでは、英語が不得意な生徒と得意な生徒お互いが楽しめるような企画となっており、大変あたたかい雰囲気の中で日常の英語学

習の成果を披露しあうことができた。また普段はなかなか授業で接することが少ない IB の生徒も参加することにより、お互いに大変よい刺激となっていると感じている。実際、生徒の意識調査によると本校在学中一貫して英語学習への意欲は高く維持されており、各レベルに応じた進歩をみることができた。また EFL の教員も単なる英会話からプレゼンテーションスキルの向上やコミュニケーション力の向上へ授業改革を実施し、第 8 支部の英語スピーチコンテストでは 2 年連続で金賞を受賞するなど成果も挙げた。また最終年度の 2018 年度は英検 1 級保持者が 9 名、準 1 級保持者が 35 名となった（全校生徒 904 名中）。

(エ) 経験豊かな教育分野の国際 NGO による第三者評価を行い、グローバルな学校作りに欠かせない教員研修の充実をはかる。

SGH 指定の 1 年目、3 年目、5 年目と 3 回イギリス国際教育開発 NGO「サステイナビリティイヤー・フロンティアーズ」の第三者評価を受け、報告書を 2014 年度、2016 年度、2018 年度の本校 SGH 研究開発報告書へ掲載した。教員研修に関しては、3 年次までは積極的に全国の SGH 校へ教員を派遣し、研究報告会や意見交換などを行った。しかし、中間評価以降は予算を生徒へ重点的に配分する方針から教員の派遣研修は減少した。

その一方で、本校の SGH の実践を発表する機会「先進校としての研究発表」をできるだけたくさん持つように心がけ、学内外併せて 5 年間で 41 件の発表を行った。また「模擬国連」においては社会の実践ニーズの増加に伴い、本校のノウハウを共有するために 2016 年度に日本の高校では初となる「模擬国連研修会」を実施して 13 校から 19 名の教員が参加した。

②中間評価

○平成 26 年度 SGH 指定校（56 校）中間評価の結果および講評（平成 28 年 9 月）

- ・優れた取組状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される。（4 校）
- ・これまでの努力を継続することによって研究開発のねらいの達成が可能と判断される。（16 校）
- ・これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる。（19 校）
- ・研究開発のねらいを達成するには、助言等を考慮し、一層努力することが必要と判断される。（15 校）
- ・このままでは研究開発のねらいを達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の変更等の対応が必要と判断される。（2 校）
- ・現在までの進捗状況等に鑑み、今後の努力を待っても研究開発のねらいの達成は困難であり、スーパーグローバルハイスクールの趣旨及び事業目的に反し、又は沿わないと思われるので、経費の大幅な減額又は指定の解除が適当と判断される。（0 校）

玉川学園 SGH は 3 番目の評価となった。以下その講評である。（平成 28 年 9 月文科省 HP より）

◆玉川学園高等部・ 中学部

- 全体として取組が順調に進んでおり、「ワールド・スタディーズ」「模擬国連」等の成果が出ている点は評価できる。
- 運営指導委員会の指導助言が取組の改善に活かされている点は評価できる。
- グローバルキャリア講座など単発的・受動的な学習の比重がやや多く、生徒自身がどのように課題研究に取り組み、学びの当事者として何を探究し学んできたのかがわかりにくいので、改善が望まれる。

中間評価で指摘を受けた「単発的・受動的」という点の改善として、平成 29 年度には、WFP で活躍された講師との会談を交えたシリーズ化した講座を開催した。第 1 回は、講師の出演番組を観て、知識を深め、疑問点を明確にし、第 2 回目は講師との会談を通じて疑問を解決し、第 3 回目に生徒のみでディスカッションを行い、世界の食糧問題解決を糸口に模索した。また、平成 30 年度も引き続き生徒が希望する講師を招いての講座を開催し、たまがわ会議では討論やアクションプランの作成を行った。

◆課題外研究について

《1》英語に対する取り組みと成果

A. 実用英語技能検定試験対策講座

玉川学園マルチメディアリソースセンター（以下 MMRC）と英語科の共同企画として、玉川大学文学部英語教育学科の大学院生・大学生による英語検定準 2 級 1 次試験講座を英語検定に合わせて年 3 回設定した。英語検定を受験の条件にしている大学の多くが 2 級と設定しており、受験を意識している生徒は必然的に 2 級に取り組む。そのため、前段階として英語検定を意識させる目的で準 2 級対策の講座を開講することで、高学年の英検受験者数・合格者数を増加させる手段として MMRC から提案があった。

英検準 2 級対策講座ではあるが、受講申し込みをする生徒の中には英語力が 3 級に到達していない者、対策講座に申し込んだが英検そのものを受験申請しないケースもあった。

一方、講師の条件も徐々に厳しくなった。講座発足当初は教員免許を持つ大学院生が選ばれ、教材作りも任せることができた。しかし次第に学部生も条件に入れることとなり、英語科で教材選びから授業の段取り、Writing の添削まで担当する必要が出てきた。

合格率は受講者の日頃の英語の成績を見れば容易に想像が付き、対策講座の効果は限定的であったと言わざるを得ない。だが、英検を未経験の受講者にとって、試験問題の出され方に触れる機会を得たことは収穫であったとの感想も聞いている。

B. GTEC による統一基準学力測定

GTEC for Students という名称が、今年度から GTEC に統一され、高学年では 12 月末に 3 技能で実施した。9～11 年を対象に 3 技能テストを 12 月 20 日に行った。”SET UP”というテスト解説冊子を利用して直前の週に英語の授業で事前指導を行ない、テストの概略と出題方式を周知した。

○成果

| | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 |
|-----------------|-------|-------|-------|-------|
| Total Score | 292.4 | 414.5 | 417.0 | 482.7 |
| Reading Score | 95.9 | 152.0 | 154.3 | 176.6 |
| Listening Score | 121.0 | 167.0 | 162.2 | 195.1 |
| Writing Score | 75.4 | 95.5 | 100.1 | 109.4 |

（同一学年の推移。2015 年＝8 年生、2018 年＝11 年生）

| Grade | Total | | Reading | | Listening | | Writing | |
|-------|-------|------|---------|------|-----------|------|---------|------|
| | 2017 | 2018 | 2017 | 2018 | 2017 | 2018 | 2017 | 2018 |
| 7 | 0 | 13 | 0 | 15 | 0 | 27 | 0 | 1 |
| 6 | 12 | 16 | 32 | 13 | 26 | 39 | 0 | 6 |
| 5 | 32 | 37 | 25 | 26 | 15 | 21 | 11 | 31 |

| | | | | | | | | |
|---|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 4 | 47 | 58 | 28 | 72 | 34 | 26 | 132 | 114 |
|---|----|----|----|----|----|----|-----|-----|

(受験者数：2017年＝225名、2018年＝218名)

2015年～2018年の点数の推移を見ると、4項目とも全て右肩上がりとなっていることがわかり、学年が進行するにつれて、着実に英語力が伸びていることを示している。8年生～9年生にかけて大きく伸びを見せ、9年生～10年生では横ばいに近い数値となる結果は毎年同様である。これは8年生ではCoreタイプ（満点440点）、9～10年生はBasicタイプ（660点）、11年生はAdvancedタイプ（810点）を受験させており、満点の設定が上がるにつれて学力の高い生徒がさらに上位の点数を獲得できるようになるためである。また、9～10年生で横ばいであるのは、9年生では高校受験を目指して学力を挙げている生徒がいる一方、10年生ではそれらの生徒が抜け、代わりに主に公立の中学校での英語教育を受けた生徒が入学してきている学年であるためと推測する。

次にグレード別に2年間を比較してみた。どのグレードでも上位の成績を取る生徒が増加しているが、数カ所人数が減少している箇所がある。すなわちReadingのGrade6、ListeningのGrade4、WritingのGrade4である。IBクラスの生徒たちがますますグレードを上げており、普通クラスの成績上位者から抜きん出た上位グループを形成しているためである。

C. 英語会話のグローバル化

11年生と12年生の「英語会話」の授業において「コミュニケーション力の強化」の一環としてプレゼンテーションの強化、リサーチスキルの強化が図られる引き続き取り組みがなされた。またその生徒プレゼンの評価は教師による評価とともに生徒たち自身による相互評価も取り入れた。プレゼンのテーマも12年生はグローバルな課題から選択させた。

D. 学内レシテーションコンテストの実施

IBコースを含む10年生241名、11年生231名全員が参加し、平成30年12月19日にレシテーションコンテストを玉川大学UCHマーブルホールで実施した。今年度はIB生徒による英語プレゼンテーションの枠を大幅に拡大した。11月に全生徒を対象に予選を行い、12月に本選というかたちにした。課題は、10年生では教科書Flex Iの教科書のパッセージを、11年生では教科書Flex IIの教科書パッセージを用いた。ファイナルステージである『クリスマス・カップ』は、12月19日にUCHマーブルホールにて行われ、それぞれのクラスで勝ち上がって来たスピーカーが英語のレシテーションの成果を披露した。

10年生ではイギリスの作家ルイス・キャロルによるAlice's Adventure in Wonderlandから幾つかのシーンを選んで、代表生徒達に暗唱させた。11年生においては、世界の偉人・セレブリティによるスピーチを生徒達に暗唱させた。また、IBによるプレゼンテーション部門では、6つのグループ・個人（計12名）による英語プレゼンテーションが行われた。

普通学級とIBコースの生徒は普段全く異なるカリキュラムで学んでおり、互いに普段の成果を見せ合う貴重な機会となった。特にIB生徒による、スライドや動画を用いた英語発表はどれも工夫が施された非常に完成度の高いものであった。

《2》 広報、普及に関して

玉川学園SGHホームページを通じて最新の情報を発信しつづけてきた。グローバルキャリア講座は、毎回録画、学内イントラネット上にYou TubeのQRコードを掲載し、講座に参加でき

なかった生徒や保護者・教職員のへ後日閲覧可能にしている。

その他学内の発表は、例年通り、ペガサス祭での展示、探求型学習生徒発表会（10月）での発表、模擬国連（1月）、SSH/SGH 合同発表会（2月）を開催した。また教員発表ではあるが、「日本学術会議 FutureEarth の推進に関する委員会」で本校 SGH の実践に関する発表の機会を得、多くの著名な大学、行政の関係者へ本校 SGH の実践を発表する機会を得られた。

| 2018年度メディア掲載一覧 | | | |
|----------------|---------------------------|--------------------------------------|--|
| 月日 | 掲載 | タイトル | 内容 |
| 1 2018.7.1 | 玉川大学・玉川学園同窓会誌「たまがわ」No.154 | 2017年度玉川大学・玉川学園学友会 学友会賞が決定しました | SGH、ワールドスタディーズで取り組んだ国連WFP賞受賞者の紹介 |
| 2 2018.6.10 | 月刊誌 全人 No.828 玉川大学出版部 | 行事報告K-12-自ら探究し、互いに学ぶSGH・SSH生徒研究発表会 | 3月12日に行われたSGH・SSH合同生徒研究発表会の様子の紹介 |
| 3 2018.6 | ZENJIN 2018特別号 | SGHグローバルキャリア講座で高井研さんの特別講演を実施 | 2017年10月20日に実施したグローバルキャリア講座の紹介 |
| 4 2018.7.10 | 月刊誌 全人 No.829 玉川大学出版部 | 玉川学園ニュース IB ビーチクリーン | IB生が任意で行っている江の島ビーチクリーンの様子掲載 |
| 5 2018.7.10 | 月刊誌 全人 No.829 玉川大学出版部 | K-12 SGHグローバルキャリア講座 | 本校卒業生、本杉佳子さんの講演の様子掲載 |
| 6 2018.9 | 月刊誌 全人 No.830 玉川大学出版部 | 特集「世界の課題を考えるJK12SGHスタディーズアーの紹介 | 本校SGH5テーマと海外研修旅行の位置づけ、参加生徒の声を掲載 |
| 7 2018.12 | 月刊誌 全人 No.833 玉川大学出版部 | 玉川ニュース「SGH/SSHグローバルサイエンスキャリア講座」 | ロート製薬会長山田邦雄氏の講演の様子を紹介 |
| 8 2018.12 | 町田市役所広報課まちだOごと大作戦担当 | さあ、一緒に、南アフリカへ！～ホストタウン「南アフリカ共和国」応援PJ～ | 自由研究グローバルスタディーズ生徒による地域連携企画の紹介 https://machida-marugoto.jp/article/708 |
| 9 2019.1 | 月刊誌 全人 No.834 玉川大学出版部 | 特集「家族のかたち」K12 ようこそ我が家へ | 海外研修生を受け入れたホストファミリーの紹介 |
| 10 2019.3 | 月刊誌 全人 No.836 玉川大学出版部 | K-12 SGHヨーロッパスタディーズ | 海外研修SGHヨーロッパスタディーズの紹介 |

| 2018年度 SGH関連視察訪問受入 | | | |
|--------------------|----------------|--------------------------------|--|
| 月日 | 団体 | 内容 | |
| 1 2019.1.16. | チーム ラボキッズ 株式会社 | ワールドスタディーズ授業見学およびSGH全般に関する意見交換 | |

| 2018年度 SGH関連プレゼンテーション | | | |
|-----------------------|--|--|------------|
| 月日 | 会議 | タイトル | 場所 |
| 1 2018.4.8. | 保護者対象 玉川学園教育説明会 | SGH 2017年度報告および2018年度へ向けて | 玉川学園チャペル |
| 2 2018.8.2. | 追手門学院 合同教員研修会 | 大学・社会で求められる力を育成するための中高の取組（自由研究・学びの技・SGH・SSH・IB） | 玉川大学教育棟 |
| 3 2018.9.16-17 | 玉川学園ペガサス祭 SGH展示ポスター発表 | SGH国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成 | 高学年校舎 |
| 4 2018.10.27 | 探求型学習発表会 SGH展示ポスター発表 | SGH国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成 | 高学年校舎 |
| 5 2019.1.22 | 日本学術会議フューチャー・アースの推進に関する委員会持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会 | 公開ワークショップ「Future Earthと学校教育：ESD/SDGsをどう実践するか」SGHからFuture Earth・SDGsへ | 日本学術会議大会議室 |
| 6 2019.2.16 | 平成30年度SSH/SGH合同発表会 | 卒業生追跡調査からみる 玉川学園SGHの5年間の歩み | 高学年校舎 |

<学内イントラネットによる広報一覧 27件>

| | | | | | |
|---|--|------------------|------|------------|-------|
| 🔗 | 【SGH】「ヨーロッパ・スタディーズ2018～人権・外交・... | Takeshi Ouhara U | 57K | 2018/09/10 | 10:41 |
| 🔗 | 【SGH】10月17日(水)ロート製薬会長山田氏講演会のお... | Munetaka Soai U | 307K | 2018/10/10 | 17:30 |
| 🔗 | 【SGH】12月の活動がHPへアップされました | Munetaka Soai U | 3K | 2019/01/18 | 9:18 |
| 🔗 | 【SGH】12月分までのグローバルキャリア講座Youtube一覧 | Munetaka Soai U | 133K | 2018/12/14 | 16:45 |
| 🔗 | 【SGH】2018グローバルキャリア講座YouTUBE一覧 | Munetaka Soai U | 135K | 2019/02/14 | 15:53 |
| 🔗 | 【SGH】2018前期グローバルキャリア講座講師予定 | Munetaka Soai U | 46K | 2018/04/12 | 15:58 |
| 🔗 | 【SGH】2018筑波ハイウェイ大学STEMS2プログラム研修... | Munetaka Soai U | 1.5M | 2018/05/01 | 15:30 |
| 🔗 | 【SGH】2018年度グローバル①②の講演動画 | Munetaka Soai U | 1M | 2018/05/14 | 15:51 |
| 🔗 | 【SGH】2019年Global Citizens Initiative (GCI) 高校生の... | Munetaka Soai U | 21M | 2018/11/12 | 12:44 |
| 🔗 | 【SGH】5/7(月)9年対象グローバルキャリア講座講師 | Munetaka Soai U | 309K | 2018/04/13 | 13:02 |
| 🔗 | 【SGH】5月14日(月)1時限目12年生学年グローバル... | Munetaka Soai U | 293K | 2018/05/10 | 9:30 |
| 🔗 | 【SGH】6月25日(月)1時限目10年生対象グローバル... | Munetaka Soai U | 260K | 2018/06/14 | 8:51 |
| 🔗 | 【SGH】9年・10年対象 筑波大学ジュニアグローバル... | Munetaka Soai U | 1.2M | 2018/06/15 | 8:30 |
| 🔗 | Re: 【SGH】9年・10年対象 筑波大学ジュニアグローバル... | Munetaka Soai U | 1.3M | 2018/06/18 | 10:11 |
| 🔗 | 【SGH】Fwd: 国連関連のイベントのお知らせ | Munetaka Soai U | 3K | 2018/10/10 | 13:11 |
| 🔗 | 【SGH】Fwd: 上智大開催の国連weeksのお知らせ | Munetaka Soai U | 3K | 2018/05/25 | 10:15 |
| 🔗 | 【SGH】SGH、SSH関連年間予定表、 | Munetaka Soai U | 683K | 2018/04/18 | 17:56 |
| 🔗 | 【SGH】SGH香港大学グローバルリーダーズ・プログラム... | Munetaka Soai U | 509K | 2018/10/12 | 8:08 |
| 🔗 | 【SGH】アメリカンスタディーズ2018参加者募集4月28日(... | Munetaka Soai U | 192K | 2018/04/18 | 17:56 |
| 🔗 | 【SGH】アメリカ大使館主催Girls Unlimited Program 201... | Munetaka Soai U | 12K | 2018/09/15 | 9:11 |
| 🔗 | 【SGH】グローバルキャリア講座開催12/13昼@多目的室 | Munetaka Soai U | 333K | 2018/12/10 | 9:10 |
| 🔗 | 【SGH】トビタテ！留学JAPAN奨学金紹介 | Munetaka Soai U | 1.7M | 2018/09/04 | 12:14 |
| 🔗 | 【SGH】玉川スーパーグローバルリーダーズ48ポイント申請につい... | Munetaka Soai U | 244K | 2019/01/07 | 12:08 |
| 🔗 | 【SGH】参加者急募！3/6サステナブル・ブランド国際会... | Munetaka Soai U | 427K | 2019/02/27 | 13:49 |
| 🔗 | 【SGH】前期分グローバルキャリア講座Youtube一覧 | Munetaka Soai U | 404K | 2018/07/13 | 14:34 |
| 🔗 | 【SGH】筑波大学主催春期海外研修のお知らせ | Munetaka Soai U | 2.1M | 2018/10/19 | 14:10 |
| 🔗 | 【SGH】最後！12/14グローバルキャリア講座のお知らせ | Munetaka Soai U | 327K | 2019/02/13 | 9:05 |

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

構想調査にも記している通り、本校の SGH 最終年度はイギリスの教育 NGO サステイナビリティ・フロンティアーズ（以下 SF）による外部評価を受ける年であり、その報告書概要（日本語）を以下に記す。第3章（p.13）が本校の SGH カリキュラムについて言及されている。本文（英語）は巻末に収録した。

Tamagawa Academy Super Global High School (TSGH) Program
- *Awakening the Whole Person to Become Global Leaders of International Organizations* -

Final External Evaluation

玉川学園スーパーグローバルハイスクール(TSGH)
「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」
最終外部評価報告書

David Selby with Fumiyo Kagawa
Sustainability Frontiers

デービッド・セルビー、香川文代
サステイナビリティ・フロンティアーズ

11 March 2019



概要

1章：はじめに

これは、2014年6月から2019年3月まで実施された 玉川学園スーパーグローバルハイスクールプログラム「国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成」の第三回・最終外部評価報告書である。玉川学園 SGH は国際機関や国際 NGOs でリーダーとして活躍する為に、生徒に全人的リーダーの資質や能力を育むことを目的としており、9年から12年の生徒全員を対象に行われた。生徒は貧困、人権、環境、外交（リーダーシップ）、国際協力の TSGH の5つの研究テーマ群から一つを選び、TSGH への参加を通じて選択したテーマに関する資質・能力を高めていくよう求められた。

玉川学園は英国の国際教育研究・開発 NGO サステナビリティ・フロンティアーズによる外部評価を依頼し、本調査研究は5年間全体について評価する為に、次の目的で2018年12月から3月に実施された。

- 主な利害関係者の TSGH の経験についての考察
- TSGH の生徒と教師への影響の考察
- TSGH の玉川学園全体への影響の考察
- TSGH の達成事項と達成に及ばなかった点についての考察
- TSGH のレガシーに関する考察

2章：調査方法

この外部評価調査は玉川学園より提出された TSGH に関する情報、関連文献とスカイプによる個人もしくはグループインタビューによるデータを収集、分析して行われた。前2回の評価調査方法と今回の調査方法が異なるのは、生徒と保護者へのアンケート調査を含んでいない点、インタビューをスカイプにて日本語・英語の通訳を通じて行った点である。個人インタビューは高等部部長、K-12 教学部長、高等部教務主任、玉川学園 SGH 主任に対して行われた。TSGH 関連の主要科目・プログラム担当教員と参加生徒へのインタビューは、教員と生徒別に以下のように行われた。

- グローバルスタディーズ（教員2名、生徒4名）
- ワールドスタディーズ（教員3名、生徒3名）
- ヨーロピアンスタディーズ（教員5名、生徒5名）
- アフリカンスタディーズ（教員5名、生徒5名）
- 模擬国連（教員2名、生徒5名）
- ラウンドスクエア（教員1名、生徒5名）

更に SGH 常任委員会メンバー（10名）、保護者（6名）、玉川学園卒業生（4名）に対するグループインタビューが行われた。

全てのインタビューは参加者に事前に承諾を取った上で録音した。集めたデータ（部分的に書き起

こしたインタビューデータとメモ）は報告書作成前に認識されたパターンごとに色分けし分析された。

3章：TSGH：フォーマルとノンフォーマルカリキュラム

3.1.TSGH の要素 TSGH には 8 つの要素があるが、そのうち 6 つは SGH 以前から存在しており、それらが全て TSGH の傘下に置かれるようになった。

3.2. グローバルキャリアセミナーシリーズ 過去 5 年を通じて、講師の選定、講座内容、生徒の参加方法、広報活動に改善がなされてきた。例えば、過去 3 年間は、生徒達自身が特定の講師や講座の内容をリクエストできるようなシステムが導入された。生徒が講座に関連するトピックを事前に調査研究し、講師の講義の前に発表したり、生徒が調べてきた質問に講師が答えたりということもなされるようになった。過去 5 年間を通じて、グローバルキャリア講座がカバーした TSGH の 5 つのテーマ間のバランスは 環境(11.2%)、貧困(14.4%)、人権(16%)、外交(リーダーシップ)(16%)、国際協力(42.2%) である。前回 2017 年の評価で、セミナーシリーズとカリキュラム間の連携の体制を整えるようにと提案したが、模擬国連の例(3.4.3)を除き、そのような体制は確立できていない。

3.3. スーパーグローバルリーダーズ 4 8 認定制度 9 年から 12 年生は在籍の 4 年間を通じて、TSGH ポイント換算表に示されたポイントを集め、毎年年度末に上位者は表彰される。TSGH の起案者は日本人の収集好きの性格から、これは生徒の意欲を高めるために良い制度であると考えたが、この制度に対する批判も上がっている。換算表に示された活動とポイントの関連は大雑把で（例えば、模擬国連の履修者に 3 ポイント、英語レシテーションコンテスト入賞者に 4 ポイント。英語力に関する項目にポイントが多く付いており、これは英語力がすなわちグローバルスキルという無意識のメッセージを与えている）、生徒からは高価な海外研修参加者に 4 ポイント与えるのは、経済的に恵まれた家庭からの生徒に有利になるのではないかという声も上がっている。ポイント集め自体が目的になってしまうという懸念もある。この制度は、TSGH 終了と共に終了する。

3.4. 選択プログラム・科目

3.4.1. グローバルスタディーズ 研究したい問題がある生徒がこの科目を選択する傾向がある（例えば、南アフリカに興味を持つ生徒や東京オリンピックに興味を持つ生徒）。自分が研究したいことを自分が掘り下げたいレベルまで取り組めること、学際的なトピックに関してこの科目以外の教師からも指導してもらえることが魅力的である一方、大変な努力を要することからこの科目の選択に尻込みする生徒もいる。科目名に「グローバル」とあるが、インタビューに参加した生徒たちはそれがローカルと繋がっていることをよく認識している。この科目での研究に使う国際的な文献の多くが英語であることから、この科目を履修しようと考えたと指摘する生徒達もいた。この科目は一年の最初の半分は生徒が様々な問題に興味を示すように対話型学習で進め、徐々に生徒の個人プロジェクトへのアドバイスを与えるという指導法に移り変わる。教師は問題の掘り下げ方、研究の枠組みや問いかけの仕方、研究した内容の発表の仕方を指導する。履修生徒は「したいことができる」、「やる気があれば、手助けしてもらえる」、「研究した内容を学外に向けて発表できる」ということがこの科目の良い点であると指摘した。

3.4.2. ワールドスタディーズ この 12 年の選択科目は英語と日本語で別々に時間割の中で並行して行われる。授業で扱われるテーマはマスメディア、貧困、偏見、差別、人権、国際協力、SDGs、気候変動など多岐にわたる。履修生徒はこの科目は他の科目と違って、生徒の意見を重視し、生徒は討論や議論に参加する機会が多いと指摘した。ロールプレイ、シュミレーション、小グループ、クラス全体での活動は、まず感情面での反応を扱ってから、主な問題を扱う。担当教員は、物議を醸し出さないようなテーマ（メディア）を導入して討論や議論の仕方を練習し、徐々に意見が分かれるような難しいテーマを導入している。授業が進むにつれ、感情的知性を伸ばしていくことに重きが置かれる。履修生徒は履修期間中、ダイアリーに自分の考えや気持ちを記録する。履修生徒はこの科目が、自分の意識を高め、物の見方を変え、感情面で影響を与えたと話した。また、この科目のアクティブラーニングを通じて、同意形成、多様な視点の扱い方、自分の意見を持ち、それを話し合うということを学んだと報告した。この科目がキャリア選択に影響を与えたという生徒もいる。ある生徒は社会問題の解決に貢献するような仕事につく前に大学で社会問題について学びたい、またある生徒は難民に関する活動に関わる前に大学で難民について学びたいと考えるようになった。

3.4.3. 模擬国連 一般コースと IB コースの 9 年から 12 年の選択科目で、履修生徒達は主に英語を使い活動する。チームティーチング、異なるコースの生徒が共に学ぶ、生徒主導のアクティブラーニングの手法をフルに使う点がこの科目の特徴である。他の授業が扱わないようなグローバルな問題を扱い、扱う問題は生徒によって選ばれる。生徒が小グループで調査研究を進め、国連会議のロールプレイを行う。ほとんどの日本の学校で教えていない交渉力、同意形成力、問題解決力を育むことがこの科目の主な目的である。履修生徒は、TSGH 初年度から毎年 2 月に行われる玉川模擬国連会議の企画、準備、運営も行う。模擬国連教師自身は助言、事務、ファシリテーター役であると考え、一年間の授業が進むにつれ、徐々に生徒により責任を持たせて活動させるようにしている。インタビューに参加した履修生徒達は生徒主体のこの授業に満足しており、知らないことを他の生徒と共有しそれについて調査することを心地よく感じ、インターネットを使い調査していくのが他の授業と違う点であると報告した。TSGH 最終年では、生徒への勧誘に力を入れているのにもかかわらず、履修者が半減した。この科目には大変な努力を要する為に多くの生徒が尻込みしているからではないかと指摘する生徒の声がある。

3.5. 海外研修プログラム

3.5.1. アフリカスタディーズ 9 年から 12 年の海外研修の 1 つとして南部アフリカで貧困と人権に関する現地の実生活に密接した問題について学ぶ。2018 年は 20 名の生徒が南アフリカを 9 日間訪問し、貧困が蔓延する違法居住地、現地 JICA 事務所とその活動場所、ロベン島などを訪問。生徒の参加動機は多様。生徒は志望動機を書いたエッセイを提出、その後インタビューを受けて選抜される。参加応募人数は年により様々である。生徒は訪問国について興味を持った事柄を調査し、日本について現地で発表できるように参加前に準備する。現地ではガイドが付き添う為、同行の教員の役割は主に現地で動揺する生徒を励ましたり、夕方にグループで振り返りをする事である。参加生徒はこの研修に参加したことで物の見方が大きく変わったと報告する。このプログラムは同行の教員の物の見方にも大きな影響を与えた。2018 年度参加の生徒の 2 名は町田市主催のイベントに選出されて自分たちの経験を話し、全ての参加生徒は学校祭でポスター発表を行った。生徒のアフリカでの経験は特定の授業でのみ取り上げられた。

3.5.2. ヨーロピアンスタディーズ 玉川学園のゲーテ校との交流の長年の実績を元に立ち上げられたこの9年から12年生向けの研修は、SGH 期間の途中からヨーロッパにある国際機関を訪問し、ヨーロッパの文化や歴史を学び、世界の様々な問題に対して多角的な視野を育てるという研修に変更。2019年はオランダの国際司法裁判所、スイスの国連難民高等弁務官事務所、ポーランドのアウシュビッツ・ビルケナウ博物館などを訪問。生徒の参加動機は多様。事前準備として生徒は訪問国や訪問機関について調べ、調べた内容を出発前にお互いに発表し合う。参加前の異文化トレーニングはない。アウシュビッツ訪問は生徒と同行教員に大きな衝撃を与えた。物の見方や態度が大きく変わった参加生徒もいる。例えば、あるおとなしい生徒は参加を機に、発言することが大切であると感じ、クラスで発言するようになり、将来は世界の問題の解決に貢献したいと考えるようになった。参加生徒の多くは、国際機関や国際 NGO で働く日本人職員に大きく感銘を受けたと話した。参加生徒のグループは帰国後、全校生徒、また各学年に向けて対話型の発表を行った。授業で研修参加の経験を取り上げるようなことは稀であった。

3.6. ラウンドスクエアたまがわ会議 ラウンドスクエア実行委員会の所属は約60名で、15名ほどがたまがわ会議の実行幹部に属する。2018年の三日間の玉川会議では環境がテーマで、45名ほどの生徒が様々なトピックのワークショップや講義に参加。奉仕活動の一環として衣類を集めて貧しい国に送るということもなされた。参加生徒は、生徒主導で生徒自身の意見が尊重され、民主的に行われるこの活動にとっても満足している。インタビューを受けた生徒達は、この活動を通して異なる視点を発言することに自信を持つようになり、理解を深めるためにたくさん質問することが大切と感じ、授業でも多く質問するようになったと話した。生徒達は玉川学園がもっと奉仕活動にかかわるべきであるという意見を持っている。

3.7. カリキュラム開発とカリキュラムの連携に関する問題 TSGH のカリキュラムのアプローチは既存の選択科目を通して行われたことから、正規のカリキュラムの中でグローバルな学びの機会を得た生徒は少数である。教師への負担、既に一杯のカリキュラム、興味のなさなどから、グローバルな学びを必修にしたり、カリキュラムに横断的に導入していくことはなされなかった。カリキュラム全体で TSGH に関する知識、スキル、態度面でのラーニングアウトカムを綿密に計画することもなされなかった。海外研修の経験、グローバルキャリア講座を授業に結びつけて、学びを深めていくこともほとんどなされなかった。カリキュラム間の学びを結びつけるのはグローバルな学びに熱心な生徒自身であると、インタビューに参加した生徒は説明した。TSGH の正規カリキュラムと課外活動の結びつきはあるものの、それらは必ずしも計画的になされているわけではない。TSGH のカリキュラムについて様々な意見がある。グローバルな学びは、TSGH 選択科目以外には見当たらない、玉川学園はカリキュラム全体にグローバルな学びをとりいれていくべきだ、TSGH の科目は熱心な少数の生徒によって履修されていて大部分の生徒はグローバルな学びに興味を持っていないと指摘する生徒の声もある。教員からは、カリキュラムの連携、特に海外研修や海外からの学生をカリキュラムにもっと結びつけるべきであるという意見がある。教科間の連携としては、TSGH と TSSH に関わる教員間の連携などの例がある。SGH 主任は学校運営やカリキュラムに直接意見できる主任会や教科主任会のメンバーではなく、教科間のカリキュラムの内容に提言を与えにくくなっている構造問題があった。

4章：生徒への影響

4.1. TSGHの広がり TSGHに全校生徒の約50名(5.5%)が非常に熱心に参加、更に40名から50名ほど(4.4-5.5%)がよく参加したが、残りの大半(88.9%)の生徒はあまり参加しておらず、熱心に参加した生徒10%のうち80%は女子生徒である。3.4で示した履修者数を見ても、女子生徒が大半である。男女比にもっとバランスがとれるようにTSGHの活動に男子生徒を勧誘する対策が取られていただろうかと問いかける必要がある。

4.2. 認識の変化、個人のビジョンの変化 TSGHが参加生徒の意識に影響を与えたということはインタビューデータから明らかである。保護者からは、TSGHの参加に影響されて、子供が国際ボランティアに貢献したいと考えるようになった、問題を深く理解するようになった、カンボジアでのボランティア活動に参加したなどという例があげられ、インタビューに参加した保護者全員がTSGHが子供の進路選択に影響を与えたと指摘した。選択科目を履修した生徒はTSGHが、自分の意識、態度、自分自身や世界についての感覚に影響を及ぼし、その結果として行動に変化をもたらしたと報告した。アフリカスタディーズとヨーロッパスタディーズに参加の生徒は目から鱗が落ちるような根本的な意識の変化を経験している。例えば、南アフリカの貧富の甚だしい差に大きな衝撃を受け、社会問題を学びたいと思うようになった生徒や、アウシュビッツの衝撃から世界の問題の解決に貢献したいと考えるようになった生徒がいる。

4.3. 全人的グローバルリーダーの資質 TSGHは全人的グローバルリーダーに必要な資質能力は何かということを学年ごとの知識、スキル、態度面のラーニングアウトカムの枠組みとして作り出すことはなかった。このことは、教科横断的カリキュラム開発や綿密な生徒評価の妨げの一因となっている。その一方で「全人的グローバルリーダー」とは何かについてTSGHに深く参加した生徒や卒業生はTSGHの経験をもとに、玉川学園の最初の構想を超えて、素晴らしい考えを持っている。生徒達は共通して水平的なリーダーの資質を指摘したが、そのような意見は教員からはあまり出てこなかった。TSGHのレガシーとして水平的、協調的、包括的、奉仕的なリーダーという考えを含む「全人的グローバルリーダー」像を明確にすることが重要である。それは玉川学園の12信条の全人教育、労作教育、国際教育の付録として、もしくはこれらの概念を深めていくということになるかもしれない。

4.4. アクティブラーニング インターアクティブラーニング、体験型学習はTSGHの大きな特徴である。インタビューに参加した保護者達はインターアクティブラーニングによって子供達がエンパワメントされた、白熱した家族討議をするようになったという例を挙げた。TSGHの選択科目は(3.4参照)アクティブラーニングの様々な手法を使っている。玉川学園内でアクティブラーニングはもともと熱心だった教員を核に更に広がっている。

5章：レガシーの重要性

レガシーに関しての主な点、提案事項を以下に示す。

- レガシーの構築を効果的に行う為に、組織的、考察的、意図的、能動的なアプローチを数ヶ月、もしくは最後の2年をかけて、もっと徹底的に行うべきであった

- TSGH の終了にあたり、TSGH のレガシーを残し、そこから更に発展させていくような方法や手段を 考える為、部長や主な利害関係者（生徒を含む）で内部会議を行う
- 「全人的グローバルリーダー」についての概念を明確にし、それを玉川学園の学校方針に盛り込む
- カリキュラムに関する強いレガシーが作られていないが、玉川学園とサステナビリティ・フロンティアーズが共同で出版を準備している教師用のハンドブック、「グローバルな課題の解決に向けて：持続可能な開発目標を達成する為の学び」を活用し、カリキュラム全体でグローバルな学びを進めていく
- カリキュラム全体、学年ごとに、「全人的グローバルリーダー」の育成に貢献する知識、スキル、態度面のラーニングアウトカムを明確にする
- 刷新的な教授法を使い、生徒に深い学びの機会を与えてきたワールドスタディーを残すべきである
- TSGH の男女間の参加のバランスをとることに的を絞った対策を作り、それを実践する。そして、その結果を毎年考察する
- 生徒主導型学習、インターアクティブラーニング、参加型学習について事例を教師間で交換できるようなウェブ上のスペースを作り、時折教科間でイノベーションについて互いに学び合うような職員研修会を行う
- グローバルセミナーシリーズや TSGH 選択科目や海外研修から出てきたコミュニティーでのプロジェクトを通して、コミュニティーとのつながりの機会を増やしていく
- TSGH 実行委員会は新しい権限のもと、TSGH のレガシーを保ち、更に発展させていくべきである。ここに示された提案事項を取り扱う役割も与えられるべきである。

(2) 高大接続の状況について

2009 年度より玉川学園高等部は玉川大学を第一志望とする 12 年生を対象に、10 年時～12 年前期末までの GPA3.0 以上でかつ志望学部が示す条件を満たした生徒に対し、12 年後期の 9 月より、「玉川大学科目等履修生」として、大学の講義へ出席させている。また大学の成績基準を満たした者は大学の先取単位として認定し、最短で大学課程を 3.5 年で修了することができる制度を導入している。今年度は 29 名が対象となり、9 月以降の後期、玉川大学の授業を履修し進学した。

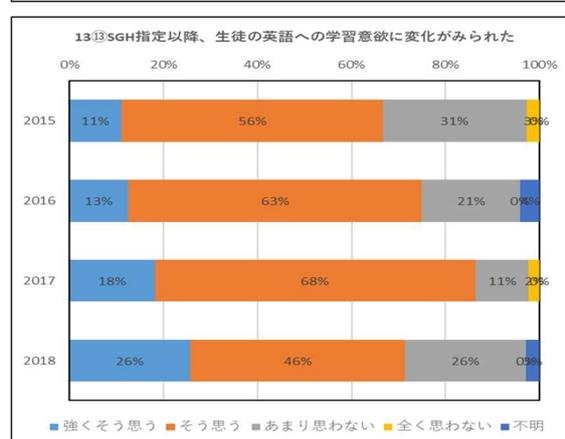
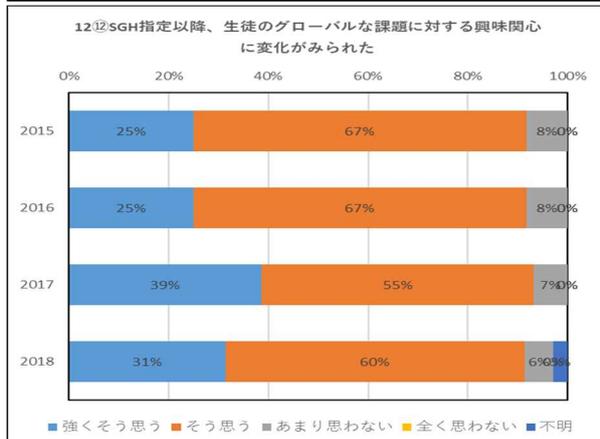
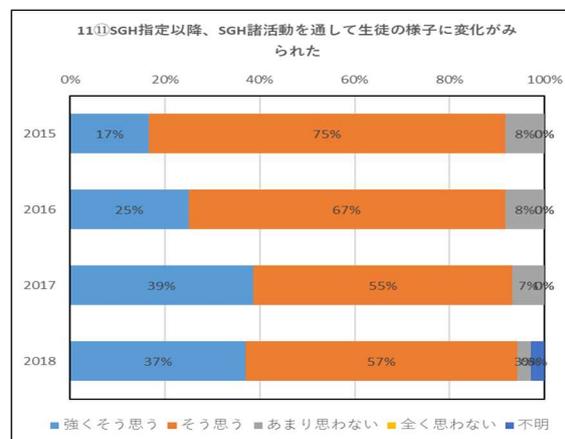
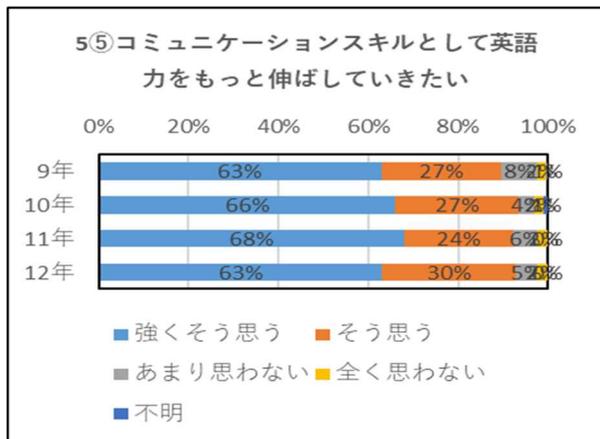
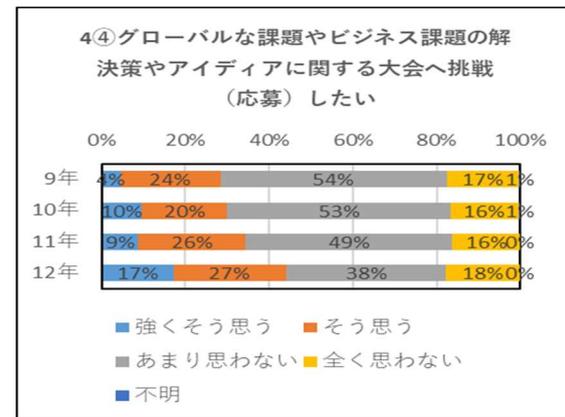
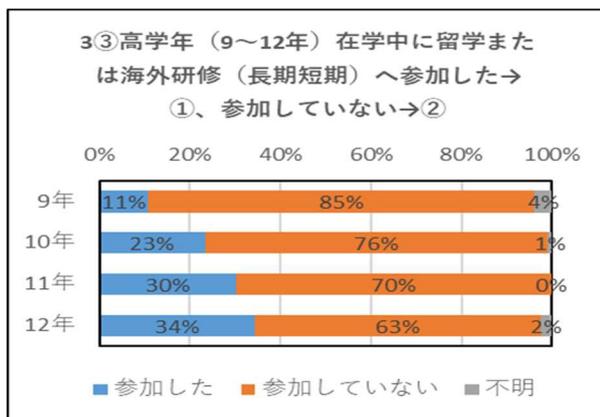
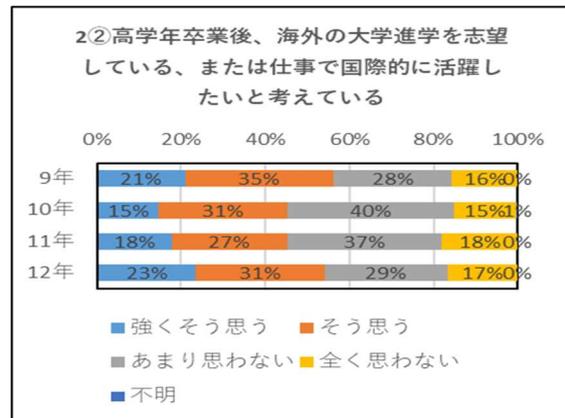
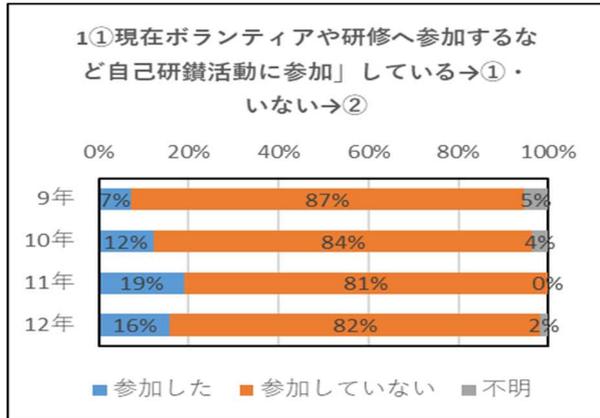
また SGH 指定の当初 3 年間 2014～16 年度は、立教大学スーパーグローバルサマーコースを実施し、合計 41 名（2014 年度 15 名、2015 年度 15 名、2016 年度 11 名）が SGU の立教大学異文化コミュニケーション学部において 3 日間の人権、環境、貧困など本学 SGH 研究テーマに準じた講義を大学教授陣から英語で受けた。

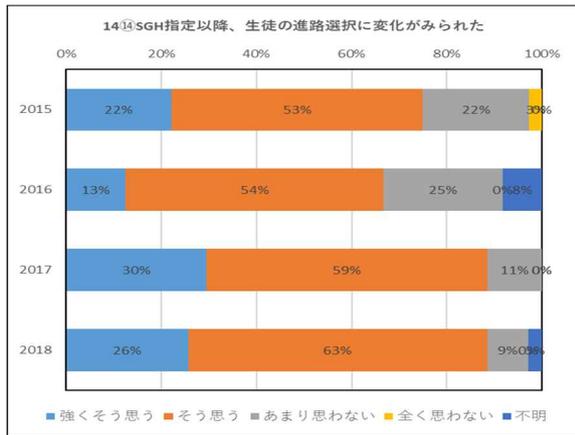
上記以外では、例年通り、グローバルキャリア講座や模擬国連への講師派遣を中心に玉川大学、政策研究大学院大学、上智大学と連携した。

(3) 生徒の変化について

SF による最終外部評価報告書 第 4 章 (p.17) に加え、年度末に実施してした「SGH/SSH 生徒意識調査」の結果を以下に記す。

◆過去4年間の意識変容について<2018年度卒業生を例として>

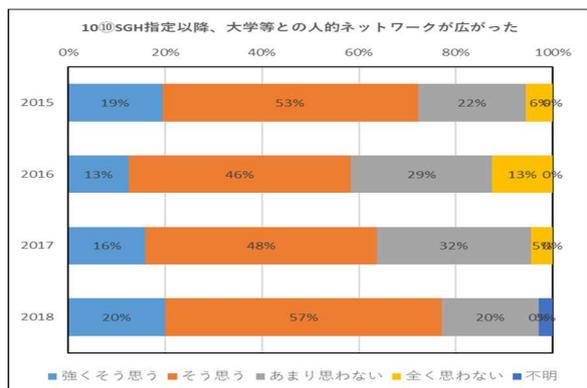
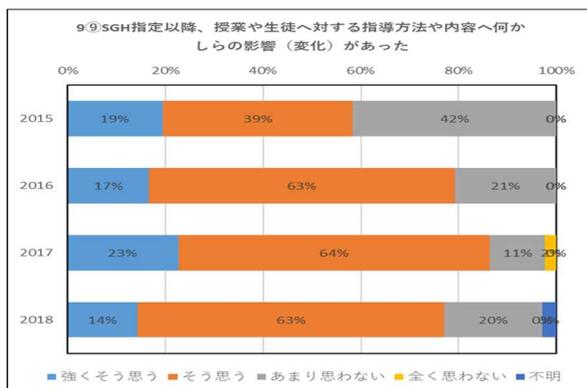




約半数以上の生徒が12年生で「高等部卒業後、海外の大学進学または国際的に活躍したいと考えている」と回答した（表2）。また在学中、約34%の生徒（約80名/237名）が海外研修に参加した。「グローバルな課題やビジネス課題の解決策やアイデアに関する大会へ挑戦したい」と回答した生徒へ年々増加し、年齢が上がるにつれて、より社会との接点をもって認められたいという欲求が増加していることが分かった（表4）。また「5. コミュニケーションスキルとしての英語力を伸ばしたい」と回答した生徒は、4年間の在学中その高い学習動機は一貫して保持されており、英語力向上、コミュニケーション力の向上への意識を滋養することができた。この英語への学習動機の向上は生徒自身からのみならず、教師側の視点からそのように感じとられていた（表13）。しかし、SGHの研究や学びを自分の問題としてとらえて、行動へ移せる生徒は残念ながら増加しなかったという課題が残った（表1）。

また表11～14の「教師の意識調査」結果からも、教師からみてSGH指定以降、毎年約8割以上の教師が生徒へ対して「SGH諸活動から何らかの変化を受けて変化がみられる」としていた。特に指定4年次と5年次は9割近い教師がそのように感じ取っており、SGH影響が定着してきたとみることもできる。

(4) 教師の変化について



SGHは生徒のみならず教師自身にも変化をもたらしたことが上記の表からみてとれる。SF最終外部評価報告書（第4章4.p.17 アクティブラーニング）に同様の指摘がなされている。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

保護者の視点はSF最終外部評価報告書（第4章2.p.17）、授業に関する評価は同報告書（第4章4.p.17）に記されている。

(6) 課題や問題点について

SF 最終外部評価報告書（第 5 章レガシーの重要性、p.17）に記されている。

(7) 今後の持続可能性について

SF 最終外部評価報告書（第 5 章レガシーの重要性、p.17）に加え、SGH 実行委員会における議論を以下に記す。

| 業務項目 | | | | | | | | | | | | | |
|--|------------|------------|------------|-------------|------------|----------|------------|----------|----------|----------|-------------|----------|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | |
| ①グローバル キャリア講座 | | | 実施 | 実施 | | | 実施 | 実施 | | 実施 | | | |
| ②Tamagawa Academy Super Global Leaders 48 | 実施 せず | | | | | | | | | | | | |
| ③ワールド・ スタディーズ (World Studies) | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | | |
| ④アフリカン・ スタディーズ (African Studies) | 生徒 募集 | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 事前指 導/実施 | | 事後 指導 | 事後 指導 | | | | 検証 | | |
| ⑤自由研究 「グローバル・ スタディーズ」 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | |
| ⑥たまがわ会議 | 準備 | 準備 | 準備 | 実施 | | 検証 | | | | | | | |
| ⑦ヨーロッパ・ スタディーズ (European Studies) | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 参加生 徒決定 | 事前 指導 | 事前 指導 | 事前 指導 | 実施/事 後指導 | 事後 指導 | 検証 |
| ⑧模擬国連 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | |

- ① グローバルキャリア講座 → 年数回程度を予定
- ② Super Global Leaders 48 → 廃止。ただし、在学生が卒業するまでは記録を印刷できるようにシステムは維持。
- ③ ワールド・スタディーズ → 公民科選択科目として継続実施
- ④ アフリカン・スタディーズ → 実施
- ⑤ 自由研究「グローバル・スタディーズ」→ 担当教諭の専門性を重視し、自由研究「国際関係」および自由研究「言語学」の2つへ分割し実施
- ⑥たまがわ会議 → 実施
- ⑦ヨーロッパ・スタディーズ→ 実施
- ⑧模擬国連 → 全学年共通自由選択科目から自由研究（総合的な学習の時間）へ科目変更して実施

今後も引き続き管理機関の担当部署（学園教学部）と連携を図り、学校法人全体として目指す方向性の確認や予算の調整、ホームページや学校説明会における広報（普及）活動を行う。

【担当者】

| | | | |
|-----|------------|--------|---------------------------|
| 担当課 | 学園教学部学園教学課 | T E L | 042-739-8081 |
| 氏 名 | 横松 健二 | F A X | 042-739-8929 |
| 職 名 | 学園教学課長補佐 | e-mail | k12affairs@tamagawa.ed.jp |

平成 30 年度 (2018～2019) SGH 課題研究成果報告書

◆課題研究について 実施報告と分析・課題

①グローバル・キャリア講座 2018

【実施報告】

| 業務項目 | | | | | | | | | | | | |
|------------------|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| ①グローバル キャリア講座 | | 実施 | 実施 | 実施 | | | 実施 | | 実施 | 実施 | 実施 | |

(1) 全校・学年単位講話形式

今年度は右の表のようなかたちで実施した。学事日程の関係で日程の確保に苦勞したものの、各学年に均等に学年講話の機会を得ることができた。

| 学年 | 時数 | 講座番号 |
|------|-----|------|
| 9年生 | 1時間 | ①回目 |
| 10年生 | 1時間 | ④回目 |
| 11年生 | 1時間 | ③回目 |
| 12年生 | 1時間 | ②回目 |
| 全校対象 | 2時間 | ⑦回目 |

| 日付 | 時間 | 講師(敬称略) | 所属 | 形式 | 略歴【テーマ分野】 |
|-----------|-------------|---------|--|--------|--|
| ①5/7(月) | 8:30-9:30 | 関岡 智美 | International Monetary Fund 国際通貨基金シニア広報マネージャー | 9年 | 高校卒業後、英国へ留学。事情により中退し帰国。様々な職を経てテンプル大学ジャパン(教養学部経済学科)に編入。大学在学中の1997年からブルームバーグニュース東京支局でインターンを始め、卒業後は記者(英語ニュース)として金融・通信業界などを担当。2007年に記者から広報に転身し、日系および外資系企業で広報を担当。2010年にIMFアジア太平洋地域事務所の広報マネージャーとして着任。フルタイムで働きながら1年間大学院に通い、2012年早稲田大学公共経営研究科修了、公共経営修士号取得。現在はメディア対応、国際会議およびセミナーの企画・運営、一般向けのアウトリーチ、採用広報などを担当。 【貧困】【国際協力】 |
| ②5/14(月) | 8:30-9:30 | 本杉 佳子 | 上智大学外国語学部3年 国連ボランティア(UNV)派遣 | 12年 | 2016年高等部卒のIB生。在学中に南アの学校へ短期交換留学に行き、アフリカ地域の社会課題へ強い興味を持つようになり、模擬国連やラウンドスクエアの活動などへ積極的に取り組んだ。高等部卒業後は、単身シエラレオネへ行きボランティアを行った。昨年は大学の制度で国連ボランティア(UNV)へ選出されて、ジンバブエへ派遣された。【貧困】【国際協力】 |
| ③6/4(月) | 8:30-9:30 | 畑井 智行 | 国境なき医師団 看護師 | 11年 | 1979年生まれ、福岡県出身。高校卒業後、4年間バックパッカーをしながらヨーロッパ・アジアのNGOで働く。2001年インドで大地震に遭ったのを機に看護師を志す。看護師として国内で8年間、赤十字病院ICUと沖縄の離島医療に従事。東日本大震災にはDMATとして参加。2013年より国境なき医師団に参加。緊急ミッションを中心に13回活動。内閣府の世界青年の船事業にも参加。【国際協力】 |
| ④6/25(月) | 8:30-9:30 | 井上 理咲子 | 国境なき医師団 薬剤師 | 10年 | 2005年東京薬科大学大学院卒業後、同年より慶応義塾大学病院にて薬剤師として勤務。2012年よりMSFの医療援助活動に参加。2013年より国立国際医療研究センター病院薬剤部に所属しながらMSFの医療援助活動を継続。1981年3月7日生まれ。東京都在住。2012年にマラウイへ派遣されて以降、南スーダン、リビア、熊本、ナイジェリア、シリアへ緊急派遣された。【国際協力】 |
| ⑤7/11(水) | 13:00-14:00 | 佐々木 真緒 | (株)ファーストリテイリング グユニクロ鶴川店店長 | たまがわ会議 | 2018年度“届けよう、服のチカラ”プロジェクト。衣料による難民支援。【国際協力】 |
| ⑥7/12(木) | 9:00-11:00 | 横澤 魁人 | AIESEC JAPAN 早稲田大学文化構想学部2年 | たまがわ会議 | 126の国と地域で活動する世界最大級の学生組織AIESECの日本支部として、海外インターンシップ事業を運営する学生団体。1962年に設立され、現在では国内25の大学委員会が活動している。日本では特定非営利活動法人(NPO法人)の資格を取得し、国内の学生や法人様に対して海外インターンシッププログラムへの参加を提供。【環境】 |
| ⑦10/17(水) | 13:30-15:00 | 山田 邦雄 | ロート製薬株式会社 代表取締役会長 兼 社長 | 全校生徒 | 1956年大阪府生まれ。1979年、東京大学理学部物理学科卒業。1990年、慶應ビジネススクールMBA(経営学修士)取得。1980年ロート製薬入社。1991年取締役就任、1996年代表取締役副社長、1999年代表取締役社長を経て、2009年より現職。目薬、胃腸薬、外皮用薬にとどまらず、2000年以降は本格的にビューティー関連に領域を広げ、幅広い商品開発を行う。2013年からは、再生医療、アグリ事業など新しい分野へも挑戦。再生医療研究企画部を新設し、再生医療ビジネスの推進を行っている。 |
| ⑧12/13(木) | 12:45-13:15 | 眞木 凌 | 玉川大学農学部4年 | TED | 2014年愛知高等学校卒業。2017年度 Tamagawa Global Leadership Fellows で最優秀賞を受賞。ユーラシアユースサミットや国連主催の第8回 国際学生リーダーシップ・シンポジウムなどへ参加。昨年度はアメリカ国務省主催「Study of the U.S. Institute for Student Leaders on Global Environmental Issues (SUSI プログラム)」日本代表として参加した。将来の夢は、熱帯地域の農家の方々に対して農業面での国際協力活動を行い、環境面にも配慮しつつ、農家の方々の生活をサポートすること。【環境】 |
| ⑨1/22(火) | 12:45-13:15 | 園部 哲史 | 政策研究大学院大学 (GRIPS)副学長・教授 | TED | 1984年東京大学卒。1992年にアメリカYale大学で経済学博士を取得。専門は開発経済学で主に途上国における産業発展、汚職、貧困削減。研究や出版に関する受賞多数。2003年よりGRIPSに所属し、2014年より副学長を務める。 【国際協力】【外交】 |
| ⑩2/14(木) | 12:45-13:15 | 村上 千恵 | 特定非営利活動法人 ダイヤモンド・フォー・ピース代表理事 | TED | 米国の大学院を卒業後、ハイチやラオスにて国際協力の仕事に携わる。帰国後、広告代理店、ビジネスコンサルティング企業勤務を経て、個人事業主として独立し教育事業を運営する。2008年結婚。自身に贈られた婚約指輪をきっかけに、ダイヤモンドの裏の問題に気づく。2009年~2011年国際協力機構(JICA)の専門家としてケニアに赴任。赴任中ダイヤモンドの裏の問題解決に貢献できないか考え、フェアトレードの手法が使えるのではという結論に辿り着く。シエラレオネやリベリアを視察した後、2015年ダイヤモンド・フォー・ピースを横浜にて設立。日本・リベリアにおける活動全般を指揮する。【人権】【貧困】【国際協力】 |



関岡智美氏 (IMF)



本杉佳子氏 (UNV 派遣・上智大学)



畑井智行氏 (国境なき医師団 看護師)



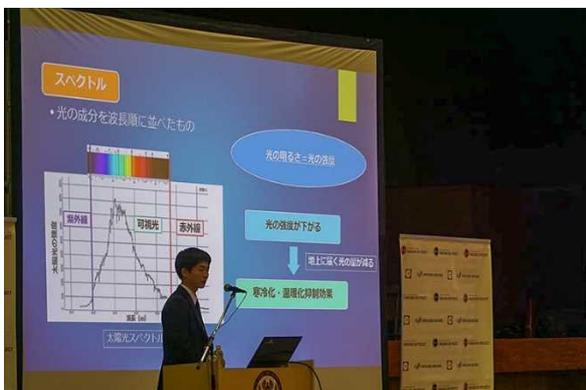
井上理咲子氏 (国境なき医師団 薬剤師)



山田邦雄氏 (ロート製薬会長)



会場の様子



SSH 代表生徒による研究発表



SGH 代表生徒による研究発表

(2) TED 形式 (⑧⑨⑩)



眞木凌氏 (玉川大学 4 年)



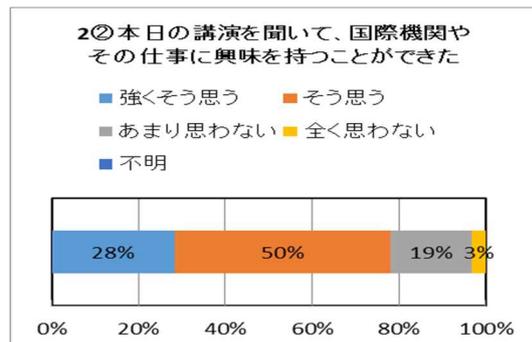
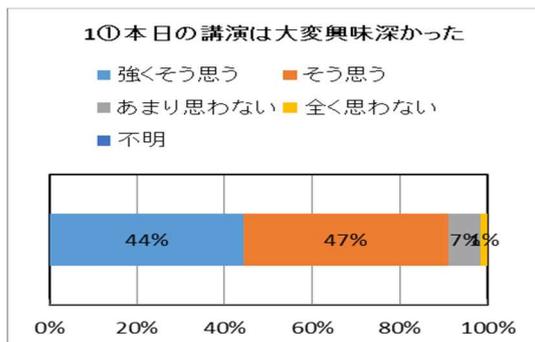
園部 哲史氏 (政策研究大学院大学副学長)



村上千恵氏 (ダイヤモンドフォーピース代表)

【分析】

国連機関である国際通貨基金、国際 NGO の国境なき医師団とダイヤモンド・フォー・ピース、国内で活動する国際的的学生団体 AIESEC、大学在学中に UNV へ派遣された本校卒業生、玉川大学で米国国務省のプログラムに選出された学生、難民支援をする企業「ファーストリテイリング」、国際的に拠点を持つロート製菓、各国の外交官などを輩出している政策研究大学院大学と多様な分野で活躍する講師を迎えることができた。合計 10 回計 1963 名の参加生徒があり、そのうち TED 方式では合計 188 名の参加者があった。今年度は、全校で参加する講話形式を 1 回、学年ごとに参加する講話形式を 4 回、生徒が主体的に参加する TED 形式を 3 回実施した。以下の表は今年度 10 回分の総計 (1963 人分) であるが、年間を通して約 9 割の生徒は講演内容を興味深いと感じ、国際機関やその仕事に興味をもつことができたという回答した生徒は 78%にのぼった。



| 玉川学園SQH事務局 ご協力いただいた招聘講師一覧(敬称略) 2014-2019 | | | | |
|--|------|------------|----------------------------|---------------------------------|
| | | 氏名 | 所属 | |
| 2014年度 | 1 | GC講師 | 伊藤 光子 | 元外務省国際機関人事センター長 |
| | | たまがわ会議 | 井澤 友郭 | 子ども国連環境会議推進協会代表 |
| | | たまがわ会議 | 五十嵐 淳哉 | IB卒業生 2012年度 |
| | | たまがわ会議 | GAKKO | 学生団体 |
| | | 立教サマコース | ステファン・ジョンソン | 立教大学異文化コミュニケーション学部助教授 |
| | | 立教サマコース | ポール・カニング・ハム | 立教大学異文化コミュニケーション学部教授 |
| | | GC講師 | 小野山 亮 | 特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター |
| | | GC講師 | 関谷 武司 | 関西学院大学国際学部教授 |
| | | GC講師 | 小林 さより | 特定非営利活動法人 国境なき医師団日本 |
| | | GC講師 | 林 達也 | 関西学院大学総合政策学部4年 |
| | | GC講師 | 内海 旬子 | 特定非営利活動法人 地雷廃絶日本キャンペーン |
| | | GC講師 | セム・ソワタ | ピースボート地雷廃絶日本キャンペーンP-MAC |
| | | GC講師 | 浦 輝大 | 元国際協力機構職員 |
| | | GC講師 | 関 健作 | 元青年海外協力隊隊員 |
| | GC講師 | ミッシェル・チクワニ | 特定非営利活動法人 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン | |
| | GC講師 | 寺田 朗子 | 特定非営利活動法人 国境なき子どもたち | |
| | GC講師 | 坪井 健 | 駒澤大学文学部教授 | |
| | GC講師 | 武井 伸子 | ヒューマンライブラリー | |
| | GC講師 | 小関 春海 | ヒューマンライブラリー | |
| | GC講師 | 清水 俊弘 | 日本国際ボランティアセンター | |
| | GC講師 | 太田 美帆 | 玉川大学文学部准教授 | |
| | GC講師 | 小原 一仁 | 玉川大学教育学部准教授 | |
| 2015年度 | 1 | 国際機関フォーラム | 萩野 敦年 | 外務省 総合外交政策局 国際機関人事センター |
| | | 国際機関フォーラム | 佐崎 淳子 | 国連人口基金東京事務所 |
| | | 国際機関フォーラム | 平林 国彦 | 国連児童基金 東京事務所 |
| | | 国際機関フォーラム | 村上 秀樹 | 国連工業開発機関 東京投資・技術移転促進事務所 |
| | | 国際機関フォーラム | 野口 義明 | 国連開発計画 |
| | | 国際機関フォーラム | 野副 善緒 | 国連世界食糧計画 |
| | | 国際機関フォーラム | 遠藤 衛 | アフリカ開発銀行 アジア代表事務所 |
| | | 国際機関フォーラム | 今城 大輔 | 国連難民高等弁務官事務所 UNHCR |
| | | 国際機関フォーラム | 安居 信之 | 関西学院大学 |
| | | 国際機関フォーラム | 石井 由希子 | 日本紛争予防センター |
| | | 国際機関フォーラム | 矢野 麻美子 | 内閣府 国際平和協力本部事務局 |
| | | GC講師 | 板垣 文子 | 内閣府国際平和協力本部 PKO |
| | | GC講師 | 境 悠一郎 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | GC講師 | Damian Keyte | Director, It's Not Just a Mud |
| | | GC講師 | 三田 真秀 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | GC講師 | 平井 礼子 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | GC講師 | 藤井 広重 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | GC講師 | 阿部 豪 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | GC講師 | 一盛 和世 | 元世界保健機構 |
| | | GC講師 | 広本 正都子 | 国際労働機関元職員 |
| | | たまがわ会議 | 鈴木 りえ子 | シニア・プロフェッショナル理事 |
| | | たまがわ会議 | 吉田 邦明 | ユニクロ町田ミナナ店長 |
| | | たまがわ会議 | GAKKO | 学生団体 |
| | | 立教サマコース | ステファン・ジョンソン | 立教大学異文化コミュニケーション学部助教授 |
| | | 立教サマコース | ポール・カニング・ハム | 立教大学異文化コミュニケーション学部教授 |
| | | 立教サマコース | アマンダ・ワイス | 立教大学異文化コミュニケーション学部助教授 |
| | | GC講師 | Lundy Lewis | New Hampshire University PhD |
| | | GC講師 | 園部 哲史 | 政策研究大学院大学 GRIPS |
| | | GC講師 | 杉下 恒夫 | 国際開発機構理事 |
| | | GC講師 | 池上 彰 | ジャーナリスト |
| | | GC講師 | 岩佐 大助 | 高学年教諭 |
| | | GC講師 | 税所 里帆 | 玉川大学4年 |
| | | GC講師 | 笹川 亜紀子 | 国際協力銀行 |
| | | GC講師 | 戸田 亜理子 | JICA専門員 |
| | | GC講師 | 鈴木 義一 | 東京外国語大学大学院教授 |
| | | GC講師 | 大嶋 英一 | 玉川大学観光学部教授 |
| | | TMUN | 小尾 尚子 | 特定非営利活動法人国連UNHCR協会 |
| | | TMUN | 滝澤 三郎 | 東洋英和大学大学院教授 |
| 2016年度 | 1 | 国際機関フォーラム | 久木田 純 | 関西学院大学 |
| | | 国際機関フォーラム | 武市 二郎 | 独立行政法人国際協力機構 |
| | | 国際機関フォーラム | 萩野 敦年 | 外務省総合外交政策局国際機関人事センター |
| | | 国際機関フォーラム | 関岡 智美 | 国際通貨基金 |
| | | 国際機関フォーラム | 近藤 哲生 | 国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所 |
| | | 国際機関フォーラム | 田口 晶子 | 国際労働機関 |
| | | 国際機関フォーラム | 村上 秀樹 | 国際連合工業開発機関 |
| | | 国際機関フォーラム | 伊藤 光子 | 認定NPO法人 世界の子どもにワクチンを日本委員会 |
| | | 国際機関フォーラム | 藤野 康之 | セーブ・ザ・チルドレン ジャパン |
| | | 国際機関フォーラム | 中兼 耕平 | 内閣府国際平和協力本部事務局 |
| | | 国際機関フォーラム | 松本 彩香 | 日本赤十字社 |
| | | GC講師 | 田邊 宙大 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | GC講師 | 小林 綾子 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | GC講師 | 山上 遊 | (株)LEXIL |
| | | GC講師 | Muhammad Alayoubi | シリア人留学生 |
| | | GC講師 | 小山 淑子 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | たまがわ会議 | 安部 由起子 | ユニクロ相模大野ステーションスクエア店長 |
| | | たまがわ会議 | 安田 徹 | (株)ファーストリテイリング・ユニクロ総務・ES推進部 |
| | | たまがわ会議 | 難波 克己 | 玉川学園TAPセンター長 |
| | | 立教サマコース | ステファン・ジョンソン | 立教大学異文化コミュニケーション学部助教授 |
| | | 立教サマコース | ポール・カニング・ハム | 立教大学異文化コミュニケーション学部教授 |
| | | 立教サマコース | 並木 一美 | 立教大学異文化コミュニケーション学部教授 |
| | | GC講師 | 牛田 真也子 | 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン |
| | | GC講師 | 陳 天璽 | 早稲田大学国際学術院 |
| | | GC講師 | アグネス・チャン | 国連児童基金本部アジア親善大使 |
| | | GC講師 | 平原 弘子 | ベトナム事務所長 |
| | | GC講師 | Lintang Wibawa | GRIPS |
| | | GC講師 | 軍司 達男 | 国立研究開発法人科学技術振興 |
| | | GC講師 | 大森 功一 | 世界銀行東京事務所 |
| | | GC講師 | 大倉 由莉 | 立教大学4年生 |
| | | TMUN | 田瀬 和夫 | 大阪大学大学院公共政策研究科 |
| | | TMUN | 田口 晶子 | 国際労働機関 |
| 2017年度 | 1 | GC講師 | 西村 正二郎 | 内閣府国際平和協力本部 |
| | | GC講師 | 宮川(小林) 佳子 | 元JICA・ピースウィンズ・ジャパン・日本赤十字・外務省職員 |
| | | GC講師 | 松下 照美 | ケア・ア・ド・子どもたちの家」設立者 |
| | | GC講師 | 忍足 謙朗 | 元WFP(世界食糧計画)スーダン局長 |
| | | GC講師 | 杉田 文野 | 東京レイ・ボ・プライト 共同代表 |
| | | たまがわ会議 | 田部 裕作 | (株)ファーストリテイリング・ユニクロ町田鶴川店 |
| | | たまがわ会議 | 安田 徹 | (株)ファーストリテイリング・ユニクロ総務・ES推進部 |
| | | GC講師 | 関岡 智美 | 国際通貨基金(IMF)シニア広報マネージャー |
| | | GC講師 | 高井 研 | 国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC) |
| | | GC講師 | マサ・ヨシカワ | 映画プロデューサー・ディレクター |
| | | GC講師 | 鈴木 邦夫 | 特定非営利活動法人国際連合世界食糧計画WFP協会理事・事務局長 |
| | | GC講師 | 櫻井 葉奈 | 玉川大学ユネスコクラブ |
| | | GC講師 | 櫻井 佑樹 | 特定非営利活動法人 難民を助ける会(AAR Japan) |
| | | GC講師 | 穂積 武寛 | 特定非営利活動法人 難民を助ける会(AAR Japan) |
| | | 難民映画祭 | アダム・ベイエ | スウェーデン大使館 広報部広報官 |
| | | TMUN | 株田 文博 | 政策研究大学院大学教授 GRIPS |
| | | TMUN | ポリコ・ンブリ チャールズ | FAO国際連合食糧農業機関 駐日連絡事務所 所長 |
| | | TMUN | 中川 慶 | 元慶応義塾大学模擬国連代表 |
| 2018年度 | 1 | GC講師 | 関岡 智美 | 国際通貨基金(IMF)シニア広報マネージャー |
| | | GC講師 | 本杉 佳子 | 上智大学外国語学部3年 |
| | | GC講師 | 畑井 智行 | 特定非営利活動法人 国境なき医師団(MSF)看護師 |
| | | GC講師 | 井上 理咲子 | 特定非営利活動法人 国境なき医師団(MSF)薬剤師 |
| | | たまがわ会議 | 佐々木 真緒 | (株)ファーストリテイリング・ユニクロ町田鶴川店 |
| | | たまがわ会議 | AIESTE JAPAN | 学生団体 |
| | | GC講師 | 山田 邦雄 | ロート製薬会長 |
| | | GC講師 | 真木 凌 | 玉川大学文学部4年 |
| | | GC講師 | 園部 哲史 | 政策研究大学院大学副学長 |
| | | GC講師 | 村上 千恵 | ダイヤモンドフォーピース |
| | | TMUN | 東 大作 | 上智大学教授 |
| | | TMUN | 中川 慶 | 元慶応義塾大学模擬国連代表 |

②Tamagawa Academy Super Global Leaders 48

玉川学園スーパーグローバルリーダーズ48活動の概要

文科省から本学への「スーパーグローバルハイスクール」指定に伴い、「グローバルな」諸活動への生徒参加を促すために各活動へポイントを付与し、在学中に貯めた獲得ポイントに応じて上位の生徒を「玉川学園スーパーグローバルリーダーズ48」として認定、表彰する学内制度です。

| 活動名 | ポイント数 | 活動名 | ポイント数 |
|-----------------------------|-------|---------------------------|-------|
| 英語を使った外部コンテスト入賞 | 5 | グローバルキャリア（GC）講座参加 | 3 |
| 模擬国連で学校代表または海外開催派遣 | 5 | 英語エッセイコンテスト応募 | 3 |
| 日本語論文コンクール入賞 | 5 | 英語を使った各種コンテスト応募 | 3 |
| 高2（11年）学内スピーチコンテスト1～3位 | 5 | レシテーションコンテスト入賞 | 3 |
| プレゼンテーションコンテスト入賞 | 5 | 英検準2級 | 3 |
| 生徒発表会「金賞」および9年「学びの技」優秀賞 | 5 | TOEIC 385～549点 | 3 |
| 英検準1級・1級 | 5 | GTEC350～549点、690～959(4技能) | 3 |
| TOEIC 785点以上 | 5 | TOEFL 40～56点 | 3 |
| GTEC650点、1190以上(4技能)以上 | 5 | JICA 高校生国際協力エッセイコンテスト応募 | 2 |
| TOEFL 87点以上 | 5 | 日本国連協会「高校生のスピーチコンテスト」応募 | 2 |
| IELTS 5.5以上 | 5 | 課題研究テーマに関するコンテスト応募 | 2 |
| 課題研究テーマに関する海外研修参加 | 4 | 高3（12年）ワールド・スタディズ、WSE 修得 | 2 |
| 課題研究テーマに関する国内研修参加 | 4 | 自由研究グローバル・スタディズ修得 | 2 |
| 模擬国連国内練習会参加 | 4 | 自由研究アドベンチャー研究修得 | 2 |
| 海外来校生へのホームステイ提供（1回） | 4 | 高2（11年）「英語会話」修得 | 2 |
| 海外来校生の学内ホスト（1回） | 4 | 中3～高3（9～12年）「模擬国連」修得 | 2 |
| 課題研究テーマに関する成果発表・プレゼンテーション実施 | 4 | ラウンドスクエア実行委員 or 社会奉仕実行委員 | 2 |
| 高1（10年）レシテーションコンテスト1～3位入賞 | 4 | 留学フェア参加 | 1 |
| 高2（11年）学内スピーチコンテスト4位以下入賞 | 4 | 大使館イベント参加 | 1 |
| 生徒発表会「銀賞」受賞 | 4 | | |
| 中3（9年）生高円宮杯学校代表選出 | 4 | | |
| 高大連携 SGH 関連企画参加 | 4 | | |
| 英検2級 | 4 | | |
| TOEIC 550～784点 | 4 | | |
| GTEC 550～649点/960～1189(4技能) | 4 | | |
| TOEFL 57～86点 | 4 | | |
| IELTS 4.0～5.0 | 4 | | |

2018年11月

*対象となる検定・資格は中3～高3までの在学中全て、その他の記録は中学3～高校3年次、高校1年次入学者は3年次までの累積加算になります。

【実施報告】

2014年度よりSGH諸活動への参加を促すため、「玉川学園スーパーグローバルリーダーズ48(SGL48)」システムを構築して5年が過ぎた。今年後は例年と比べ、グローバルキャリア講座の回数が少なかったため、特に9年と10年生への周知に課題が残った。その結果、9・10年生と11、12年生との間にポイント差が拡大してしまった。

【成果】

システムを開始した2014年度には3技能が中心だった各種語学検定は、現在は4技能が中心となりつつある。それに伴い、今回新たにGTECとTOEICの4技能を含めたポイント換算表へ改定を行った。

●2018年度生徒参加SGL48登録項目の一部(学内含)
 <SGH関連イベント>

| イベントID | 年月日 | イベント名 | Point | 参加数 | 9年 | 10年 | 11年 | 12年 |
|----------|------------|--------------------------------|-------|-----|----|-----|-----|-----|
| 20180058 | 2019/03/06 | サステナブル・ブランド国際会議2019参加 | 4 | 3 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| 20180056 | 2017/04/10 | 日本国連協会のロンドン大学で学ぶ英語研修と... | 4 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 20180055 | 2018/10/06 | オーストラリア留学フェア | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 20180054 | 2018/10/25 | カタリバ「オリンピック・パラリンピックに向け... | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180053 | 2018/07/23 | さくらサイエンスプランハイスクールプログラム | 3 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180052 | 2018/03/30 | 学生・教職員による2018平昌冬季パラリン... | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180049 | 2018/07/15 | シンポジウム「オリンピックパラリンピックの... | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180046 | 2018/10/10 | 町田〇ごと大作戦 運営ボランティア | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 20180043 | 2018/08/27 | 東京オリンピック構想WS全国高校生MYProject | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180041 | 2018/12/01 | アメリカ大使館主催「日本とアメリカを比較... | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180039 | 2018/08/06 | 第2回全国高校教育模擬国連大会 | 5 | 5 | 0 | 3 | 2 | 0 |
| 20180038 | 2018/12/26 | 模擬国連大会(大妻中学高等学校) | 5 | 2 | 0 | 2 | 0 | 0 |
| 20180036 | 2019/03/21 | 筑波大学WISTEAMプログラム(CA,USA)研... | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180031 | 2018/11/23 | Loochs Global Study Tour | 4 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 20180030 | 2018/11/08 | アメリカ大使館Girls Unlimited Program | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180029 | 2018/10/19 | 上智大学 難民映画祭 | 4 | 2 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| 20180022 | 2018/09/30 | ニュージーランド留学フェア | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180021 | 2018/08/08 | アメリカ大学留学フェア2018 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180019 | 2018/08/07 | JMM夏のボノシアスパーティー-8/7-14 | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180018 | 2018/09/06 | 筑波大学ジュニアグローバルリーダーズブ... | 4 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 20180011 | 2018/07/26 | UNICEF×東大英語討論会 派遣 | 5 | 2 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 20180010 | 2018/06/16 | 世界難民の日ソーシャルアクションin渋谷 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 20180009 | 2018/04/16 | Education USA主催「ミニカレッジフェア」 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180006 | 2018/03/30 | 模擬国連 浜幕会議参加 | 5 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |

<SGH関連コンテスト>

| イベントID | 年月日 | イベント名 | Point | 参加数 | 9年 | 10年 | 11年 | 12年 |
|----------|------------|----------------------------|-------|-----|----|-----|-----|-----|
| 20180057 | 2017/06/26 | 国連英検C級取得 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 20180042 | 2018/12/11 | キャリア甲子園 準決勝大会進出 | 5 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180037 | 2019/01/10 | JICA国際協力高校生エッセイコンテスト201... | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 20180035 | 2018/12/20 | 2018レシテーションコンテスト入賞 | 4 | 6 | 0 | 2 | 4 | 0 |
| 20180034 | 2018/12/20 | 2018レシテーションコンテスト参加 | 2 | 31 | 0 | 17 | 14 | 0 |
| 20180033 | 2018/12/20 | 2018レシテーションコンテスト/ボランティア | 1 | 35 | 0 | 20 | 15 | 0 |
| 20180023 | 2018/10/10 | まちだ〇ごと(まちだまるごと)大作戦18-2... | 5 | 3 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| 20180020 | 2018/08/07 | 第2回全国中高教育模擬国連大会優秀賞... | 5 | 2 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| 20180017 | 2018/08/31 | 津田塾大学第19回高校生エッセイコンテスト ね... | 2 | 7 | 0 | 0 | 7 | 0 |
| 20180016 | 2018/09/11 | JICA国際協力高校生エッセイコンテスト2018 | 2 | 32 | 0 | 3 | 3 | 26 |
| 20180015 | 2018/07/17 | 第10回高校生英語エッセイコンテスト開学... | 3 | 3 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| 20180008 | 2018/02/04 | 玉川模擬国連会議最優秀大使賞 | 5 | 2 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| 20180007 | 2018/03/11 | 第6回東日本高校生フランス語暗唱コンク... | 3 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |

< 生徒研究発表 >

| イベントID | 年月日 | イベント名 | Point | 参加数 | 9年 | 10年 | 11年 | 12年 |
|----------|------------|----------------------------|-------|-----|----|-----|-----|-----|
| 20180051 | 2017/11/11 | 中高生が語るインドスタディーツアー報告会... | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180050 | 2018/09/30 | 第9回カンボジア day | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180048 | 2019/02/16 | H30年度SGHSSH研究発表会ポスター発表② | 4 | 7 | 0 | 2 | 5 | 0 |
| 20180047 | 2019/02/16 | H30年度SGHSSH研究発表会ポスター発表① | 4 | 62 | 3 | 23 | 33 | 3 |
| 20180045 | 2019/02/16 | H30年度SGHSSH研究発表会口頭発表 | 4 | 7 | 0 | 2 | 5 | 0 |
| 20180028 | 2018/12/15 | 2018年度SGH全国高校生フォーラムポスター... | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 20180027 | 2018/12/23 | 第3回関東・甲信越静地区 スーパーグロー... | 4 | 3 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| 20180026 | 2018/10/27 | 第7回探究型学習発表会 SGH研究発表 | 4 | 32 | 0 | 5 | 25 | 2 |
| 20180025 | 2018/10/17 | GC講座⑦生徒研究発表 | 4 | 2 | 0 | 0 | 1 | 1 |

③ 12年公民科選択科目「ワールド・スタディーズ」(4単位)

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|--------------|------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| ワールド・スタディーズ③ | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | |

(2) 実績の説明

1. 参加者

ワールド・スタディーズ 28名

ワールド・スタディーズⅡ(12～2月12年生特別講座)7名 延べ35名

2. 日時

① ワールド・スタディーズ

4月～12月 4単位・火曜および金曜の3～4時限目 計76時限

② 12年生特別授業 ワールド・スタディーズⅡ

1月12日～2月1日 計15時限

場所 高学年校舎315教室

3. 内容

① ワールド・スタディーズ

学習目標

- 個人として人間の価値、他の人々の価値、社会的、文化的、家族的背景を尊重する心を育てる。
- 多様な文化が存在する社会、相互依存的な世界で生活する一員として、諸問題が自分たちに関わりのあることを知ろうとする積極性を養う。
- 他の文化の価値を発見し、それから学ぼうとする視点を重視する。
- すすんで他の人々と特に異なる文化や状況にある人々の感情や視点を想像しようとする洞察力を訓練する。
- 地域・国家・国際レベルにおいて、真の民主主義の原理を尊重し、より公正な世界を実現しようとする行動力をつける。

○ワールドスタディーズ年間実施実績

| 時期 | | 2018 | | | |
|-----|----|--------|-------------|----------------------------------|-----------------------|
| 4月 | 1 | 4月10日 | 導入 | WSとは何か | |
| | 2 | | | 自分の意見を主張する | |
| | 3 | 4月13日 | メディアの中の偏見 | スクラップテーマ登録・1日のニュース | |
| | 4 | | | 1日のニュース | |
| | 5 | 4月17日 | | イメージと認識・全体の絵～開発途上国における貧困のイメージと現実 | |
| | 6 | | | イメージと認識・全体の絵～開発途上国における貧困のイメージと現実 | |
| | 7 | 4月20日 | | 雑誌のなかのイメージ | |
| | 8 | | | ファッションモデル新聞記事・映像・フェイクニュース | |
| | 9 | 4月24日 | | TVコマーシャルの分析 | |
| | 10 | | | 討論 | |
| | 11 | 4月27日 | | 映画「ボーリング・フォー・コロンバイン」 | |
| | 12 | | | 映画「ボーリング・フォー・コロンバイン」 | |
| | 13 | 5月8日 | 貧困 | 無人島ゲーム | |
| | 5月 | 14 | | | 桑桑と子猫 |
| 15 | | 5月11日 | 貧困とは何か | ソリウスサムラ「エチオピア飢餓地帯に行く」 | |
| 16 | | | | 人生の機会 | |
| 17 | | 5月15日 | メディア | テレビ朝日出張授業「ニュース番組のつくられ方」 | |
| 18 | | | | テレビ朝日出張授業「ニュース番組のつくられ方」 | |
| 19 | | 5月18日 | 南北問題 | 貿易ゲーム | |
| 20 | | | | 貿易ゲーム | |
| 21 | | 5月29日 | | 貧困の輪 | |
| 22 | | | | 討論 | |
| 6月 | | 23 | 6月1日 | 人口問題 | 人口問題シミュレーション・途上国版＋日本編 |
| | 24 | | | 発表 | |
| | 25 | 6月5日 | 貧困、テロリズム、行動 | 映画「わたしはマララ」 | |
| | 26 | 6月8日 | | 映画「わたしはマララ」・討論 | |
| | 27 | 6月12日 | 難民問題とは何か | ⑩難民の肖像画/⑪難民についての意見のバッチ | |
| | 28 | 6月15日 | | 難民になること(シミュレーション) | |
| | 29 | 6月19日 | | ドキュメンタリー Living with Refugees | |
| | 30 | 6月22日 | 貧困と国際協力 | WFP忍足謙郎氏 | |
| | 31 | | | 討論・WFPエッセイコンテスト執筆 | |
| | 32 | 6月26日 | 差別と社会的暴力 | In Group Out Group | |
| | 33 | | | 青い目茶色い目 | |
| | 34 | 6月29日 | 人身売買 | ⑦アヤのストーリー | |
| | 7月 | 35 | 7月3日 | 異文化体験 | BafaBafa |
| | | 36 | 7月6日 | 未来 | FutureTimeLines |
| 9月 | 37 | 9月7日 | 子どもの権利 | 教室の中の権利 | |
| | 38 | | | 私たちの権利宣言 | |
| | 39 | 9月11日 | 人権とは何か | ドキュメンタリー「ノーマンミネタ9.11を救った日系人」 | |
| | 40 | | | ドキュメンタリー「ノーマンミネタ9.11を救った日系人」 | |
| | 41 | 9月21日 | | 権利と責任 | |
| | 42 | | | 権利と責任 | |
| 10月 | 43 | 9月25日 | | ④少女の権利 | |
| | 44 | 10月16日 | SDGsとは何か | 51.SDGsランキング | |
| | 45 | | | NHKクロ現「誰も置き去りにしない世界を目指して」 | |
| | 46 | 10月23日 | | ②⑤気候変動に対する行動 | |
| | 47 | | | Future Wheels「SDGsを考える」 | |
| | 48 | 10月26日 | | ②⑧グリーンベルト | |
| | 49 | | | ②⑨マータイの考え方 | |
| | 50 | 10月30日 | | ③⑩水問題 | |
| | 51 | | | | |
| 11月 | 52 | 11月2日 | 平和 | 「兵役拒否～イスラエル18歳の決断」 | |
| | 53 | | | 「兵役拒否～イスラエル18歳の決断」・討論 | |
| | 54 | 11月9日 | | 平和メッセージ合わせ | |
| | 55 | 11月16日 | エイズ問題 | 61.エイズフォトエッセー、62.エイズ止まった写真 | |
| | 56 | 11月20日 | 自分と人間関係 | 図形合わせ | |
| | 57 | | | 他人のなかの自分 | |
| | 58 | 11月27日 | 未来と行動 | USA for Africa | |

ワールド・スタディーズ

成績評価

ダイアリー・期末レポート・スクラップブック・グループワーク・学習参加度で評価。

評価割合 < レポート30%・ダイアリー30%・スクラップ20%・授業態度20%・ >

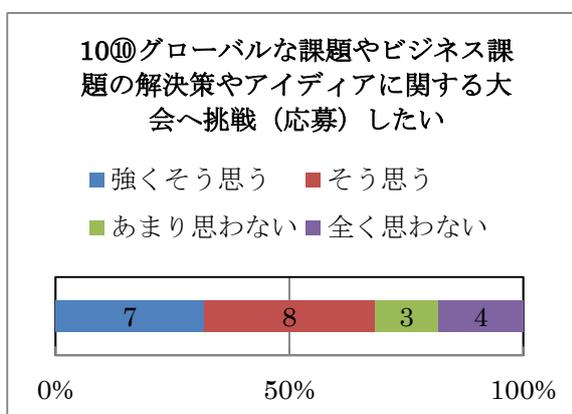
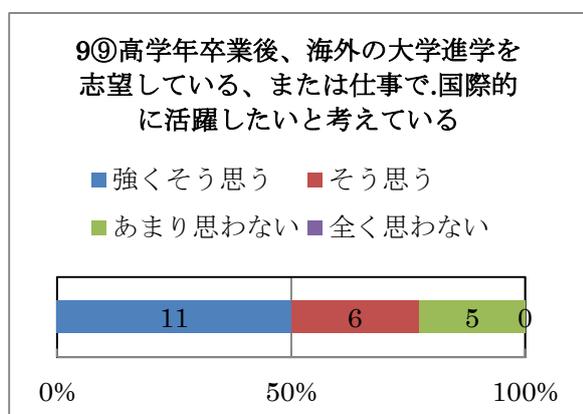
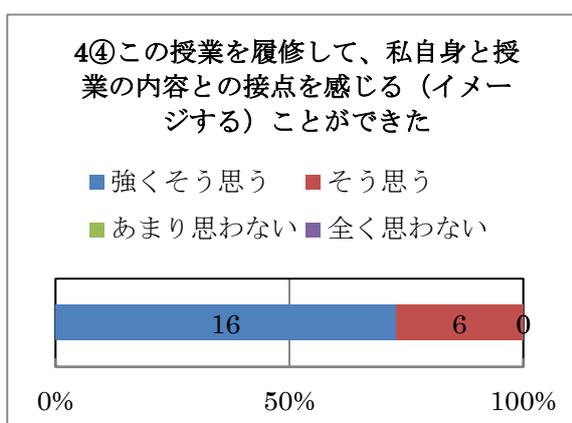
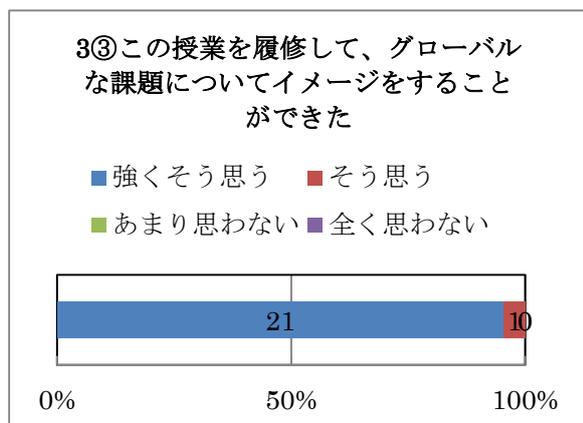
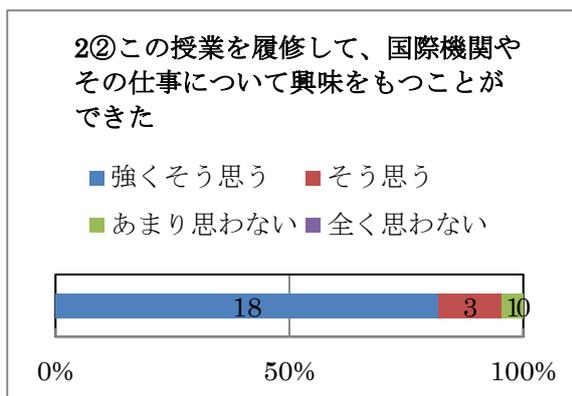
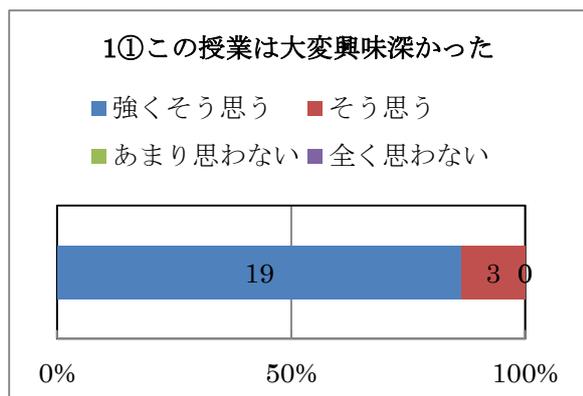
| | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 5 (100-85) | 4 (84-70) | 3 (69-50) | 2 (49-35) | 1 (34-0) |
|------------|-----------|-----------|-----------|----------|

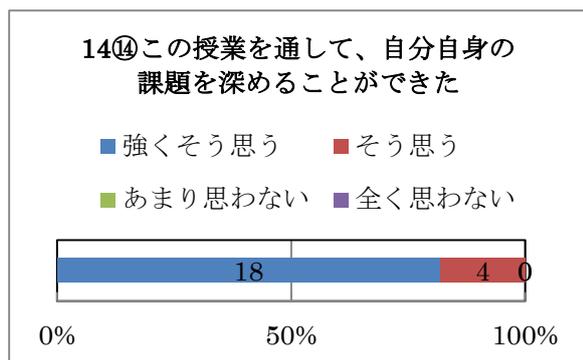
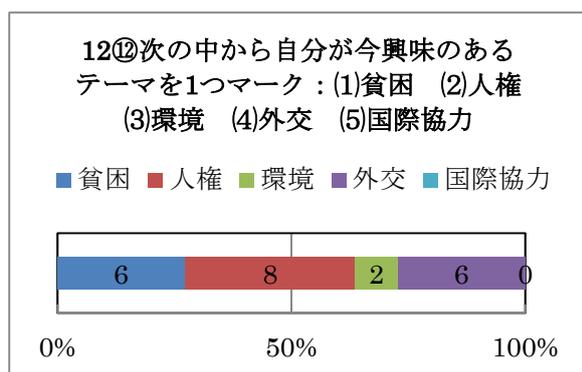
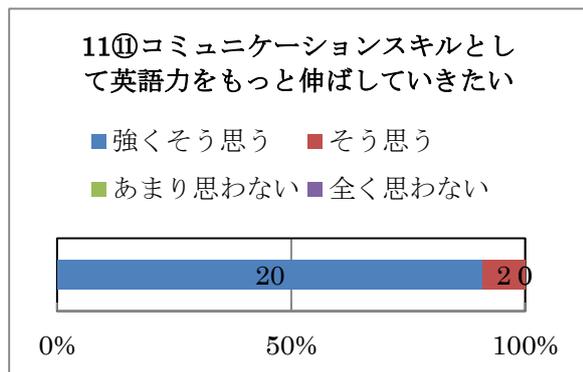
- 各テーマはグループワークとディスカッション中心のアクティブラーニング方式で行われた。
- 新聞スクラップ学習は以下のSGHの個人研究テーマ分野（貧困・人権・環境・外交・国際協力）より選択させ、4～11月末まで探究させた。

使用副教材

- ・ 「私と世界 6つのテーマと12の視点」綾部真雄編 メディア総研
- ・ 新聞記事、他

○年間評価表から



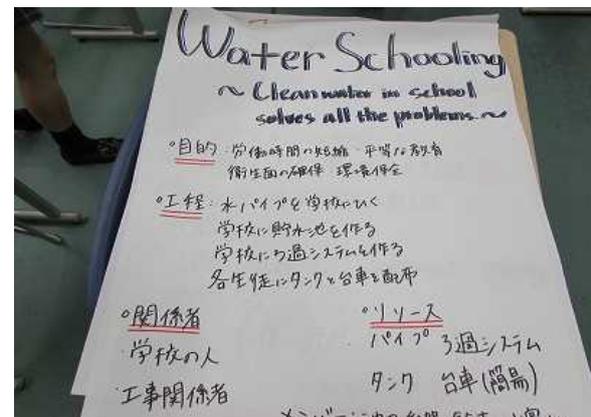
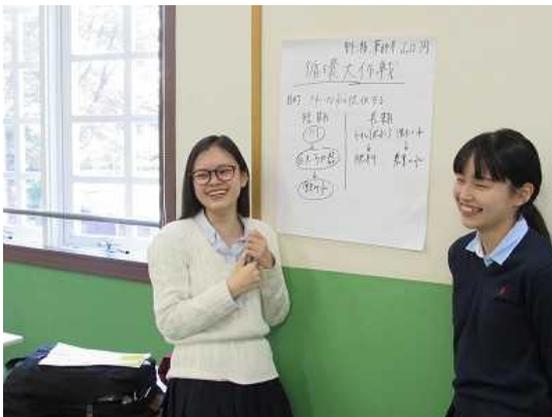
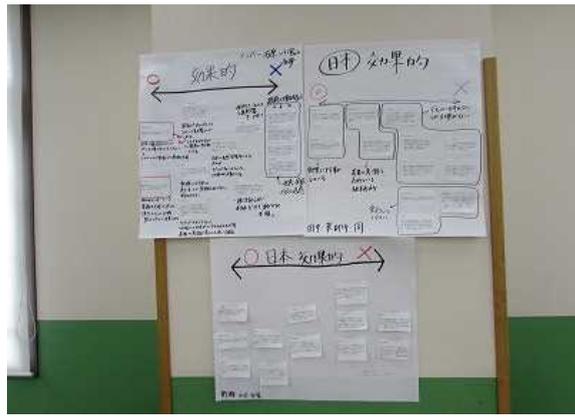


履修生徒による年間フォードバックシートの結果からみると、今年度も学習目標の達成が鑑みられる。特に、学習内容を自己の行動変容へつなげようという動機付け、および、本校 SGH 研究課題の国際機関へ対するイメージは生徒に植え付けられたのではないかと推察される。

② 12年生特別授業「ワールド・スタディーズⅡ」
学習テーマ 人生・開発・変化・和解・人生
実施日

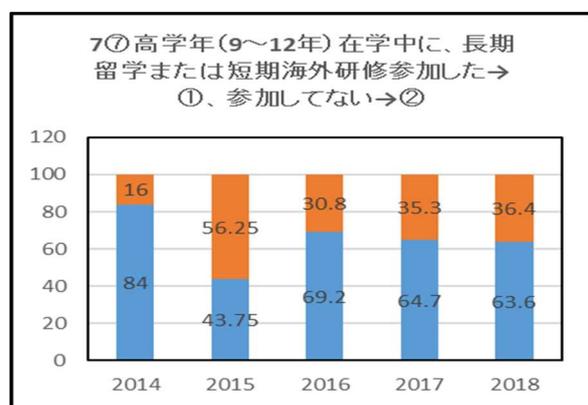
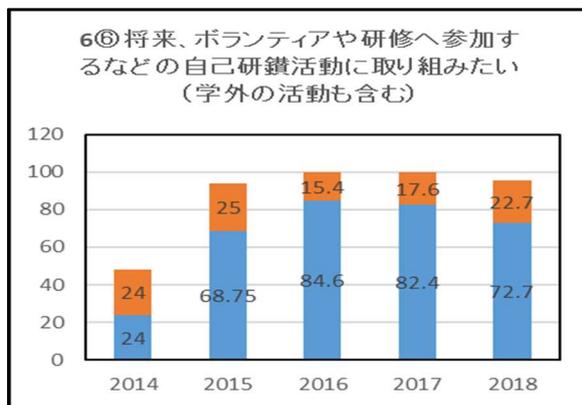
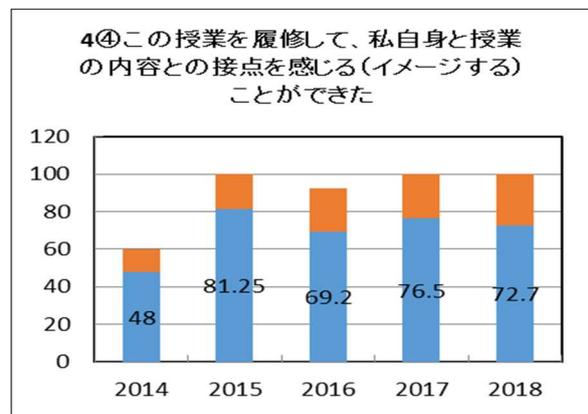
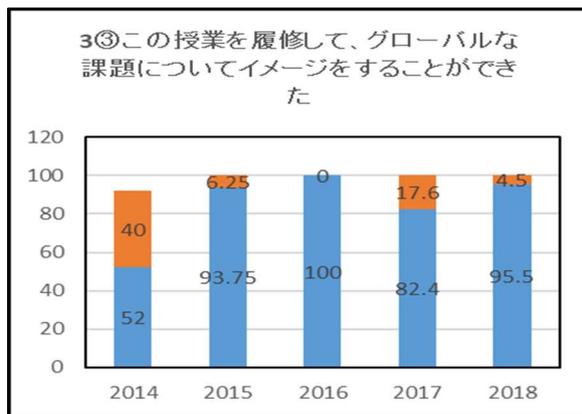
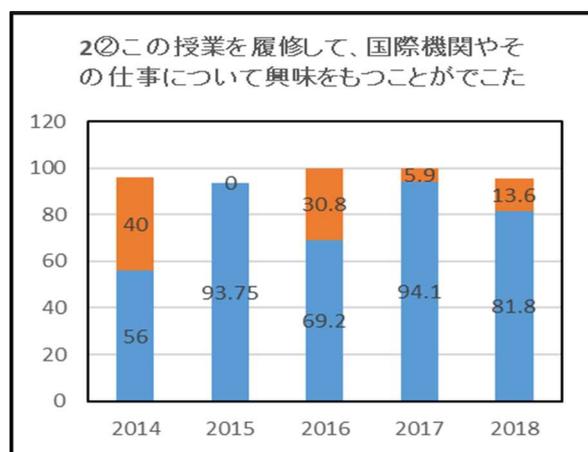
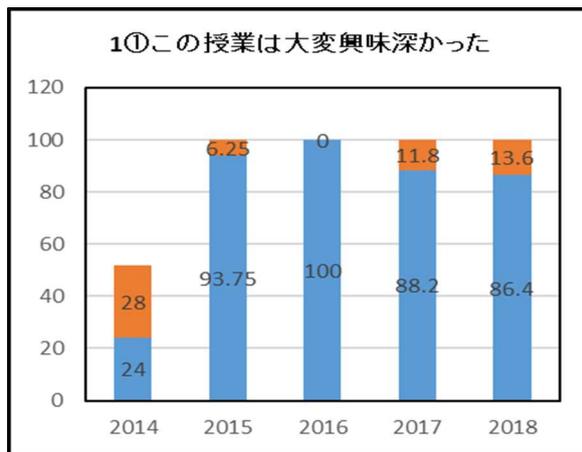
| | | | | | |
|-----|----|--------|-------------|--------------------|--------------|
| 12月 | 59 | 12月11日 | 人生・ホームレス・和解 | 映画「ミリキタニの猫」 | ワールド・スタディーズⅡ |
| | 60 | 12月11日 | | ミリキタニの猫/討論 | |
| | 61 | 12月14日 | | ③⑥ホームレス | |
| | 62 | 12月18日 | | ④⑩見えない人たち | |
| | 63 | 12月18日 | | ④⑩見えない人たち | |
| 1月 | 64 | 1月8日 | 開発とは | ⑩⑫開発を測定 | |
| | 65 | 1月8日 | | ⑩⑫開発を測定 | |
| | 66 | 1月11日 | 変化へ向けて | ⑩⑪変化へ向けてのキャンペーン | |
| | 67 | 1月15日 | | ⑩⑮人道的な行動 | |
| | 68 | 1月15日 | | ⑩⑮人道的な行動 | |
| | 69 | 1月18日 | | ⑩⑰メタモフィア | |
| | 70 | 1月22日 | | 54.アパルトヘイト | |
| | 71 | 1月22日 | 和解 | 55.マンデラ道のり | |
| | 72 | 1月25日 | | 56.マンデラの言葉 | |
| | 73 | 1月29日 | 人生 | 人生ロードマップ | |
| | 74 | 1月29日 | | 人生ロードマップ | |
| 2月 | 75 | 2月1日 | 未来と行動 | Future Time Chairs | |

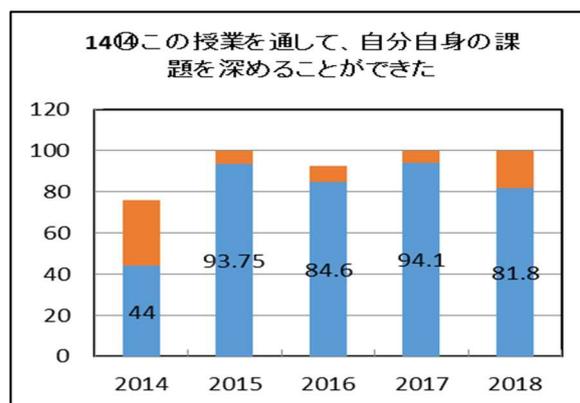
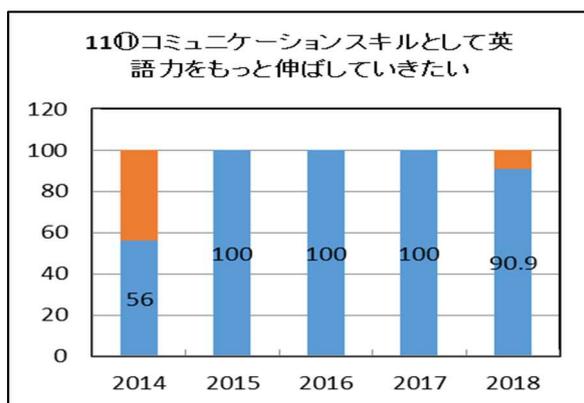
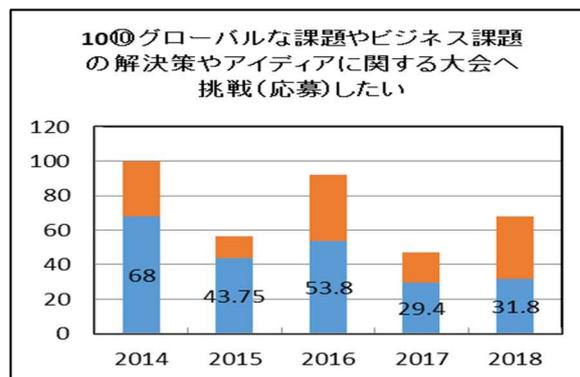
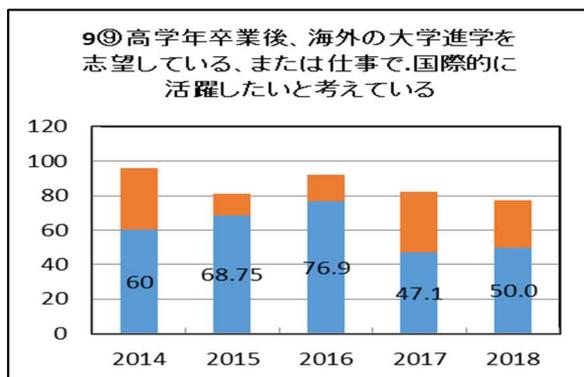
初履修の生徒もいたため、まずは「ミリキタニの猫」を鑑賞し、グローバルな諸問題が人間の人生へどう影響を及ぼすのかイメージを持たせた。その後具体的なテーマを探求した。特に、2019年9月に本校の実践を元にした教師用のハンドブックを出版する予定であるため、SGH 研究テーマのなかでも授業で扱い切れなかったアクティビティを中心に行った。すべてはオリジナルかつ日本では初実施のものばかりであった。



○「ワールド・スタディーズ」履修生徒 5年間の意識変遷

5年間を通じ、高い満足度を維持することができた。特に本校の研究課題でもある国際機関への理解の深化は毎年90%以上の生徒が満足していた。また、ELF教諭による英語による授業も年間数回行い、交換留学生の来校時には一緒にアクティビティや討論をしていったことから、履修生徒のほぼ全員が英語に対する学習意欲の向上につながったことは特徴的であった。選択科目という性質上、ある程度モチベーションの高い生徒が履修する傾向が強いのだが、だからこそグローバルリーダーとしての資質であるコミュニケーション力、探求力、グローバルな課題への興味関心などが、アクティブ・ラーニングによって他者理解が深まり、高い次元での目標達成を可能にしたのではないかと考えている。





したがって、以上の結果からワールド・スタディーズは、本校 SGH における役割を十分に果たし、グローバルリーダーとしての資質の滋養へ貢献し、大学での学びへつなげていくことができたのではないかと考察した。

④SGH 海外研修「アフリカン・スタディーズ 2018」

履修者：20 名（男子 6 人・女子 14 名）

日時：2018 年 7 月 23 日～31 日

場所：南アフリカ（ヨハネスブルグ・ケープタウン）

内容：アパルトヘイトミュージアム見学／ネルソン・マンデラの家見学

不法居住区見学／JICA 研修／障害者自立支援センター見学

サファリツアー／スタークフォンテン洞窟

St,Cyprians School 訪問／ロベン島政治犯刑務所見学

タウンシップ見学／喜望峰見学

【事前研修】

○南アフリカの基本情報（人口・民族構成・宗教・産業・JICA・日本との違い等）の講義

○「インビクタス/負けざる者たち」鑑賞

南アフリカでの、黒人として初の大統領となったネルソン・マンデラが、白人や黒人など、いろんな民族で構成される南アフリカを、差別のない国にしようと、ワールドカップに出るラグビーチーム、スプリングボックスを国をあげて支援しようとするストーリー。

○以下の項目を書かせ、何を学びに行くのかを明確にした。

- ・現在南アフリカに対して持っているイメージ
- ・現地に行って、こんなことを知りたい、聞きたい、やってみたい
- ・リサーチクエスト
- ・リサーチクエストを解決するために誰にどんな質問をするのか

＊リサーチクエストの一例

- ・環境、政治、経済、教育の中で最重要課題は何か
- ・先進国からの支援はうまくいっているのか
- ・本当に必要な支援とは何か
- ・アパルトヘイト時代の名残はまだあるのか
- ・南アフリカのスポーツ事情など他国に PR できることはどんなことか
- ・南アフリカの野生動物の管理はどうしているのか
- ・私たちに何ができるか

○訪問校 St,Cyprians School の交換留学生からの話を聞かせた

【事後研修】

- 「JICA エッセイコンテスト」「高校生英語コンテスト」「ネルソンマンデラに手紙を書こう」から一つ選んで応募する（9月）
- ペガサス祭ポスターセッション（9月）
- SSH・SGH グローバルキャリア講座 生徒発表（10月）
- 探究型学習研究会ポスターセッション（10月）
- SSH・SGH 合同生徒成果発表会ポスターセッション（2月）

【生徒が設定したテーマ】

- 人権
「今なお存在する人種問題」「南アフリカの福祉の現状-障害者」
- 貧困
「なぜ貧困は何世代にも渡り続いているのか」「アフリカの貧困問題」
「不法居住地に暮らす子ども達」「経済格差」
- 教育
「不法居住者の教育環境」「貧困と教育」
「貧困家庭の子供にとっての平等な教育とは」
- 環境
「ケープタウンから水が消える？」
- 国際協力
「現地訪問による現状と国際協力体制」「食料問題の解決策」
「南アフリカの教育と環境に日本にできることは何か」
「南アフリカにおける支援の限度について」
「日本の ODA はアフリカでの貧困の解決につながるか」
「本当の南アフリカを伝えるには」

【生徒の研修日記】

研修旅行 1 日目



不法居住地区で困っている子供をサポートする KYP という団体を訪問しました。ここに来るまでの道のりには、ごみや壊れかけた屋根、道端で座っている子供たちを見かけ、同じ市内での生活の違いを実感しました。私たちが行った時間はちょうど、学校帰りの子供たちがお昼を食べている時間帯で、たくさんの子供たちがご飯を美味しそうに食べていました。この団体は、授業を教えるだけでなく、一日二食の食事を提供していました。食事がないと集中できないので、食事を提供することを重視し、大学などへの進学への支援も行っているそうです。他にも、他国でダンスパフォーマンスをしたり、サッカーなどで交流を深めているそうです。今日はカルフォルニアから提携している団体がボランティアに来ていて、食事の手伝いや健康検査、文化交流などを行っていました。私たちも一緒に手遊びをしたり、サッカーをしたりして、触れ合うことによって交流を深めることができました。最後に隣接する不法住居を回り、地元の人々の生活習慣も見てきました。日本での一人部屋のサイズの家に六人で住んでいるのを見て、「ないものを欲しがるのではなく、あるものに感謝することの大切さ」が身に沁みました。

2 日目



JICA では日本人と南アフリカ人が協力して、南アの貧困問題の改善などを目的に活動しています。JICA は現地のニーズを重要視し、日本の強みを生かした問題解決に取り組んでいて、教育における具体的なプロジェクトとして算数教育もあるそうです。南アフリカではアパルトヘイト時代に黒人の子どもたちへの教育が進まなかった影響で、多くの人々が算数における繰り上がりなどの基本的な概念を教育されずに育った人が多く、その弊害は未だに存在し、計算をする際に 1

本ずつ棒を書いて数えるなどと大きな問題となっていることを知りました。一方で、日本は世界5位という有数の数学教育を誇り、その強みを生かして南アフリカの教育に貢献しているようです。例として、小学生低学年の教育に使われる算数キットの輸出や教師用の指導マニュアルの作成なども作成して役立っていると聞きました。

他にも、JICAは産業における生産効率の向上や人材育成、障害者支援などのプロジェクトも行って、南アフリカには、黒人を主体に活動しているセンター・ソウェトと白人を主体に活動を行っているレメロス・セルフ・ヘルプ・センターの二つがあります。2013年から活動しており、2018年現在はアクセシブルな町作りを通じた障害者自立生活センターの能力構築をゴールに運営しています。私たちは、実際にレメロス・セルフ・ヘルプ・センターに訪れ、センター長のピート氏がプレゼンテーションを行ってくれました。ピート氏自身も事故による身体障害を持っており、彼の経験を通して障害者同士が支え合って自立していくことの重要性や、健常者との関わりなどを学ぶことができました。

3日目

人類発祥の地と呼ばれる世界遺産スタークフォンテン洞窟に行きました。なぜこの洞窟が人類発祥の地と呼ばれるようになったかという、ここで人類最古と言われる類人猿の化石が発見されたからです。

1947年類人猿アウストラロピテクス・アフリカヌスの頭蓋骨が発見されたことから、人類の起源はアフリカ大陸であると発見した学者が唱えましたが、それ以前は、人類がヨーロッパで始まり白人が最初に誕生したという白人主義の学説が主流だったため、この発見は、白人主義者の圧力により14年ほど無視され続けていました。しかし、この地で、さらに類人猿の化石が発見されたことにより学者たちは、人類はこの洞窟から始まったことを認めざるを得なくなったそうです。

洞窟の中は少し寒く数万年の時を経て形作られた鍾乳石があったり、地上から沈下してきた土砂が長い年月をかけ、中に含まれていた動物の骨やバクテリアなどを化石化していったことを直に見ることができました。また人類の進化の軌跡や長い年月をかけ自然が作り上げてきたものに触れることができ、最高の経験となりました。



4日目

スクールツアーは、すれ違う訪問先の生徒が学年問わずフレンドリーに接してくれて、私たちも恥ずかしながら、積極的にコミュニケーションをとるべきだと思いました。プレゼンテーションでは、私達からの問いかけに対し、たくさんの手が上がり協力してくれる姿勢に感動しました。この学校訪問では、コミュニケーションを取ろうとする姿勢が私たちの足りていない部分だ

と気づくことができました。太鼓の体験授業では、言葉を使わずにリズムをつかって一体感を生み出すことができました。人の声が違うように太鼓の音色も違ってくるということに、伝統の太鼓の繊細さを感じることができました。

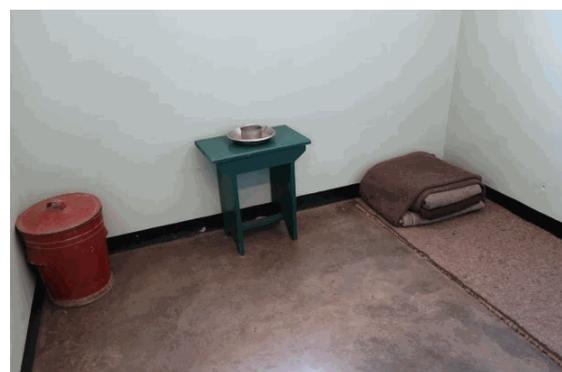


5 日目

今日はウォーターフロントから約三十分フェリーに乗りロベン島に向かいました。ロベン島はマンデラが収容されていた刑務所がある島です。現在は島全体が博物館になっており、ガイドさんとその家族が住んでいます。はじめにバスで島全体を探索し、その後刑務所の中を実際に歩いて見学しました。その際説明してくれたガイドさんは当時学生運動で政治犯として収容されていた方でした。囚人の中には一ヶ月に一通の手紙のやりとりが許されていた人もいました。しかし、刑務所内の生活や政治について書くことは許されていなく、新聞やマスコミからの情報はチェックされ入手することはできませんでした。

唯一、政治について話し合えた場所は白人が立ち入れない石切場にある小さな洞窟で、次々に政治犯が収容されていたため新しい情報を入手することができました。そこではアパルトヘイト後の彼らの理想とする国作り等の話し合いがなされ、南アフリカ初の民主的な議会ともいわれています。その中から最高裁判所の裁判官や弁護士、後に国の中心となる人たちが数多く輩出されました。

刑務所内でも差別があり、カラードと呼ばれる混血の人たちは冬服と夏服が与えられましたが、アフリカンと呼ばれる黒人の人たちは夏服しか与えられず、一年中半袖短パンでの生活を強いられていました。1960年代までは鉄格子に窓もなく冬でも雨風にさらされていました。食事の量や内容も人種によって差別されていました。しかし囚人たちは助け合い食事を分け合っていました。



6 日目

世界の最南端と言われている喜望峰に行きました。この辺りは寒流が流れているため昆布などの海藻が海面に伸びている様子を見ることができました。昆布がいるところには色々な貝類がいます。例えばウニ、ムール貝、アワビやサザエの仲間がいます。また、プランクトンの死骸が浮いて白波のようになっていました。喜望峰は階段が設けられていましたが、その道から外れて崖を登ることでスリルを楽しむこともできました。

ケープタウンは17世紀に東インド会社のオランダ人によってつくられました。もともとは、原住民であるコイサンと呼ばれていた二つの黒人の民族がいました。オランダ人が来たことによって、この二つの原住民たちは奴隷としてケープタウンという街を作るために労働力として使われました。これが白人支配の始まりで後のアパルトヘイトへとつながっていきました。24年前に終わったアパルトヘイトの影響は今でも続いていて、人口の1割の人が9割以上の富を持っており、半分の人には富がないという実情です。

ヨハネスブルグとはガラッと雰囲気が変わりケープタウンは比較的発展した街並みを見ることができました。喜望峰に来てみるとさらに雰囲気が変わり、終わりのない地平線と豊かな緑を上から見下ろすことができました。この喜望峰に関連するのは人物として有名なのは、大航海時代のバスコダガマというポルトガル人です。その当時、スパイスの貿易活動が盛んにおこなわれており、食料の補給場所として立ち寄ったのが最南端である喜望峰でした。スパイス1グラムが当時は、金1グラムに相当する価値があるほどのものでした。

喜望峰から帰るときにはアフリカにしかない植物がたくさん生えていました。また、ダチョウやヒヒの仲間、アルパカなども見ることもできました。アフリカに足を運ぶから見るができるのはもちろん、ヨハネスブルグやケープタウン色々な景色を見て最終日に喜望峰を訪れたことで9日間のアフリカスタディーズを締めくくる絶景を見ることができたと思います。アフリカに来る機会はなかなかないと思います。ですが、今回学んだことや見た景色、想像していた以上の貧困層の暮らし、貧富の差を知った上でさらに知識を深め、日本で暮らす高校生としてできることは何か考えるべきだと思いました。



【分析と成果】

南アフリカは、研修地として様々な要素を含んでいる国である。長い白人による黒人支配（その究極がアパルトヘイト）ののちに、黒人が解放され、白人をも交えた新国家建設を進めている点。反アパルトヘイト運動の歴史的な足跡をたどれる点。白人支配の影響がいまだに残り、経済格差、貧困、教育の不備、劣悪な生活環境のもとでの生活などの問題が目に見える形で存在している点。先進国が支援している現場を見ることができる点。人類誕生の洞窟や資料館を通して人類の歴史を俯瞰できる点。野生動物を身近に見ることができる点。アフリカの芸術文化や生活に

触れることができる点。

これらの要素を、今回の研修旅行で十分に堪能できた。特に、現時点での生の南アフリカを見ることができて、自分たちに何ができるのか、日本として南アフリカへの国際援助はどうあるべきなのか、などを考えさせることができた点は、最も大きな成果であったと思われる。

以下は生徒の発表用のポスターである。

アフリカスタディーズ
玉川学園高等部 11年 名前 荒井 碧

テーマ「現地訪問による現状と国際協力体制」

現状と問題点

- 下水処理・廃棄物処理
- 地域によってはリサイクル処理施設が存在するが、リサイクル処理後の利用価値が高い金属などを優先的に処理する。
- 生ごみ・ビニール袋などが路上に放置されている
- ★大気汚染・水質汚濁・悪臭などの原因

歴史的背景

FIFA World Cup 2010

- ワールドカップ開催に伴い、南アフリカでは、急速にインフラが整備された。
- バス
- South Africa
- 電気
- 水道
- ワールドカップから今日まで、需要に見合わぬビル建設ラッシュが止まっていない。
- 食べ物収穫後から使えないうちに、大きく自然に保存してきたナイフスタイルを捨てずにいる。
- 捨てる慣習 / 捨てない慣習

アフリカスタディーズ
玉川学園高等部 11年 名前 猪俣結衣

テーマ「 貧困家庭におかされる子供たちにとっての平等な教育とは？ 」

●現状と問題点

子供にとって勉強することは、最低限のことであり、勉強をすることができないと、大人になって社会に馴染むこともできないし、物事を考える力も身に付かなくなってしまう。その勉強する権利は決して私達だけでなく、世界中の子供全員が持つべき権利である。

JICAの教育プロジェクトは人間の安全保障の考えに基づいた活動を行っている。南アフリカの子供たちは、計算方法や発想力を学ぶ機会がなく、高校生くらいの年代でも、計算が出来なかつたりする。学校に行けなかつたりするため、勉強方法が不確かな部分も少なくない。

●歴史的背景

南アフリカの子供たちは概して理数科が苦手であることが、下のグラフからも読み取れる。その大きな原因の一つは教師の指導力不足である。日本では、教員養成課程から現職教員研修まで継続的、かつ、段階的に教師の能力向上を支援する仕組みがあるが、アフリカの多くでは、教師の強化知識や授業実践能力の不足を補う研修が整備されていない。

現在実施されている対策とその問題点

JICA 南アフリカ事務所

開発目標

成長の加速化と貧困率の低下

教育 / 技術協力 / 知恵の共有

指導官 / 農業 / 職業訓練

一緒に働いて改善・定上げ

上下水道

○「使う前・使い方」の支援・協力がほとんどを占めている。南アフリカの人々は、「みんな」で何かを行うという考えではなく、個人は個人というスタンス。

提案したい対策

従来の「捨てる慣習」から、「捨てない慣習」ライフスタイルへの移行を促進する。
・現地人の意見反映

文化 / 技術共有

文化的慣習を考慮した支援

農業施設整備へのアクセス向上

下水道の整備

アクセス

水質 / 貧困 / 衛生

法的整備 / 教育

●「作る」から「処理」までを網羅したプロジェクト計画
●現地人自らが行う法整備
●一貫した消費教育の普及

欠けることのない一連のプロセス

作る / 使う / 処理

●現在実施されている対策とその問題点

JICAの教育プロジェクトでは、ABEイニシアティブ、日本語研究センターによる教育、産業人材育成プロジェクト、算数教育の四つを行っている。ここでは日本の専門家が彼らが理解できるようなやり方を考え、丁寧に教育がされている。しかし、ターゲットは中間レベルの貧困層の子供のみ。では、この子供たちよりも貧しい生活を送っている子供たちは、教育を受けることは不可能であるのか、ということがこの活動の問題点である。

●提案したい対策

JICA障害センターの障害者当事者をメインとした役員で構成されているというように、教育プロジェクトを受けた中間貧困層の人が、最高層のレベルの貧困に侵される子供たちにその計算方法や考え方を教えるという施策。方法を教えたりするのみであれば、最低限場所があれば、紙や模型などなくても教えることは可能であるかもしれない。このアイデアが、またさらに多くの子供たちの才能や可能性を見つける鍵となるかもしれない。

研修に参加しての感想

South Africa / Multiple cultures / 12languages

Japan / Iculture / 1language

- 立ち立ぶビル群などから、アフリカ地域トップクラスの経済力を実感
- JICA訪問やタウンシップなど、「生の声」からわかる南アフリカの現状
- 近年、大気汚染・水質汚濁・廃棄物処理などこれまで人類発展の裏側で犠牲となってきたものへの対応が問われている。今回の研修を通して、南アフリカ発展を自覚した国際協力は十分であるが、消費教育などの分野では、いまだ多くの支援と協力が必須であると分かった。
- 失業問題など日本と共通するものもあり、国際協力体制を続ける必要性を強く感じた。

○どのような問題に対しても、当事者が責任・関心を持たねば意味がない。現状解決の動機づけと実践に関して、どの分野においても教育の重要性は変わらない。

●研修に参加しての感想

今まで紙や画面越しで見たり、聞いたりしていたものを目の当たりにして、驚くことや寂しい現実が多くあることに改めて気づかされました。タウンシップで私たちが配ったお菓子は我が先にとり合ったり、孤児院で配られた一日に二回の食事を大事に食べたり、それでも思い切り遊んでいる子供たちの生きるパワーには莫大な強さを感じました。またそれと同時に、私たち普段の生活がどれだけ幸せで感謝すべきことが身に染みしました。普段の生活に感謝して生活するとともに、この経験を周りにシェアして、この現状がさらに多くの人々に伝わればと思います。とても良い経験ができました。

【課題と今後の取り組み】

SGHが終了した後も、今回の研修旅行で得た成果の大きさを考えると、この企画は残すべきだと考える。課題としては、安全面の配慮が残る。ボツワナからヨハネスブルグに研修地を変更して、より日程的にも余裕ができた。ヨハネスブルグにも危険な場所があるが、今回の行程は、安全だったと思われる。しかし、想定外のことが起こらないとも限らない。そういった場合、どう対応できるのか、さらに綿密な計画が望まれる。

⑤自由研究「グローバル・スタディーズ」

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|------|------|----|-------|-------|-------|------|--------|-----------|---------|-----------|-----------|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | 準備 | 準備 | 応募先検討 | 企画案検討 | 企画案検討 | 企画応募 | 企画採用決定 | 事前打合・現場下見 | 実施・口頭発表 | 実施検証・口頭発表 | 実施検証・口頭発表 | |

(2) 実績の説明

「まちだ〇ごと大作戦」に採用

地域の洋菓子屋さん『Patisserie PARTAGE』とのコラボ商品の開発

12月2日、町田市役所主催「まちカフェ」にブース出展

12月23日、第3回関東・甲信越静地区 SGH 課題研究発表会出場

1. 参加者 11年生 3名
2. 日時 2018年4月～2019年3月
3. 場所 玉川学園高等部、町田市役所、立教大学
4. 内容

自由研究の講座「グローバル・スタディーズ」の履修生を中心に次のような活動を行った。2020年のオリンピックの際に、町田市が南アフリカの選手団のホストタウンと決定された。このことを受けて、実際に南アフリカへの渡航経験のある生徒たちが、2020年のオリンピックに向けて自分たちにできる活動を検討した。町田市役所広報課が運営する事業に応募、採用され、町田市が南アフリカのホストタウンであることを広報するプロジェクトを企画・運営した。

5. 成果

- (ア) 活動の主目的として生徒が掲げた、「2020年のオリンピックにおいて町田市が南アフリカのホストタウンとなる」ということに対する町田市民の認知度を上げることができた。
- (イ) アフリカンスタディーズでの実体験を元に、その発展的な事後学習として学外での活動につなげることができた。
- (ウ) 町田市役所との連携、地域のパティスリーとのコラボ商品の開発によって、グローバルなテーマを掲げつつも、官民連携・地域密着を実現できた。
- (エ) 第3回関東・甲信越静地区 SGH 課題研究発表会に出場し、口頭発表を行った。
- (オ) 次年度の活動継続について町田市役所より問い合わせ、新たな連携企画の提案を受けている。

6. 課題

活動の成果と、授業としての評価の不整合性が課題である。自由研究として論文という成果物を求めるが、本活動の性格上、文章にまとめると実践報告書の形となってしまう評価基準とうまく一致しない。

⑥たまがわ会議（ラウンドスクエア実行委員会）

（1）実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-------|-------|-------|------|----|----------|----|--------|--------|--------|----------|---------|-------|-------|------------|--------|
| | 4月 | 4月初旬 | 4月29日 | 5月上旬 | 5月中旬 | → | 7月10日 | → | 7月11日 | 7月12日 | 7月13日 | 8月上旬 | → | 9月14日 | 9月15日 | → | 11月末 |
| | 企画 | ガイダンス | ミニ会議 | ガイダンス | 準備 | 準備 | 事前ミーティング | 準備 | たまがわ会議 | たまがわ会議 | たまがわ会議 | ユニクロ古着回収 | 学内外呼びかけ | ペガサス祭 | ペガサス祭 | 古着回収・梱包・発送 | ユニクロ終了 |

（2）実績の説明

1. 参加者

ラウンドスクエア実行委員会、ラウンドスクエアに興味を持つ高学年生徒 90名

2. 日時

たまがわ会議：2018年7月11日(水) 12:30～16:30

7月12日(木)・13日(金) 8:30～16:30

3. 場所

たまがわ会議：玉川学園高学年校舎、心の教育実践センター(tapセンター)

ユニクロ×UNHCR-服のチカラプロジェクト

：玉川学園(幼稚部/小学部/中学部/高等部)/奈良保育園(横浜市)/ゆうきやま保育園(町田市)/こうりん保育園(町田市)/玉川さくら保育園(町田市)/小川小学校(町田市)

4. 内容

ラウンドスクエアの基本理念である、“IDEALS”(Internationalism、Democracy、Environment、Adventure、Leadership、Service)でも掲げている国際理解(Internationalism)について、今年は7月18日から20日の3日間で行われ、“Human-rights issue(人権問題)”のテーマのもと約90名の生徒が、さまざまなワークショップやディスカッションに参加した。

たまがわ会議スケジュール

| 日程 | 時間 | 内容 | 詳細 |
|------|----|---|---|
| 7/11 | 午後 | 開会式 12:45～ | |
| | | Keynote speaker ① ファーストリテイリング(株) ユニクロ鶴川店店長 佐々木真緒さん 13:00～14:00 場所：205 | 「届けよう服のチカラ」プロジェクトについての説明を聞く、質疑応答。 |
| | | Barazza(奉仕) 14:00～15:50 | Keynote Speaker の話しをふまえて、私たちに何ができるか話合う。古着回収用の段ボール作成。最後にバラザの意見を発表をする。 |
| | | 終了 16:00 | |
| 7/12 | 午前 | 朝会 8:45～ | |
| | | Keynote speaker ① アイセック・ジャパン 早稲田大学社会学部2年 横澤魁斗さん 9:00～11:00 場所：多目的室 | フィリピンで現地のゴミ問題解決に努めた Keynote Speaker から、実際に環境問題に関わって活動をした際の話聞き、身近な問題として意識する。大学生と関わることから、近い将来の自分たちの姿を想像し、自分たちに何ができるか考えるきっかけにする。 |
| | 午後 | アクティビティ① 場所：205 | 「Nature+Human=Environment」を理解することを目指し、今回のテーマが「環境」である理由、身近な環境や世界の環境の現状についての理解を深めるとともに、国際的な環境問題について知り、理解を深め、発表をする。 |
| | | MUN 13:30～15:30 場所：205 | ラウンドスクエアのメンバー同士が打ち解けられるようにする。国際的な環境問題について知り、理解を深め、アフリカの水問題についての議論を通して、自分なりの解決策を見つけ出す。 |
| 7/13 | 午前 | 朝会 8:45～9:00 | |
| | | TAP 9:00～10:00 | 人との関わりを意識する。私たちの生活の中にある環境、人と人とのかかわりも環境の一つ。 |

| | | |
|----|-----------------------------------|--|
| | アクティビティ② 10:00～12:00 場所：205 | 様々な視点から環境について考える。環境を守るためには何かを削らなければならない、人々の生活を豊かにするためにはなどの問いに対して、ディベート形式で自分たちの意見を述べる。 |
| 午後 | 昼食（立食）11:50～13:00 場所：多目的 | たまがわ会議を通して仲良くなった仲間と昼食会。 |
| | アクティビティ③ 13:00～15:30 場所：205 | 環境と向き合うために自分たちに何ができることとは何か、3日間を通して学んだことをふまえて話し合う。また、その解決策（提案）は具体的に何をすれば実行可能なか話し合い、発表をする。 |
| | 閉会式 15:30～16:00 | |

・ゲストスピーカー①（株式会社ファーストリテイリング ユニクロ鶴川店店長 佐々木真緒さん）

今年で本学は4年目の参加となる、ユニクロ・GUがUNHCR(国連難民高等弁務官)と共同で主催している「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」。高校生の私たちに何ができるのか、世界中の難民事情について考えるワークショップを行った。講師は、プロジェクトを担当されているユニクロ鶴川店店長の佐々木真緒さん。「衣服は身体を守る重要な役目を果たすもの。けれども難民たちは、たった一枚の粗末な服しか持っていないのです」という話を聞き、難民の窮状を知り驚いた生徒たちの間には、「何か行動を起こしたい」という空気が広がった。



・アクティビティ①(Barazza)

佐々木さんの講演後のBarazzaでは、特に不足しているこども服を集めるために、保育園・幼稚園生に服の力や難民のことを伝える方法を考えて、こども服を回収する段ボール箱の装飾を行った。箱が完成したら、こどもたちが服を寄付したくなる工夫とともにプレゼンテーション。難民の気持ちを考えるゲームや、支援することでヒーローになれる物語などを、小さなこどもたちが楽しめるように、身振り手振りで一生懸命に伝えていた。



・ゲストスピーカー②（特定非営利活動法人アイセック・ジャパン 横澤魁斗さん）

2日目は、特定非営利活動法人アイセック・ジャパンの大学生による出張授業からスタート。生徒4～5名のグループにファシリテーター役の大学生が入って、講義とワークショップ、ディスカッションを行った。講義をするのは、早稲田大学文化構想学部2年生の横澤魁人さん。6週間のインターンシップ体験をしたフィリピンで目の当たりにした「ごみ問題」について、現地で撮った写真を紹介しながら伝えてくださった。「フィリピンではごみの焼却が法律で禁止されているため、どんどんたまっていってしまいます。しかし、国の方針は、ごみ問題の解決にお金をかけるより情報関連技術を発達させること。服を着られないこどもが 아이폰を持って物乞いをしてくるようなことが日常的にありました」。生徒たちは、にわかには信じがたい光景を想像しながら、真剣に耳を傾けていた。



・アクティビティ②(Barazza)

講演後のワークショップは、日本のごみ問題についての簡単なレクチャーを受け、「どうすればごみが減らせるか?」「根本的な解決策は何か?」といったことを、大学生と一緒に考えました。「レシートをまとめて、どんなものが買われたかのデータを集める。そして企業は無駄なものを生産しないことが必要です」、「日本人は、服を1シーズンしか着ないで“ごみ”と判断するものが多いことが、ごみが多くなる原因だと思います」など、最後にそれぞれのグループで話し合ったことを発表。大学生たちが驚くような柔軟なアイデアが交わされた。「歳の近い人から話を聞けて、内容に親しみが持てました」「大学生になったら、自分も行動してみたいと思いました」。ワークショップ終了後にも、横澤さんに直接質問をするなど交流し、大いに刺激を受けた。



・MUN(Model United Nations 模擬国連)

2日目の午後は、「アフリカの水問題」をテーマにした模擬国連を開催。水問題に関連するアフリカ14ヶ国から担当する国を選び、その国の代表として、“すべての国が利益を得ることができる”ための話し合いを行う。「アフリカ全体にきれいな水が行き渡るように考えてください」という議長の指示で会議がスタートした。「自分たちの国でできる方が自立が保てると思います」「国同士でお金をやり取りするのではなく、先進国の資金援助を受けられる組織づくりを提案します」。近い主張を持つ国同士が集まり、いくつかの話し合いの輪がつくられる。次第に熱を帯びながら議論は核心に迫っていく。最後に国同士の意見をまとめ、DR(Draft Resolution)と呼ばれる決議案を提出。しかし、規定数を超える支持が得られず、決議案の受理は拒否される結果になった。まとめに模擬国連経験者でディレクターを務めた生徒が、今回の反省点とおさえるべきポイントについてのアドバイスを伝えて閉会。「国」という立場と、「世界」という大きな視点で環境問題を考える体験から、さまざまな気づきを手にすることができた。



・TAP (玉川アドベンチャープログラム) 、アクティビティ② (Barazza)

3日目は、「玉川アドベンチャープログラム(TAP)」とディベート、ワークショップを実施。はじめにTAPで体と頭を使いながら各メンバーと交流した後、グループで賛成・反対の立場に分かれて環境問題についてディベート。ディベートのテーマは、「レジ袋を全店舗で有料にすることに賛成か反対か」「街中のごみ箱を撤去することに賛成か反対か」など。賛成・反対両方の立場から、主張と反論を繰り返すことで、身近な環境問題に関して視野を広げた。



・アクティビティ③(Barazza)

昼休憩を挟んで午後のワークショップは、環境問題について訴える姉妹のプレゼン映像を視聴することから開始。「同じ年代の小さな取り組みでも世界を変えることができる」という事例を知り、「自分たちにできること」を考え、どのように実行するかを発表するという課題に取り組んだ。ペガサス祭(学園祭)のごみ削減の具体的な方法を考えたり、ペットボトルや新聞紙を使った自作の濾過装置をつくったり、グループのメンバーそれぞれが創造性を発揮し、ユニークな解決策をつぎつぎに考案。寸劇や絵、実演など、工夫を凝らしてプレゼンテーションし、充実した3日であった。



まとめと振り返り

最後に、この玉川会議を企画した実行委員会のメンバーが、「ここで考えたことを、これからも意識して環境問題に取り組んでください」というメッセージを伝え、参加者全員が想いを新たにしました。環境問題に対して、さまざまな視点から学び、話し合い、自分たちにできる「アクション」を考えた3日間。「環境問題を解決する」ことへの想いを共有し、より強い絆を紡ぐことができた。

5. 成果・課題

ラウンドスクエア実行委員に所属している生徒、そうでない生徒に関わらず、今回のたまがわ会議に参加をして、ラウンドスクエアの基本理念 IDEALS に興味を持ったという生徒は多い。きっかけを作るという意味では狙い通りの結果を出すことができた。IDEALS の意味を理解した上で、

今後は、その生徒たちが上級生になって運営する側に回った時、その経験を後輩達、またはラウンドスクエア実行委員以外の生徒たちに伝えることができるよう、今後もラウンドスクエアの活動に積極的に参加して欲しい。

※ラウンドスクエア実行委員会 2018年度 年間行事

4月20日 - 29日 RoundSquareジュニア会議(タイ The Regent's International School Bangkok)

4月29日 ミニたまがわ会議

6月6日 海外留学生(台湾・オーストラリア・アメリカ)交流会(放課後)

7月11日 - 13日 第6回たまがわ会議

9月14日 - 15日 ペガサス祭

9月28日 - 10月7日 RoundSquare国際会議(St Cyprian's School(南アフリカ・ケープタウン))

8月7日 - 11月30日 “届けよう・服のチカラ” プロジェクト

(玉川学園幼稚部～高学年、奈良保育園、ゆうきやま保育園、小川小学校、
こうりん保育園、玉川さくら保育園)

10月17日 海外留学生(台湾・稲江校)交流会(放課後)

1月15日 海外留学生(豪州、ボツワナ、ブラジル、インド、デンマーク、ペルー、台湾)
交流会(放課後)

2月16日 SSH・SGH生徒発表会(ラウンドスクエア国際会議報告)

⑦SGH 海外研修「ヨーロッパ・スタディーズ 2018」～外交・人権・国際協力

【参加者】玉川学園高学年 9年生3名、10年生8名、11年生7名

【日時】2019年1月4日(金)～1月13日(日) 10日間

【場所】ポーランド(クラクフ)、オランダ(アムステルダム・ハーグ)、スイス(ジュネーブ)、

【内容】玉川学園 SGH 研究開発計画の目的として掲げている国際機関や国際 NGO でリーダーとして活躍するために必要なことは、多様な文化を理解し、世界の諸問題に興味を持つことである。特に「外交」「人権」「国際協力」の分野における生徒の個人研究を深め、国際機関へのキャリア選択を実現する全人的リーダーの資質を養うグローバルな学習機会を与えることを目的とし3国を訪れた。

研修地：アウシュビッツ強制収容所(第一・第二)、シンドラーの瑠璃工場(以上ポーランド・クラクフ)、IRCMT(刑事裁判所のための国際的残存メカニズム)、平和宮、マウリッツハイス美術館、ビネンホフ(以上オランダ・ハーグ)、アムステルダム国立美術館、ユダヤ歴史博物館、アンネ・フランクの家(以上オランダ・アムステルダム)、OHCHR(国連人権高等弁務官事務所)、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)、ILO(国際労働機関)、ICRC(国際赤十字)、ICRC博物館(以上スイス・ジュネーブ)他

ヨーロッパ・スタディーズ1日目(1月4日)

13:00に羽田空港に集合し、15:20(定刻通り)にポーランド・クラクフへ向けて出発。フランクフルトにて乗り継ぎ、24時過ぎにクラクフ空港にて荷物を引き取り終えた。クラクフでは雪が降っていた。空港にて現地ガイドのジョアンナさんと合流。30分のホテルまでのバス移動中に、

簡単なポーランドの挨拶などを習った。ホテル到着後に手続きと簡単な連絡をして就寝した。

・羽田空港にて



・ポーランド・クラクフ到着



ヨーロッパ・スタディーズ 2日目 (1月5日)

ホテルにて現地ガイドの松崎さんと合流し、バスでアウシュビッツ強制収容所見学に出かけた。現地にてアウシュビッツ博物館最初にして唯一の外国人公式ガイドである中谷剛さんに案内していただいた。第一収容所では、中谷さんからアウシュビッツの概要だけでなく欧州における歴史教育の在り方や、現在まで世界が抱える問題の話、今後日本人としてどのように歴史やポピュリズムと向き合うべきか等、多角的に示唆に富んだ話をしてもらった。第二収容所にバス移動後、降雪が強まってきたが第二収容所の悲惨な歴史を体で感じる事ができた。比較的見学者が少ない時期だということで、他の客に気兼ねもする必要が少なく中谷さんの話に集中しやすかった。

レストランで昼食後に、クラクフ市街に戻り、シンドラーの琺瑯工場見学へ移動。施設ガイドの現地語の話を松崎さんの丁寧な翻訳を通して学習した。夕方にホテルに戻った後、ショッピングセンターで夕食。1日を通して、生徒の時間意識の不足が目についたので、就寝前に集団・社会生活の重要性を説明した。

・アウシュビッツ第一収容所



・アウシュビッツ第二収容所



・ シンドラーの琺瑯工場



ヨーロッパ・スタディーズ 3 日目 (1 月 6 日)

朝、クラクフ市街を散歩しヴァヴェル城などを訪れた。その後、クラクフからアムステルダムへの移動。乗り継ぎのミュンヘンにて、出立前の飛行機内で1時間ほど待ったが、大事はなくアムステルダムに到着。空港にて現地ガイドの梅沢さんと合流。バスでホテルまで移動する約30分で、オランダ語の難しさやアムステルダムの歴史や現状などの話を聞いた。ホテル到着も定刻より遅れ9時過ぎになったが予定通りホテル内で夕食を取った。

・ ヴァヴェル城にて



ヨーロッパ・スタディーズ 4 日目 (1 月 7 日)

バスにてアムステルダムからハーグに移動して、ICMRT (刑事裁判所のための国際的残存メカニズム) を見学した。フィルム「Sexual Violence, End of Impunity」を鑑賞後、法廷などの施設見学をした。フィルムは日本語字幕、施設見学はスタッフによる英語で行われた。紛争地における人権の問題に関する深い学びの場となった。

平和宮に立ち寄った後、市街でランチを取り、午後はマウリッツハイス美術館とビネンホフを訪ねた。美術館ではガイドの梅沢さんによって、構図の見方などの美術作品鑑賞の基本から、館内の作品配置の工夫、作品の歴史的背景などの深い知識までご教示いただいた。ビネンホフでは、現地の青年ガイドによって英語での説明があった。美術作品によって歴史のビジュアルイメージ

を得ていたので、ビネンホフで行われた歴史的な会議も想像することが容易であっただろう。ホテル帰着後、レストランで夕食。シェフによってアコーディオンの演奏が披露され、オランダの陽気な雰囲気を楽しむことができた。

・ ICMRT



・ ビネンホフ

・ 平和宮



ヨーロッパ・スタディーズ5日目（1月8日）

午前にはトラムでアムステルダム国立美術館に向かった。やや市街に位置するホテルから美術館までは“上り”方面になるためか、トラムが混みあっていて1便に全員が乗車しきれず2本に分乗することになった。美術館では、梅沢さんにレンブラントやフェルメールの名画などについて鑑賞の歴史や構図・主題について講義いただいた（「牛乳を注ぐ女」は東京のフェルメール展に出向中で不在だった）。

徒歩にてアムステルダムの歴史ある街並みを見学しながら、アルバート・カイク市場を通り（残念ながら露店は強風などの悪天候のため出ていなかった）、アムステルダム中心地近辺で昼食を取り、ユダヤ歴史博物館に移動した。梅沢さんの案内のもと、ユダヤ教の礼拝や風習、ヨーロッパ社会への浸透度や歴史的影響について学んだ。また徒歩でアンネ・フランクの家に行き、現地青年によって英語案内を受けた後、館内で日本語音声ガイドの機械を使いながら見学をした。アウシュビッツで学んだホロコーストで迫害されたユダヤ人たちの感情生活の一例を具体的に知ることができた。

・アムステルダム国立美術館にて



・アンネフランクの家にて



ヨーロッパ・スタディーズ6日目（1月9日）

アムステルダムからスイス・ジュネーブへの移動日。飛行機は順調に運航され、ミュンヘンを経由して、計3時間ほどのフライトでジュネーブに到着した。現地ガイドの宮村さんと合流後、バス移動中に、各注意点などを話していただいた。ホテル到着後、トラムでレマン湖ほとりのレストランへ移動して、夕食をとった。

ヨーロッパ・スタディーズ7日目（1月10日）

トラムにて「NATION」駅に移動し、まず国連人権高等弁務官事務所(OHCHR)にて、職員の服部さんから講話を聞いた。講話者服部さんが、生徒の興味関心事を募りそれを踏まえて話を進めるインタラクティブな形で話を進め、生徒たちは人権問題の広さや世界的問題の所在や OHCHR の役割について理解を深めることができた。続いて訪れた国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)では、職員の帯刀さんから UNHCR の実務経験を踏まえて変容し続ける難民問題の実情だけでなく、国際機関で働くために必要な資質、私たち日本人と難民の将来的関わり方など、幅広くお話をいただいた。

午後は、国際労働機関(ILO)を訪問した。ILO の日本人職員4名と生徒たちが食堂で昼食を取り、高校生活のことや仕事の話など情報交換をしたりアドバイスをいただいたりした。昼食後は、まず職員の戸田さんから ILO の成り立ちなどを聞いた。その後、ILO 上級法務官の野口さんから、雇用や職業における差別について講義をしていただき、女性を始めとした様々な労働差別、政府を説得するという ILO の役割などを学んだ。必ず質疑が行われる国際的な学びの場に生徒たちも慣れてきて、この日は積極的に質問をするようになっていたのが印象的であった。

その後、国連欧州本部を英語のガイディングツアーにて見学した。全てのプログラム後はトラムにてホテルへ帰着し、徒歩にてレストランへ移動して夕食をとった。

・国連人権高等弁務官事務所にて



・国連難民高等弁務官事務所にて



・国際労働機関(ILO)にて



ヨーロッパ・スタディーズ8日目（1月11日）

トラムにて国際赤十字本部を訪問した。国際赤十字（ICRC）の佐藤さんと、赤新月社（ICFC）の辻田さんから、赤十字の簡単な歴史から、各関連機関の活動などについて、説明していただいた。

午後は、国際赤十字の中にある博物館を見学し、日本語のオーディオガイドを頼りに国際赤十字の活動状況や成果について、写真・コンピューターなど技術的な工夫がされた様々な展示を通して学習した。

・国際赤十字前にて



・国際赤十字前にて



- ・国連欧州本部前にて



ヨーロッパ・スタディーズ9日目・10日目（1月12日・13日）

午前中にホテルから連絡船やトラムを使って旧市街地観光に出かけた。ジュネーブ大学やサンピエール大聖堂など JTB の木村さんが各所で解説をしてくださった。

帰りの便は、ジュネーブーFrankfurt便が30分ほど遅れて、Frankfurtでの乗り継ぎがややタイトになったが、羽田到着は予定より早まり日本時間12時30分ごろに羽田に着いた。キャリーケースの破損対応があつて少し事務的処理で時間がかかったが、14時に解散できた。

- ・サンピエール大聖堂にて



- ・羽田空港にて



【成 果】

帰路にて、ヨーロッパ・スタディーズ研修の振り返りを生徒たちに書かせ提出させた。様々な感想があつたが、総じて、実地にて実物を見たことに感動を覚えていたようだ。今まで机の上で得てきた知識が、実物を見ることでより実感を伴った知識として定着し根付いたのが、この研修の一番の成果だつたと思われる。

また、キャリア教育を中心に社会性を高める学習ができたと思われる。国際機関で活躍する様々な人の話を聞いたのは参加者に深い感動を与えたが、交通機関にて触れる現地の人、食事や買い物の機会に触れる異文化のサービスなど、多くの刺激があつた。言語学習に対しても刺激を得たろう。また集団行動をすることも「社会性」の獲得には重要であつたと思われる。はじめは、集団の隊列が長かつたが、最終日にはそれぞれの集団意識が高まって隊列がコンパクトになった。グローバル社会を知るだけでなく、そこから振り返って日本社会の分析的視点も得て、また小さい行動集団を意識する社会性も身に着けることができたであろう。

【課題】

- ・国際社会に関心が高い生徒集団であったが、事前に「社会性」を身につけられているかは怪しい生徒が少なくなかった。集団生活に対する意識が低いのは、宿泊研修の経験の少なさによるかもしれないが、学内でも指導を検討すべきだろう。
- ・国際問題の前に、日本社会が抱えている問題に対して知識が無いと感じた。国際機関での話の中で、「日本の先住民と移民の対立の例を知っていますか」という問いかけに対して（答えは「アイヌと北海道移民」を期待されていたろう）、生徒は誰も発言できなかった。背伸びをさせて広く世界の見識を得させると同時に、日本社会に目を向ける姿勢も学ばせたい。
- ・参加生徒たちが英語による講話や説明を十分に理解ができたか不安があった。特に国際的な問題や法廷用語などに関する単語をキャッチできていない生徒が少なくなかったように感じる。事前学習にて、英語の必要単語も学習できると良かったかと思われる。
- ・ガイド者によって学習の質は大きく変わるだろうと感じた。アウシュビッツの中谷さんは著名なガイドであって話の深さも9～11年生には十分すぎるほどであったし、オランダの現地ガイドの梅沢さんは、政治経済歴史から美術まで多方面に造詣が深いため多角的で包括的な話をしていただけた。JTBガイドの木村さんも大変気が回って生徒からも信頼を得ていた。大変人的に恵まれた学習機会であったので、今後のプログラムを充実させるのも協力者の質の確保が肝要であると思われる。

⑧模擬国連の実践を通じた外交・国際協力の理解

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|------|------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 実施 | 検証 | 検証 |

(2) 実績の説明

1. 参加者 普通クラス10年と11年25名
2. 日時 毎週木曜日16:00～17:30
3. 場所 MMRCシアター
4. 内容

前期：アフガン侵攻の是非

2001年9月11日の米国同時多発テロ後、アメリカがアフガンに侵攻を開始した。アメリカは、個別的自衛権や集団的自衛権を盾に安保理でテロ攻撃に対する速やかな国際協力を訴え、有志連合を組織し、開戦に至った。この開戦に至る経緯には以下の問題があった。

- i アルカイダの関与の証拠がない中で犯人と断定することに問題はないのか
- ii アルカイダを庇護しているタリバン政権に対する攻撃は正当なものなのか
- iii 国際法上の主体ではないグループによるテロ攻撃に対して自衛権は発動できるのか、これらを論点として授業内歴史会議を設定し、議論させた。

後期：イラク戦争後の平和構築

2003年アメリカは安保理の決議なしで有志連合の協力を得て開戦に踏み切った。その後国連の関与を拒否しアメリカ単独で戦後処理を実施したが、行政機構を牛耳っていたバース党を解党、公職から追放し、武装解除、動員解除も行わず、アメリカの息のかかった亡命イラク人を用いてアメリカ寄りの政権を作ろうとして失敗し、内戦に突入した。そして、さらにこの治安の空白につけ込んでイスラム国が台頭した。このようなアメリカの戦後処理の失敗を繰り返さないためには、どうすればよかったのかを2003年5月に遡って架空の会議を設定し、授業内会議で議論させた。

論点は以下の通り。

- i 武装解除と動員解除をどう進めればよいか
- ii 元戦闘員の社会再統合をどう進めればよいか
- iii 暫定政権をどのように作ればよいか

また、同じ論点で1月13日、14日に玉川模擬国連会議を実施した。参加校は以下の通り：

清泉女学院高等学校 8・立命館高等学校 7・頌栄女子学院高等学校 14・公文国際学園高等部 2・聖心女子学院高等学校 12・ぐんま国際アカデミー高等部 8・山手学院高等学校 8・渋谷教育学園渋谷高等学校 20・立教女学院高等学校 10・渋谷教育学園幕張高等学校 9・広島女学院高等学校 7・昭和女子大学付属高等学校 8

計 12 校 109 名



さらに会議終了後、上智大学 東大作教授による研修会も実施した。



研修会の内容は、直前に終了した会議の成果文書に関するレビューである。通常、模擬国連会議のあとは、必ずレビューを行うが、主に大使団の会議行動に関するものが多かった。つまり、自国の国益を達成できたか、国際益を追求できたか、という点である。ところが、一見国益や国際益を達成できたと思われるものでも、専門家から見れば、実現の為には前提としてこういう条件が必要だとか、こういう点も同時に検討しなければいけないとか、高校生や高校教員の知識では

カバーできない点もあるはずだ。そういう話を伺うことを東教授に要請した。話のポイントは、平和構築には、統治機関や（暫定）政権には正統性と包括性が必要である点であった。

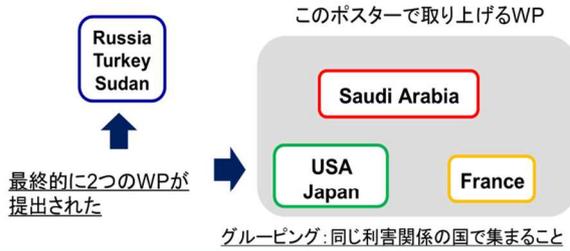
5. 成果

会議の成果を生徒自身が振り返ってまとめたものを次に示す。

模擬国連 一議場会議成果一

玉川学園高等部 1年 甲斐 北本 小倉 高橋

〈WPの主な提出国・グルーピング〉



〈今回の会議のポイント〉

- ・提出された文書は会議の後に安保理の審議にかけられる為、DAが提出された時点でP5(アメリカ、イギリス、ロシア、フランス、中国)の賛成が必要
 - ・アメリカ主導を希望するアメリカの意見を、周りの国とどうコンバイン(すり合わせ)していくか
 - ・しっかり時間・ルールを守って会議に臨むこと
- ↓
- 実際は、時間内にDAを提出することができずWPという形で提出となった。

〈WP内の共通点・相違点と解決案〉 このWPはサウジアラビアとフランスがコンバインしたのちにアメリカが入って完成した

論点1

サウジアラビア

- 武装解除⇒PKF主体
- 動員解除⇒イラク暫定政権の支援
- 治安維持⇒国連が主体、UNITARで人材育成

国連の平和維持軍および多国籍軍が主体となる

フランス

- 武装解除⇒UNMOVIC

武装解除を行うためにイスラーム知識人と一緒に作業する

両国の意見をそのままWPIに

アメリカ⇒PKFの37.5%はアメリカ軍
〈図式化〉

サウジアラビア

フランス

論点2

サウジアラビア

- 一般社会復帰を望むものに対して
- ・就職先を斡旋するシステム構築
- ・Humentumが人材育成

フランス

- UNICEFの支援
- 社会復帰を目指す者に対して様々な条件に対応できるようにする

社会復帰の場として「農業」「インフラ整備」があげられることを主張しながら
両国の意見をそのままWPIに

論点3

サウジアラビア

- 国連とイラク国内の民族代表が行う
- 周辺国の助言を組み入れる
- バース党は全員は解体しない

フランス

- 正式に選ばれた人が行う
- バース党の人は一人も入れない
- 様々な宗教・民族の代表を含む

両国の意見を取り入れ
バース党は幹部には含まない。

アメリカ⇒周辺国ではなくイラク戦争に関係した国

解決案

アメリカ

解決案

WP
提出

〈運営側の考える会議との相違点〉

- 運営側 -
- アメリカグループがアメリカ主導を譲らず、「アメリカグループ VS その他のグループ」になる
- 実際の会議 -
- サウジアラビア、フランスのグループがアメリカを早い段階でコンバインしていき、アメリカの入れたい文言の力を弱めていくことに成功。会議途中で大使の中からは、アメリカとのコンバインを諦めてその他のグループ間でコンバインを進めようという声がかかることもあったが最後までしっかりねばることができた。アメリカを含めたDAの製作に取り掛かることができた。アメリカも国益が損なわれすぎないようにしっかり配慮をしながらコンバインをすすめていった。しかし、アメリカが入ってくることで自体に反対意見を持つ、ロシア・スーダングループとのコンバインとはならずコンセンサスに持ち込むことができなかった。

〈今回のWPが出たと仮定するイラクの現在〉

今回のWPの大きな成果として、本来はアメリカが大きな権力を持ち、イラクを支配していたのとは異なり周りの国がアメリカの力を押さえつけることに成功している。よってアメリカの思う通りだけでなく、周りの国が本当にイラクのことを考えた政策を考えることができていると考察される。細かくは、性急な民主主義化を抑制する文言が入っていたり国連という中立な立場が主導を握ることがあげられる。

〈まとめ・学んだこと〉

今回は、最終的に事実上のコンセンサスでないと文書として意味のないものになってしまうので、どうしたらコンセンサスに持ち込めるかの議論が続いた。アメリカのグループを除いて大きな差は少なく、小さな差が多かった事から逆に相違点を洗い出し、すり合わせていく事に苦勞した。今回の論点の一番の難関点であった「アメリカの意見をどうするか」という点では周りの国がうまくアメリカの譲歩点を提案していくことで、アメリカをWPIに盛り込むことができた。周りの国はしっかりアメリカを含むことで国際益の面からみて有効なDAに近づけることができ、またアメリカはできる限りの国益を守ろうとしたことで、国際益・国益の両方が求められているDAとしてとても良いものが提出されそうであった。しかし時間が足りなくDAの提出ということにはならなかったのが悔しい点である。会議を行っていく中で、集合時間や提出時間を守ることは簡単なようで難しいということを改めて実感した。しかし全体を通してこの難しいテーマの中でそれぞれが国益・国際益をしっかりと考えながら会議行動をすることができ、しっかりと会議が終えることができたことは本当に良かった。普通の授業は、会議に比べると少人数だが、国益を考えながら発言することは困難だった。しかし会議を見ているとどの国も国益、国際益を考え積極的に話していて、模擬国連は下準備がどれだけ大切かが分かった。

模擬国連 —イラクにおける包括的再建に関する会議—

玉川学園高等部 2年 矢沢あすか

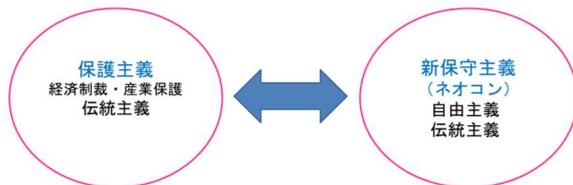
アメリカ大使としての提案

2001年のアメリカ



G.Wブッシュ大統領（共和党）

冷戦後、「唯一の超大国」として国際社会で絶大な存在感を示すようになった。
そして新保守主義（ネオコン）の台頭により、アメリカの軍事・外交戦略は方向転換し、国際協調路線は後退。「単独行動主義（ユニラテラリズム）」をとるようになった。



提案した政策

主体：アメリカ国防総省組織、連合国暫定統治機構CPA
フセインとその絶対的支持者である幹部官僚組織を逮捕・追放

論点1：武装解除・動員解除・治安維持

2段階で重機・武器を回収する

- ①大型戦闘機・化学兵器の回収
- ②戦闘員から小型武器回収

戦闘員からの武器回収と更生を同時並行して行う

治安維持部隊の再編成

[構成員 既存の国軍・警察+軍事的能力の高い民族・部族]
米国軍による強化育成
フセイン政権共和国防衛隊・大統領警護隊は永久解任

論点2：戦闘員の社会再統合

- ①公共事業により雇用を生み出す
- ②民間部門への積極的な技術支援

アメリカを変えた事件

9.11 同時多発テロ

アルカイダという反米武装組織により、アメリカは過去最大の被害を受けた。
この屈辱は一生忘れることはない。
そして、民主主義とアメリカの安全を脅かすような独裁、テロが根絶するまで私たちの戦いは終わらない。

「悪の枢軸」北朝鮮、イラク、イラン



自国を守ることが最優先
独裁、テロ武装組織に対する攻撃体制へ

新保守主義の思想をより強め、これが確かなものであると示した。

論点3：暫定政権樹立

①民主的連邦制の推奨



中央委員会 新政権・暫定政権樹立に向けた枠組み形成
地域委員会の管理

地域委員会 部族・民族間の間の関係、領土の監視と管理
地域の治安維持（公共施設の管理）

②法部会の設置

構成員 現地イラク人裁判官、法律教授、法律専門家
拘束中であフセインと幹部官僚の処罰のための法整備

感想

今回の会議で鍵を握るアメリカという大役を務めることが、とても大変だった。
現実では失敗したアメリカという立場からどう他国を説得し、我々の政策を受け入れてもらうのか、そしてどこまで譲歩するのかという点が難題であった。本番会議では、他国に対して寛容になりすぎて、譲歩をすぐしてしまったことを後悔している。
一年間の授業を通して、各国が掲げる政策に込められた戦略に興味を持つことができた。また、国連という組織が国際社会にもたらす影響を理解し、国益を守りながら国際益も尊重する重要さを学んだ。
大使として、国を代表して他国と向き合っていくことの責任の重さを実感することができた。

模擬国連 —イラクの戦後処理—

玉川学園高等部 10年 古森恵美子 栗原実佑

模擬国連会議 トルクメニスタン

基本情報

表1 トルクメニスタン基本データ

| | |
|-----------|--------------------------|
| 国の人口 | 580万人 |
| 宗教 | 主にイスラム教スンニ派 |
| 民族 | トルクメン系、ウズベク系、ロシア系、カザフ系 等 |
| 一人当たりのGDP | 6643ドル |



トルクメニスタンは永世中立国である。主に石油ガス、原油などの資源を輸出しており、また、大規模な灌漑*[かんがい]農業も行っている。
 イラク⇒近国ではあるが、関係は深くない。
 アメリカ⇒貴重な貿易国であり、教育支援などの援助を受けている。
 ※灌漑・水路の水で土地を潤す事。

①武装解除・動員解除・治安維持

☆武装解除

多大な事故を防止するため、武装解除を優先。現地の調査を元に武装解除する順番を決め、各武装グループのリーダーに武装解除するように、国連スタッフが説得。

☆武装解除をする上でのメリット
 「開発プロジェクトの支援」

☆動員解除・治安維持

警察組織



軍隊
 警察と軍隊を区別

警察は文民警察(PKOの一部)によって、現地警察を民主的な警察の在り方を徹底。

②戦闘員の社会統合

元戦闘員が市民としての地位を確立し、就業することで収入を得、自立するまでの過程を示す。

○戦闘員の社会再統合を成し遂げるためには、イラク国内の経済開発が必須である。

そのためには

- ①石油への依存をやめること
- ②元戦闘員によるインフラ整備などの公共事業の実施

の二つの取り組みが必要だと考えた。また、トルクメニスタンは石油生産国であり、1の取り組みは自国にとっても重要なものだと考えた。

③暫定政権の樹立

暫定政権→選挙による正式な現地政権
 が選出されるまでの仮の政権

イラク 宗派や少数勢力が存在

「モザイク社会」の形態となっている。

- これらの様々な宗派や民族を考慮する
- イラクの暫定政権が包括性と正統性を確保する

これらのことを考慮し、国連主体で暫定政権樹立を進めていくべきだと考えた。

会議行動

会議前半、イランが中東諸国をはじめとする、PKO主体で戦後処理を進めたいという意見を持った中東諸国の国々を集めてグループを形成した。トルクメニスタンはPKOの一部である文民警察主体で戦後処理を進めるべきだということだったため、そこに参加し意見を交換した。このグループでは同じような政策を立案していた国が多かったため、意見がまとまりやすかった。

次にイランのグループの意見とフランスのグループの意見をコンバインさせた。PKOを主体にするという方向で一致していたため、ここではスムーズにコンバインが進んだ。その中で論点2の戦闘員の社会統合において石油の生産財源を得るといった意見が出た。しかし、トルクメニスタンでは石油の生産をしているため、イラクで石油の生産が盛んになってしまうことはトルクメニスタンにとってはよくない。そのため、イラクの経済開発は石油に依存しないようにするという内容の文書を入れるという意見を出した。

成果と課題

中東や同等な意見を持つ国々と話し合いを深めることにより、良い政策にまとめられたと思う。しかし、コンバインに多くの時間を費やしてしまい、DRの提出時間に間に合うことが出来なかった。意見の異なった国々とコンバインをしようとつじつまが合わない部分が多くあり、多くの時間を費やしたことが原因だと思う。もう少し時間に余裕を持ってコンバインをし、効率的に行えば、より良い会議になったと思う。今回の会議での改善点や得た知識をこれからの会議で生かしていきたい。

以上の生徒なりの成果分析を整理してみたい。

まず、この模擬国連の学習経験がもたらす能力とはどのようなものであろうか。模擬国連活動にはたくさんのスキルやプロセスがあるのだが、それは単に議題になっている国際的な問題の理解に結びつくだけでなく、他の文脈でも活用できる汎用的な能力の育成に寄与するのではないかと考える。以下にスキルやプロセスとそれがもたらす能力を整理する。

スキル…関連する情報を探す、読みながら要点をまとめる、スピーチ原稿を書く、相手に自分の主張を話す、相手の主張を聞き取る

プロセス…政策を立てる、交渉する、決議案をまとめる等

育成する能力…<リサーチ力><読解力><表現力><分析力><創造力><交渉力>
<判断力><批判的思考力>

これは、あくまで私の感覚に基づく整理なので、学問的な厳密性はないが、このように多くの汎用的な能力を複合的に育成できる可能性があることは言える。

模擬国連が他の教育活動と大きく異なる点は、たいへん創造的であることである。遅々として解決に向けて進まない問題が多い中、高校生が斬新な視点を生み出して国際社会が見いだしていないような新たな解決策が提案されることもある。今回の会議で言えば、2003年当時アメリカが取り組んだ戦後処理と平和構築になかった提案（武装解除のやり方、治安維持部隊の再編成、戦闘員の社会再統合のための経済開発など）がいろいろなされている。

また、交渉の際には、実に様々な能力が発揮される。自らの意見を明確に伝える力はもちろん、正確に相手の発言を聞き取りつつそのポイントをつかみ、自分と相手の意見の共通点や相違点を見だし、どこに交渉の余地があるかを判断し、建設的に交渉の土俵と皆が受け入れられる解決策を提示していく。そのためには、自分の意見に固執するのではなく、相手の立場や利害を尊重しながら、多角的に様々な要素を検討する批判的な思考が必要となる。

また、資質も同様に、育成することができると思う。

このことを考える際に比較できる教育活動がある。国語科や社会科で主に使われるディベートである。ディベートは、ある論題について、肯定側と否定側に分かれて議論を戦わせる活動である。模擬国連と共通して育成できるスキルや能力も多いが、決定的に異なるのは、コンセンサスへの意識である。ディベートは、そもそも議論が平行線をたどることを想定している。その想定のもと勝敗を決するのであるが、模擬国連は、そういう意味での勝敗はなく、目指すべきは、すべての会議参加国が認める決議案を採択することである。実際の国連でも、かつての冷戦下の機能不全の状態を脱し、今は7割の案件がコンセンサスで採択されている現状がある。

このコンセンサスへの志向は、参加する生徒に何をもたらすであろうか。生徒は、担当国を与えられて、政府の代表として会議に参加する。当然国益を害するような決議案には、断固として反対しなければならない。だが、国益を死守することだけにこだわると、国際社会からは孤立してしまう。これも、国益を減じることにつながってしまう。従って、国益と同時に国際益も追求せざるをえない。他の参加国と良好な建設的な関係を築き、協調性を保ちながら協働して決議案に様々な意見を集約していく。各国大使が、国の枠の中にながらその枠を超えてグローバルな視点から問題解決に向かう姿は、まさにこの模擬国連の教育意義の最たるものだと考える。

そして、今回の会議でも、コンセンサスに向けて本校生徒のみならず他校の各国大使団が懸命に努力している姿を間近に見ることができた。

6 課題

模擬国連という活動は、主体的で対話的で深い学びをもたらす、優れて高度で総合的な学習である。日本が国際社会でリーダーシップを発揮するには現時点では必要不可欠な活動のようにも思える。だが、今後さらなる普及を図るのには大きな課題がある。アメリカのハーバード大学で始まった関係で、日本には大学のサークル活動の形で普及してきた。近年は、高校や中学校にも広まりを見せているが、多くはクラブ活動としての普及である。そこでは、上級生の経験知が代々下級生に受け継がれる形で、多くは生徒間での交流を通して指導がなされてきた。

一方本校では、放課後の時間帯に設定した自由選択の授業の形で実践してきた。ところが、まず教科書がない。指導書もない。プロシージャブック以外は生徒が参照する参考書もない、という状況である。SGHの5年間でのこの授業での蓄積はあるが、体系づけるのにはまだまだである。この指導のためのリソースの欠如が、本校および全国の現場での課題である。

この活動を授業で展開できるようになると普及のスピードが格段に上がるはずだ。それには文部科学省が、模擬国連活動の意義を認めて、この活動のカリキュラム化に取り組む、あるいは、教員研修の支援をする、各学校で取り組めるように様々な配慮をする、などが必要となってくる。切に早急なる対応をお願いしたい。

◆課題外研究について

《1》 英語に対する取り組み

A. 実用英語技能検定試験対策講座

MMRCと英語科の共同企画として、高学年生の英検受験を後押しする講座を年3回の英検に合わせて開講した。特に対象としたのは、自分から積極的に受験はしないが、きっかけがあれば受験するであろう生徒たち、と設定した。こうした狙いから準2級を扱うこととした。

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|----------------|------|------|--------------|--------------|----|------|--------------|--------------|-----|--------------|--------------|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 英語検定及び英語検定対策講座 | | 対策講座 | 対策講座 検定1次 | 2次対策 検定2次 | | 対策講座 | 対策講座 検定1次 | 2次対策 検定2次 | | 対策講座 検定1次 | 2次対策 検定2次 | |

(2) 実績の説明

1. 内容

玉川大学文学部英語教育学科の大学院生・大学生による英語検定準2級1次試験講座を英語検定に合わせて年3回設定した。英語検定を受験の条件にしている大学は多くが2級と設定しており、受験を意識している生徒は必然的に2級に取り組む。そのため、前段階として英語検定を意識させる目的で準2級対策の講座を開講することで、高学年の英検受験者数・合格者数を増加させる手段としてMMRCから提案があった。

回数・内容は3回とも時間をかけて見直しを行ったが、一貫して大切にしたのは、「生徒が手応

えを感じられること」。そのために、講義形式ではなく実際に問題演習を多く取り入れることを英語科より提言した。1次試験に含まれる **Listening, Reading, Writing** をバランスよく取り入れるため、下校時間を延長したり、時間短縮のため過去問題を部分的に切り取って演習をさせたりと工夫した。

講座回数も毎回検討材料となった。第1回英検から第3回にかけ、受講者数は徐々に減る傾向にあること、また、英語教育学科の方で講師役の学生を選出することが徐々に難しくなったことから、次第に回数を減らすこととなり、第3回英検対策講座では模擬試験の1回のみとした。

2. 成果

英検準2級対策講座ではあるが、受講申し込みをする生徒の中には英語力が3級に到達していない者、対策講座に申し込んだが英検そのものを受験申請しないケースもあった。

一方、講師の条件も徐々に厳しくなった。講座発足当初は教員免許を持つ大学院生が選ばれ、教材作りも任せることができた。しかし次第に学部生も条件に入れることとなり、英語科で教材選びから授業の段取り、**Writing** の添削まで担当する必要が出てきた。

合格率は受講者の日頃の英語の成績を見れば容易に想像が付き、対策講座の効果は限定的であったと言わざるを得ない。だが、英検を未経験の受講者にとって、試験問題の出され方に触れる機会を得たことは収穫であったとの感想も聞いている。

昨年度末からスタートした対策講座の4回目、すなわち今年度第3回英検向け対策講座でひとまず終了となる。

B. GTEC による統一基準学力測定

(1) 実施日程

GTEC for Students という名称が、今年度から GTEC に統一された。高学年では12月末に3技能で実施した。9～11年を対象に3技能テストを12月20日に行った。”SET UP”というテスト解説冊子を利用して直前の週に英語の授業で事前指導を行ない、テストの概略と出題方式を周知した。

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|------|------|----|----|----|----|----|-----|------|------------|----|------|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| GTEC | | | | | | | | 申し込み | 事前指導 実施 | | 結果返却 | |

(2) 成果

| | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 |
|-----------------|-------|-------|-------|-------|
| Total Score | 292.4 | 414.5 | 417.0 | 482.7 |
| Reading Score | 95.9 | 152.0 | 154.3 | 176.6 |
| Listening Score | 121.0 | 167.0 | 162.2 | 195.1 |
| Writing Score | 75.4 | 95.5 | 100.1 | 109.4 |

(同一学年の推移。2015年＝8年生、2018年＝11年生)

| Grade | Total | | Reading | | Listening | | Writing | |
|-------|-------|------|---------|------|-----------|------|---------|------|
| | 2017 | 2018 | 2017 | 2018 | 2017 | 2018 | 2017 | 2018 |
| 7 | 0 | 13 | 0 | 15 | 0 | 27 | 0 | 1 |
| 6 | 12 | 16 | 32 | 13 | 26 | 39 | 0 | 6 |
| 5 | 32 | 37 | 25 | 26 | 15 | 21 | 11 | 31 |
| 4 | 47 | 58 | 28 | 72 | 34 | 26 | 132 | 114 |

(受験者数：2017年=225名、2018年=218名)

2015年～2018年の点数の推移を見ると、4項目とも全て右肩上がりとなっていることがわかり、学年が進行するにつれて、着実に英語力が伸びていることを示している。8年生～9年生にかけて大きく伸びを見せ、9年生～10年生では横ばいに近い数値となる結果は毎年同様である。これは8年生ではCoreタイプ(満点440点)、9～10年生はBasicタイプ(660点)、11年生はAdvancedタイプ(810点)を受験させており、満点の設定が上がるにつれて学力の高い生徒がさらに上位の点数を獲得できるようになるためである。また、9～10年生で横ばいであるのは、9年生では高校受験を目指して学力を挙げている生徒がいる一方、10年生ではそれらの生徒が抜け、代わりに主に公立の中学校での英語教育を受けた生徒が入学してきている学年であるためと推測する。

次にグレード別に2年間を比較してみた。どのグレードでも上位の成績を取る生徒が増加しているが、数カ所人数が減少している箇所がある。すなわちReadingのGrade6、ListeningのGrade4、WritingのGrade4である。IBクラスの生徒たちがますますグレードを上げており、普通クラスの成績上位者から抜き出した上位グループを形成しているためである。

(3) 課題と改善策

IBクラスにとっては満点レベルまで到達する生徒がおり、本来の実力はもっと高いかもしれないが、GTECでは計測できていないと言える。また、大学入試においても4技能テストを実施する外部検定試験を導入することが発表されており、2019年度は次のように変更する。

9年生：アセスメントタイプで3技能、12月学校実施

10年生：アセスメントタイプで4技能、12月実施、スピーキングは英語の授業内で実施

11年生：検定タイプで4技能、6月15日実施

いずれの学年もIBクラスは受験しない。

C. 英語会話

(1) Grade 11

1. Contents

Presentations

1. General presentation with research question.
2. Presentation on research questions provided by teacher.

Other Assignments

- Communication Cues textbook
- The O.C. (American television program)

2. Learning Outcomes

For the presentations, the students had to research a particular topic, present the research to the teacher, translate the work into English and then give a 5-minute power presentation in English to teachers of English. Students were graded on presentation ability, English speaking and understanding of the topic.

The Communication Cues textbook is about situations non-Japanese students have in Japan. Students were evaluated on short listening and writing assignments. Finally, students watched different episodes of The O.C. and were given mostly comprehension-based assignments after watching.

3. Issues

As always with this course, students differed greatly in English ability and this absolutely contributes to the enjoyment and assessment they get from the class. This was especially apparent in the two presentations. Also, listening was found to be challenging for more than 50% of the class.

(2) Grade 12

1. Contents

Presentation topic of interest + world issue

Daily conversation – imprompt speech

Project – debate + infomercial

2. Outcome

Students presented on different topics to increase their confidence, understanding and skills in English. Projects additionally allowed for students to showcase their creativity and gain a deeper understanding of the world.

3. Awaiting solution

Some students had issues producing original work. To avoid academic dishonesty, it requires a school based approach for teachers, students and parents to recognize what is plagiarism and collusion.

D.学内レシテーションコンテスト

(1) 実施日程

| 業務項目 | 実施日程 | | | | | | | | | | | |
|--------------|------|----|----|------|----|----|-----|------|------|----|----|----|
| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| レシテーションコンテスト | | | | 課題提示 | | 準備 | 準備 | 予選実施 | 決勝大会 | 検証 | 検証 | |

(2) 実績の説明

1. 参加者

I Bコースを含む10年生、11年生全員

2. 日時 平成30年12月19日

3. 場所 UCH マーブルホール

4. 内容

「グローバル」な社会では、世界の諸問題に対して英語で話し合い、問題を解決していく力、英語で交渉していくコミュニケーション力が求められる。

現在の授業では、自分の言いたいことを英語で表現できるようにさせるために、英文訳読に終始する授業からの脱却を図り、既習の英語を使って英語でアウトプットさせることを大切にしている。場面場面で自然に英語が口から出てくる「英語の自動化」を実現させるために、音読を重視した授業を展開している。コーラスリーディングに始まって、リード・アンド・ルックアップ、シャドーイングなど多様な方法で音読の訓練を授業内に行うことを心がけている。このような音読の授業の成果を目に見える形で提示したいということと、また生徒が更なる音読へのモチベーションを高めるきっかけとなって欲しいという意図からレシテーションコンテストを4年前から行っている。今年度はIB生徒による英語プレゼンテーションの枠を大幅に拡大し、IBクラス生徒に多様なテーマに関して英語で発表して貰った。

1stステージは、11月に全生徒対象でそれぞれの授業のクラスで行った。暗唱するテキストとしては、10年生では教科書 Flex I の教科書のパッセージを、11年生では教科書 Flex II の教科書パッセージを用いた。生徒は与えられたパッセージを予め暗記して練習し、英語のクラスにて他の全生徒の前で発表をした。習熟度別でクラスが編成されているため、10年生では選抜クラス2クラスから各2名と、Aコースクラスからそれぞれ1名を代表スピーカーとして選抜した。11年生では、PL・Bコースクラスから各1名と、Aコースクラスから各2名を代表スピーカーとして選抜した。クラスでの暗唱発表の際は、生徒たちには評価シートを配り発表者の評価をさせた。このレシテーションの評価は、毎週行っている単語テスト1回分に相当するものとして評価に組み入れ、生徒のレシテーションに対する前向きな取り組みを促した。

ファイナルステージである『クリスマス・カップ』は、12月19日にUCH マーブルホールにて行われ、それぞれのクラスで勝ち上がって来たスピーカーが英語のレシテーションの成果を披露し、プライズを競い合った。

コンテストで使用したテキストは以下のようなものであった。10年生ではイギリスの作家ルイス・キャロルによる *Alice's Adventure in Wonderland* から幾つかのシーンを選んで、代表生徒達に暗唱させた。11年生においては、世界の偉人・セレブリティによるスピーチを生徒達に暗唱させた。今大会でのタイトルは以下の通りである。

| | |
|------------------------|---|
| A・PLコース部門 | The Story of My Life by Helen Keller |
| | Emma Watson: Gender equality is your issue too |
| | Always on the side of the egg by Haruki Murakami |
| | Barack Obama's National Address to America's Schoolchildren |
| | Angelina Jolie Receives the Jean Hersholt Humanitarian Award at the 2013 Governors Awards |
| Bコース部門 | Nelson Mandela's speech |
| | Albert Einstein's speech |
| | Mahatma Gandhi's speech |
| | Abraham Lincoln's speech |
| | Malala Yousafzai's speech |
| Mother Teresa's speech | |

また、IBによるプレゼンテーション部門では、6つのグループ・個人（計12名）による英語プレゼンテーションが行われた。今大会での発表タイトルは以下の通りである。

| |
|-------------------------|
| Diversity in Japan |
| GHIBLI |
| Economics |
| MSF |
| Everything in your life |
| The power of languages |

普通学級とIBコースの生徒は普段全く異なるカリキュラムで学んでおり、互いに普段の成果を見せ合う貴重な機会となった。特にIB生徒による、スライドや動画を用いた英語発表はどれも工夫が施された非常に完成度の高いものであった。会場で聴いている生徒たちは、アンケート用紙に感想を記入し、選出者の発表を評価した。

アンケートの用紙からは、発表者の姿から刺激を受けた様子が伝わって来た。

5. 成果

授業内レシテーションテストの前には授業内で練習の時間を取ったが、生徒たちが英文を見ないで言えるように一生懸命何度も音読をする姿が見られた。また、このレシテーションでは普段の音読の練習よりもより積極的に声に出して音読をする姿も見られた。このように、レシテーションコンテストによって音読の活性化を図ることが出来た。

また、英語の授業では日頃から、左にスラッシュで区切った英文、右にその日本語訳が書かれたプリントを配布して生徒達は学習しているが、このプリントを活用して、日本語訳だけを見ながらその日本語を英語で言えるように練習する生徒が多々見られた。この練習では日本語→英語への変換のトレーニングにもなっており、リプロダクションへと繋がっていったと考えられる。また、英語をスラッシュで暗唱させることによって、自然と頭の中で英文を作成していく力を身につけることにもなる。今後、この練習が「英語の自動化」へと発展していくことを願っている。

また大会運営においては、今年度も前年度同様、大会運営ボランティアを募り、運営に携わって貰った。大会前にボランティアの呼びかけを行ったところ、35名の生徒が自らボランティアに志願してくれた。事前・直前に説明会やミーティングを開き、仕事の希望を聞いた上で役割を割り振った。受付・パンフレット作成・カメラマン・プライズ担当など、生徒達は大会前及び大会後に、各自の持ち場でそれぞれの役割を果たした。生徒達はそれぞれ仲間と協同して創意工夫しながら仕事に取り組み、本コンテストは玉川学園の建学の精神の一つである「労作教育」が実践された場でもあった。

6. 課題

レシテーションコンテストは、何とか毎年の恒例行事としていき、継続して音読の活性化につなげたいと考える。しかし、教師の数が減ってしまったことによる一人当たりの仕事量が増えている現状の中、少数の教師によりレシテーションコンテストの運営を続けていくことに限界を感じる。今後は、生徒たちが運営委員となって、運営を続けられるように工夫していきたいと考えている。

また、音読による「英語の自動化」だけで終わるのではなく、次は自分の言いたいことを英語で表現していけるような練習をさせていきたいと思う。そのためにはライティングの練習などのアウトプットの練習やプレゼンテーションの練習へとつなげていきたい。

《2》 広報、普及に関して

(1) 学内 LAN による広報

玉川学園では、CHaT Net (Children, Homes and Teachers Network) という、児童・生徒と家庭 (保護者) と教職員 (学校) が参加できる教育コンピュータ・ネットワークがある。そのネットワークを用い、グローバルキャリア講座や研修旅行、Web ページオープンのお知らせや SGL48 ポイント制度など SGH に関する告知をおこなっている。専用メールアドレスも設け、生徒や保護者からの質問にメールでも対応できている。また、海外研修中のオンタイムの情報が研修先から随時アップされている。

(2) 校舎内の掲示、モニターによる広報

高学年校舎 3 階、4 階の生徒ラウンジに SGH 掲示板を設置し、今年度のグローバルキャリア講座の講師の先生方一覧および SGH に関する研究会や研修のお知らせなどを掲示するスペースを設けている。校舎内 5 カ所にあるディスプレイを利用して、講話実施のお知らせや研修参加者募集のお知らせを流している。最も出入りが多い校舎の入り口でも積極的な広報を行っている。また、地歴公民科研究室前と英語科研究室前の掲示板を用いて、コンクール・コンテスト、イベント関係のポスターを掲示し、生徒の目に触れるようにしている。



生徒ラウンジ



校舎入口



モニターを使っでの広報

学内外にホームページを通じて情報を発信しつづけている。グローバル・キャリア講座は、毎回録画、学内イントラネット上に You Tube の QR コードを掲載し、講座に参加できなかった生徒や保護者・教職員の方々でも見られるようにしている。その他学内の発表は例年通り、ペガサス祭での展示、探求型学習生徒発表会 (10 月) での発表、模擬国連 (1 月)、SSH/SGH 合同発

表会（2月）を開催した。特筆すべきは、日本学術会議 FutureEarth の推進に関する委員会で本校 SGH の実践に関する発表の機会を得、多くの著名な大学、行政の関係者へ実践を発表する機会を得たことである。

| 2018年度メディア掲載一覧 | | | | |
|----------------|-----------|---------------------------|--------------------------------------|--|
| | 月日 | 掲載 | タイトル | 内容 |
| 1 | 2018.7.1 | 玉川大学・玉川学園同窓会誌「たまがわ」No.154 | 2017年度玉川大学・玉川学園校友会 学友会賞が決定しました | SGH、ワールドスタディーズで取り組んだ国連WFP賞受賞者の紹介 |
| 2 | 2018.6 | ZENJIN 2018特別号 | SGHグローバルキャリア講座で高井研さんの特別講演を実施 | 2017年10月20日に実施したグローバルキャリア講座の紹介 |
| 3 | 2018.7.10 | 月刊誌 全人 No.829 玉川大学出版部 | 玉川学園ニュース IB ピーチクリーン | IB生が任意で行っている江の島ピーチクリーンの様子掲載 |
| 4 | 2018.7.10 | 月刊誌 全人 No.829 玉川大学出版部 | K-12 SGHグローバルキャリア講座 | 本校卒業生、本杉佳子さんの講演の様子掲載 |
| 5 | 2018.9 | 月刊誌 全人 No.830 玉川大学出版部 | 特集「世界の課題を考える」K12SGHスタディーツアーの紹介 | 本校SGH5テーマと海外研修旅行の位置づけ、参加生徒の声を掲載 |
| 6 | 2018.12 | 月刊誌 全人 No.833 玉川大学出版部 | 玉川ニュース「SGH/SSHグローバルサイエンスキャリア講座」 | ロート製菓会長山田邦雄氏の講演の様子を紹介 |
| 7 | 2018.12 | 町田市役所広報課まちだOごと大作戦担当 | さあ、一緒に、南アフリカへ！～ホストタウン「南アフリカ共和国」応援PJ～ | 自由研究グローバルスタディーズ生徒による地域連携企画の紹介 https://machida-marugoto.jp/article/708 |
| 8 | 2019.1 | 月刊誌 全人 No.834 玉川大学出版部 | 特集「家族のかたち」K12 よこそわが家へ | 海外研修生を受け入れたホストファミリーの紹介 |
| 9 | 2019.3 | 月刊誌 全人 No.836 玉川大学出版部 | K-12 SGHヨーロッパスタディーズ | 海外研修SGHヨーロッパスタディーズの紹介 |

| 2018年度 SGH関連視察訪問受入 | | | |
|--------------------|------------|----------------|--------------------------------|
| | 月日 | 団体 | 内容 |
| 1 | 2019.1.16. | チーム ラボキッズ 株式会社 | ワールドスタディーズ授業見学およびSGH全般に関する意見交換 |

| 2018年度 SGH関連プレゼンテーション | | | | |
|-----------------------|--------------|--|--|------------|
| | 月日 | 会議 | タイトル | 場所 |
| 1 | 2018.4.8. | 保護者対象 玉川学園教育説明会 | SGH 2017年度報告および2018年度へ向けて | 玉川学園チャペル |
| 2 | 2018.8.2. | 追手門学院 合同教員研修会 | 大学・社会で求められる力を育成するための中高の取組（自由研究・学びの技・SGH・SSH・IB） | 玉川大学教育棟 |
| 3 | 2018.9.16-17 | 玉川学園ベガス祭 SGH展示ポスター発表 | SGH国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成 | 高学年校舎 |
| 4 | 2018.10.27 | 探究型学習発表会 SGH展示ポスター発表 | SGH国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成 | 高学年校舎 |
| 5 | 2019.1.22 | 日本学術会議フューチャー・アースの推進に関する委員会持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会 | 公開ワークショップ「Future Earthと学校教育：ESD/SDGsをどう実践するか」SGHからFuture Earth・SDGsへ | 日本学術会議大会議室 |
| 6 | 2019.2.16 | 平成30年度SSH/SGH合同発表会 | 卒業生追跡調査からみる 玉川学園SGHの5年間の歩み | 高学年校舎 |

(3) Web 上での日本語および英文ホームページの作成による広報

2014年9月に開設したSGH専用のホームページで、SGHの取り組みを日本語と英文で発信している。

SGH Web ページアドレス <http://SGH.tamagawa.ed.jp/>

(4) 研修参加生徒による学内生徒発表会や展示発表の実施

- 参加者 アフリカン・スタディーズ、ヨーロッパ・スタディーズ参加者、模擬国連履修者、ラウンドスクエア実行委員など約100名
- 日時 9/15・9/16（ペガサス祭）,2/16（SGH・SSH合同発表会）
- 場所 9/15・9/16：高学年校舎3F
2/16：高学年校舎3F・4F
- 内容
 - ・ペガサス祭

『天馬行空～輝く自分～』のテーマのもと、「想像力を広げ、互いに高め合うことで、それぞれの個性を輝かせる」という想いを込めて、クラス、委員会、クラブ、自由研究の活動を紹介す

る中、スーパーグローバルハイスクール(SGH)の取り組み、海外研修などでの課題研究の成果発表を行った。

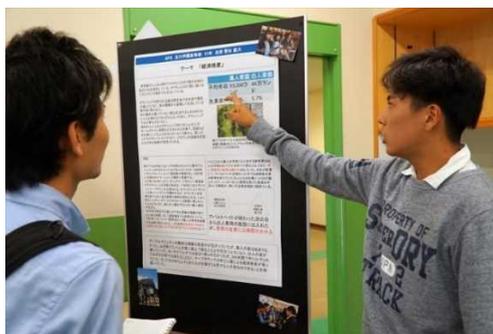
「アフリカン・スタディーズ」「ヨーロッパ・スタディーズ」「ラウンドスクエア」「模擬国連」のコーナーが設けられた教室で、活動の記録やレポート、写真をパネルに掲示。案内役の生徒が、来場者に積極的に声をかけ、自分たちの体験や課題研究を行った際に考えたことなどを伝えていった。

「アフリカン・スタディーズ」や「ヨーロッパ・スタディーズ」の展示場所では、発表者が現地で感じたことや問題点を、来場者に具体的かつ丁寧に説明していた。特に「アフリカン・スタディーズ」では環境問題について、「ヨーロッパ・スタディーズ」では人権についての質問が多くあり、来場者たちにそれぞれの問題を考えるきっかけを与えられたのではないと思われる。

「ラウンドスクエア」では7月の玉川会議で行われたことの説明を主とし、いらなくなった服を捨てるのではなく寄付をするなど、私たちの身近にもできることはあることを、生徒たちが来場者に向けて説明していたのが印象的であった。



【ラウンドスクエアのポスター、発表】



【アフリカン・スタディーズのポスター】

【ヨーロッパ・スタディーズのポスター】

・SGH・SSH 合同発表会

昨年度より、SSH と合同で課題研究についての発表会を学内にて実施している。海外研修に参加した生徒の課題研究の発表はもちろんだが、その他にも1月に実施された模擬国連についての発表も行われた。当日は学内の関係者だけでなく、学外からも他の SGH 校の教諭や多くの方が来場した。

まず、ラウンドスクエア国際会議に参加した生徒たちが、国際会議の概要と今年度の国際会議について発表を動画やスライドを用いて行った。発表者の一人が「『言葉の壁』は、実は自分たちが作っています。それを壊すためには勇気と積極性が必要です」と述べていたのが非常に印象的であった。



次に「スーパーグローバルハイスクール（SGH）全国高校生フォーラム」に参加した生徒が、「サウジアラビアとイラン」の関係についての発表を行った。石油の算出価格が同じレベルの両国であるが、その実情や社会構造はずいぶんと違っていることを踏まえ、中東のリーダーとなり得る可能性を秘めている両国が、今後発展していくためには何が必要なのかについて、国際情勢を鑑みながら独自の切り込みで発表をしていた。

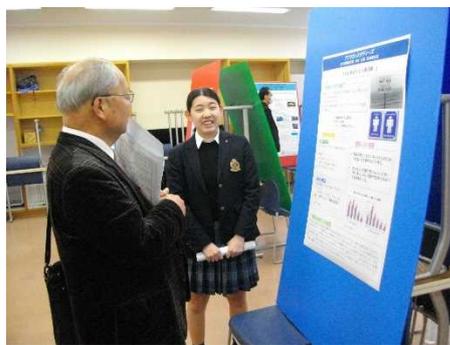


最後に、模擬国連の運営に携わった生徒が、模擬国連の概要とその本質について、1月に玉川学園で行った1日会議を例に出して発表を行った。模擬国連はディベートをすること、相手を論破することやアワード（表彰）をうけることが目的ではなく、国際社会に対する多角的な視点を養い、社会に適用する人としての成長を促す場であると結論づけていた。

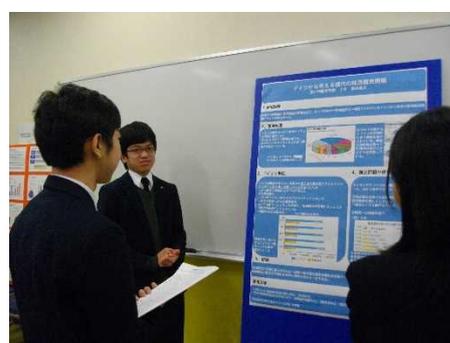
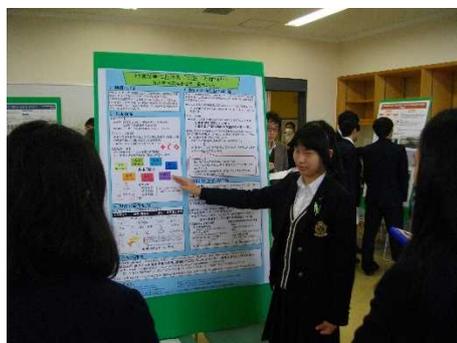


発表の後、それぞれの課題研究についてのポスター発表を行った。自らの課題研究について発表するだけでなく、他生徒の課題研究の発表を聞くことにより、課題研究の内容はもちろんのこと、プレゼンの仕方、ポスターのレイアウトについても大いに参考になったと多くの生徒が感想

を述べていた。生徒たちは互いに刺激を受け、自分の課題研究について更に深く研究していこうと気持ちを新たに持った1日となった。



【アフリカン・スタディーズのポスター発表の様子】



【ヨーロピアン・スタディーズのポスター発表の様子】



【模擬国連のポスター発表の様子】

5. 成果・課題

今年度は研修参加者が積極的に発表の機会を設けた結果、多くの来場者と研究成果を共有することができた。

《3》 運営指導委員会（ハイパネル）の開催

今年度も2回、SGH 運営指導委員会（ハイパネルチーム）を Skype で実施した。

(1) 第1回 ハイパネルミーティング（Skype）

2018年6月25日（月） 16時30分～17時30分（MMRCシアター）

出席者 セルビー委員長 Sustainability Frontier 創設ディレクター

松田 文先生 アリゾナ州立大学教授

香川 文代先生 Sustainability Frontiers リサーチディレクター

学内：長谷部、川崎、小野口、碓合、有川、小林香、前野、今井、大原、濱野、横松

【議事要旨】

○事例集原稿および連絡協議会プレゼンのデータをもとに質疑

- ・SGH終了後のレガシーについて検討を始める。現在はハンドブックの出版に加え、グローバルキャリア講座、SGL48ポイントシステム、模擬国連、RS実行委員会などが候補。
- ・過去5年間のSGHの実践が目に見えるような形の何かが必要。玉川学園SGH事例集のようなものでもよいし、「書類」として残すことが大事。
- ・2018年1～2月に実施したアクティビティのフィードバックシートに関する分析の報告。特にIBの生徒と一般の生徒と一緒に混じって実施できたのはよかった。またコメントも大変興味深い。
- ・今年も12年生の特別授業では同様の形で実施予定。
- ・先生方のワークショップを実施してはどうか。アクティビティをやって理解を深めたり、過去5年間のSGHのよかったこと、悪かったことなどを率直に出してもらおう。
- ・今後のアクティビティには、SDGsのテーマが関連しているものも望ましい。
- ・SDGsには、経済発展を前提とした資本主義的な思想が色濃く反映されている部分もあり、国際的には批判もある。
- ・SGHの5テーマは、SDGsのテーマを包括的に含んでいるのでよいのではないかな。
- ・IBとSGHの関連をまとめたプレゼンデータは大変よくまとめられている。
- ・玉川学園のSGHは他校と比べても、とてもユニークな取り組みで、大変有能な先生方が多くいる学校であると感じている。ぜひ取り組みに自信をもってほしい。
- ・2019年1月にSFの評価を予定している。香川氏が来校予定。

(2) 第2回運営指導委員（ハイパネル）会議

2019年2月19日（火） 16時30分～17時30分（MMRCシアター）

（スカイプにてイギリスとアメリカをつないで実施）

運営指導委員：セルビー委員長（サステナビリティ・フロンティアーズ創設者）、松田さん（アリゾナ州立大学教育学部教授）、香川さん（サステナビリティ・フロンティアーズ主任研究員）、浜崎先生（立教大学異文化コミュニケーション学部部長）

参加者：渡瀬、小林香、前野、横山、有川、マキニス、横松、碓合

【議事要旨】

グローバルキャリア講座 参加生徒数 5年間合計 14,992名（模擬国連招聘講師分は含まず）

2018 1963名

2017 2914名

2016 4388名（3597+791 国際機関CF分科会分）

2015 4319名（3462+857 国際機関CF分科会分）

2014 1408名

○<2018年度12年生経年変化データ>に関する質疑

<ハイパネル委員の先生方の主なコメント>

- ・卒業生の追跡調査にはもう少し正確性を担保する必要があるように思える。Google アンケートで各選択肢の選択理由を書ける欄を設けたらどうか。
- ・重点生徒の成果を一般生徒へどう影響させていくか、先生と生徒のコミュニティ、互いのシナジーがみられることもあったが、先生と生徒の双方が包括的かつ具体的なグローバルリーダー像をさらに共有されていけばさらにより結果が生まれたのではないか。
- ・グローキヤリ講座のあとに各授業で10分でもよいからその内容について触れるなど、教科の枠組みを超えて授業で取り上げるなど「システムの」に協力関係を構築できれば、さらにより結果が生まれたのではないか。
- ・必修科目としてのSGHがなかったのは残念。特に重点生徒と一般生徒の間の橋渡しとして重要な役割を果たしていたのではなかったか。そうすればもっと生徒の洞察力が向上したのではないか。
- ・グローバルな課題をローカルな課題をどうつなげるか、教えるかということは最後まで課題として残ってしまったような気がするが、私学という性質上、様々な地域から生徒は通学しているため「ローカル」の定義は難しかった。アメリカではどう教えているか。



例えば、Food Drive（朝食の無料サービス）のボランティアへ参加すると、同じ学校の友達が朝食をもらっていたりする光景を目の当たりにし、そのからその問題から世界ではどうなっているか興味関心を広げたりしていた。

- ・高校でどのような課題が討議されているのかよくわかった。日本の大学でも同様の課題に面している。例えば、女子学生の方が男子学生よりグローバルな課題については積極的であったり行動的であったりする。世界的な現象か？

<高学年委員の先生方の主なコメント>

- ・グローキヤリ講座で来校した講師へ生徒から直接進路等の相談をする場面もみられるようになった。
- ・SGH,SSHともに学校改革のツールであるが、両「主任」とともに主任会や教科主任会のメンバーではなく、なかなかカリキュラム等に関してSGH,SSHとして教科の枠組みを超えて提言をする機会が持てず歯がゆい思いをした。他校ではSSHやSGH主任は役職付の先生が兼任されているケースがほとんどである。
- ・過去5年間で、国際機関が高校生を将来の人材とみるようになってきた視点の変化を感じることができた。5年前、国際機関は高校生を将来の人材とはみなしていなく、特定の大学のみへ積極的にリクルートミッションを送るなどアプローチしてきた。しか

し、ここ 2、3 年、外務省国際機関人事センターが高校生のための説明会を設けるなど変化を感じる。データで裏付けられている訳ではないが、もしかしたら玉川の一つの成果ではないか。

- ・「ボランティア活動」の単位化や必修化などを IB のように SGH の間に実現してみたかった。
- ・データの提示に関しては、上記 2 択のみだけでなく、4 択全部を入れて提示した方がよい。また否定的なデータも提示することも必要ではないか。
- ・現在まだデータを収集中であるが、5 年間を通して右肩上がりというような顕著なデータ収集できていない。報告書にはすべて掲載する予定。

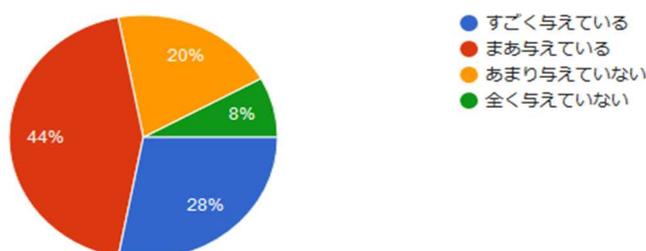
《4》 卒業生に対する追跡調査

2016 年度および 2017 年度に本校を卒業した生徒に対して、9～11 月に追跡調査を実施し、アンケートに回答してもらった。

○平成 29(2017)年度卒業生 SGH 追跡調査 A 2018 5A 重点生徒

1.玉川学園でのSGHの活動（課題研究含）はあなたの現在の大学の専攻分野の選択に何らかの影響を与えていますか

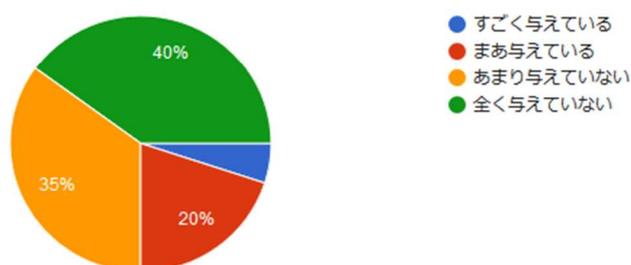
25 件の回答



平成 29(2017)年度卒業生 SGH 追跡調査 A 2018 6B 一般生徒

1.玉川学園でのSGHの活動（課題研究含）はあなたの現在の大学の専攻分野の選択に何らかの影響を与えていますか

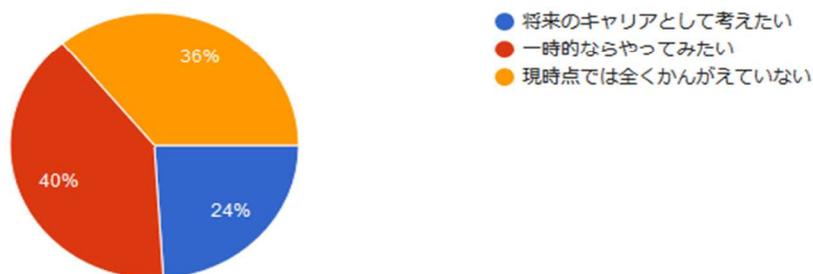
20 件の回答



○平成 29(2017)年度卒業生 SGH 追跡調査 A 2018 5A 重点生徒

5.あなたは現時点で将来国際機関や国際NGOへインターンや就職をしてみたいと考えていますか？

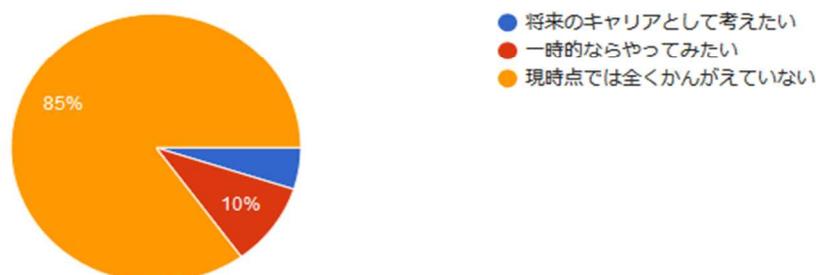
25 件の回答



○平成 29(2017)年度卒業生 SGH 追跡調査 A 2018 **6B 一般生徒**

5.あなたは現時点で将来国際機関や国際NGOへインターンや就職をしてみたいと考えていますか？

20 件の回答



「SGH が現在の大学進学に関して影響を受けた」と答えた割合は、重点生徒の 72%は受けたと答えたのに対し、「一般生徒」は 25%にとどまった。また本校 SGH 研究課題の「国際機関や国際NGO へのインターンや就職への希望」に関しては、重点生徒の 64%が興味を示したのに対し、「一般生徒」は 15%にとどまった。上記にはしめしていないが、平成 28 年度卒業生にも同調査を依頼したところ、重点生徒の 60%は卒業後 2 年経っても「現在の大学の専攻分野の選択に SGH が影響した」と回答しており、SGH の効果が残存していることがうかがえた。

<5>サステナビリティ・フロンティアーズによる外部第三者評価報告書

次にサステナビリティ・フロンティアーズによる外部第三者評価報告書を添付する。



Tamagawa Academy Super Global High School (TSGH) Program
- *Awakening the Whole Person to Become Global Leaders of International Organizations* -

Final External Evaluation

David Selby with Fumiyo Kagawa
Sustainability Frontiers

11 March 2019



Section 1: Rationale and Introduction

This study is the third and concluding external review of the five-year Tamagawa Academy Super Global High School (TSGH) program, *Awakening the Whole Person to Become Global Leaders of International Organizations*, launched in June 2014 and closing March 2019. Tamagawa Academy is one of 56 high schools selected and subsequently funded by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) for the nationwide Super Global High School (SGH) program. Selected SGH schools are called upon to demonstrate their efforts in developing ‘global human resources’ (i.e. graduates equipped with the capacity to identify and solve the problems of global society or those equipped to be proactive and show leadership in global business) through their own unique curriculum development.¹

Tamagawa Academy, founded in 1929, is a private education institution providing education for all grades (K-12, university and post-graduate levels) within a single campus located in Machida, Tokyo. It has a longstanding commitment to whole-person (‘*zenjin*’) education and international education.² Since 2007, it has offered International Baccalaureate (IB) programs for grades 7 through 12³ alongside its general academic course. The Academy has developed extensive international programs and partnerships with schools around the world. Every year it sends about 300 students to study abroad and hosts about 200 foreign students. It is the first Japanese school affiliated to Round Square, an international school federation consisting of 150 schools in 40 countries that organizes international conferences where student representatives engage in discussion of international and environmental issues and conduct volunteer work. An international perspective that lends itself to an international contribution is one of six IDEALS of learning⁴ promoted by Round Square.⁵

The Tamagawa Academy Super Global High School program aims at nurturing whole person

¹ <http://sgh.tamagawa.ed.jp/en/sgh>

² <http://www.tamagawa.jp/en/>

‘*Zenjin* education’ and ‘global/international education’ are two of twelve precepts of education at Tamagawa Academy. Other precepts include: ‘respect for individuality’, ‘self-study and autonomy’, ‘highly effective education’, ‘education that is scholarship’, ‘respect for nature’, ‘trust within the school community’, ‘*Rosaku* education’, ‘uniting opposites’, ‘One who walks the extra mile and one who is a pioneer’ and ‘24 hour education.’

³ The International Baccalaureate Middle Years Programme for grades 7-10 and the International Baccalaureate Diploma Programme for grades 11-12.

⁴ The six IDEALS of learning are: Internationalism, Democracy, Environment, Adventure, Leadership and Service. <https://www.roundsquare.org/about-us/>

⁵ <http://sgh.tamagawa.ed.jp/en/index>

leadership capacities among students (for example, communication, language and leadership skills; acceptance of different cultures; understanding of global issues; a strong motivation to take action that promotes global wellbeing) so that they are better disposed to choose their future career with international organizations such as the United Nations and international non-governmental organizations. While there are many SGH schools primarily concerned with human resource development for global business, Tamagawa Academy made the conscious decision to focus on preparation towards making a humanitarian contribution to the world. Such an emphasis is very much in line with Tamagawa's philosophy of whole person education and its spirit of volunteerism. TSGH is, thus, considered as an organic 'extension' of the Academy's long history of and commitment to international education.⁶

The TSGH program targets all students from grades 9 to 12 (904 students in 2018/19). It has two stages: the 'stage for nurturing basic skills' and the 'stage for exploring issues'. Formal and extra-curricular activities are offered simultaneously throughout the year. Courses and activities identified and offered during each year of the five-year TSGH program are summarized in *Section 3.1* below.

Students are encouraged to choose one from five research themes that many international development organizations address (i.e. poverty, human rights, the environment, diplomacy and international cooperation) so that they can develop capacities on their chosen theme through participating in the program.

Over the five years of TSGH, Tamagawa Academy has commissioned Sustainability Frontiers⁷ to research and write three external program reviews. The first evaluated TSGH in the academic year 2014 to 2015⁸. The second evaluated the TSGH program for 2015/6 and 2016/7⁹. This third evaluative review covers the years 2017/8 and 2018/9 as well as reviewing the five years taken as a whole. The purposes of this review are as follows:

- To explore key stakeholder perspectives on the TSGH experience
- To examine impacts of the program on students and teachers
- To examine TSGH influence on Tamagawa Academy taken as a whole
- To conduct an analysis of achievements and gaps in achievement
- To look at the TSGH legacy

⁶ Tamagawa Academy President/CEO interview, 2015

⁷ <http://www.sustainabilityfrontiers.org>

⁸ Kagawa, F. & Selby, D. (2015). *Tamagawa Academy Super High School (TSGH) Program: External Evaluation for the Academic Year 2014-15*: Tokyo: Tamagawa Academy

⁹ Kagawa, F. & Selby, D. (2017). *Tamagawa Academy Super High School (TSGH) Program: External Evaluation for the Academic Year 2016-17*: Tokyo: Tamagawa Academy

Section 2: Research Methodology

The research method employed for this review has been one of desk-based analysis of TSGH program documentation (including internal evaluation data) and desk-based at-a-distance empirical research using the Skype facility for focus group and one-on-one semi-structured interviews supported by a team of two translators.

As such, this review departs from the research methodology of the two earlier evaluation reports in two regards. First, questionnaire surveys of student beneficiaries and their parents were not employed in this review round. Second, in the case of the two earlier reviews, focus groups and individual interviews were conducted face-to-face. Thus, the earlier two reviews collected and used a significant amount of quantitative data while this review is heavily weighted towards the collection and analysis of qualitative data.

Interviews were conducted between 11 December 2018 and 31 January 2019 each lasting between 45 minutes and 60 minutes. A translation team was on hand for most of the interviews.

Individual interviews were held with the following members of senior management: the Director, Upper Secondary Division; the Director, Academic Affairs, the Chief, Curriculum Coordination. Additionally, an opening individual interview was conducted with the Chair of the Super Global High School Committee and TSGH leader followed by a second, ‘mop-up’ interview (i.e. to discuss issues that had surfaced but remained unaddressed) to close the schedule of interviews.

Focus group and individual interviews were held with teachers in charge of the following courses and initiatives falling under the TSGH program:

- Global Studies (three male teachers)
- World Studies (two male teachers)
- European Studies (four males teachers; one female teacher)
- African Studies (two males teachers; three female teachers)
- Model United Nations (one female teacher; one male teacher)
- Round Square (one female teacher).

In addition, a focus group interview was held with 10 teacher members of the SGH Committee. The interview was framed by a SWOT (Strengths, Weaknesses, Opportunities, Threats) type exercise in which participants brainstormed ideas on TSGH using a different quadrant of the large piece of paper provided to brainstorm their thoughts about SGH under each of the four headings, ‘Challenges/Obstacles’ and ‘Legacy’ being used as headings rather than ‘

Opportunities’ and ‘Threats’ . Following the exercise, participants were questioned about items listed in each quadrant.

A focus group interview was also conducted with six parents of students involved in TSGH programs. All were female.

Focus group interviews were conducted with students involved with TSGH programs, namely with:

- Four students (three female, one male) taking the Global Studies elective
- Three students (all female) taking the World Studies elective
- Five students (four male, one female) participating in the European Studies program
- Five students (one male, four female) participating in the African Studies program
- Five students (two males, three male) participating in the Model United Nations initiative
- Five students (one male, four female) participating in, and having leadership responsibilities for, the Round Square program

Finally, a focus group interview was held with four students (one male, three female) who had graduated from the TSGH program.

All interviews were recorded with prior permission. Interview notes were also written. Both recordings and notes were analyzed and, in the case of the notes and transcribed parts of the recordings, color-coded prior to the writing of this review.

Section 3: Formal Curricula and Non-formal Curricula Aspects of TSGH

3.1 Constituent Components of TSGH

The TSGH program has come to consist of eight components.¹⁰ Two are identified as falling under the ‘nurturing basic skills’ heading, i.e. the Global Career Seminar Series and the Tamagawa Super Global Leaders initiative. Six fall under the ‘exploring issues’ heading: the World Studies, Global Studies and Model United Nations electives, the African Studies and European Studies study tours, and the Tamagawa Round Square International Conference. While the two ‘nurturing basic skills’ components were launched at the inception of TSGH,

¹⁰ In the early days of the TSGH program the Tamagawa Adventure Program was included as a TSGH activity. A US invention, TAP is an experiential learning program aimed at building trusting relationships and nurturing creativity, problem solving and leadership often in out-of-doors settings. It also addressed bullying. It was dropped from TSGH.

the six ‘exploring issues’ initiatives all existed prior to TSGH but were all brought together under the TSGH umbrella.

3.2 The Global Career Seminar Series

The Global Career Seminar Series was one of the two wholly new initiatives introduced as part of TSGH initiative.

It aims at developing and deepening student understanding of contemporary global issues through expert guest speakers, to stimulate student interest in choosing a future career in international organizations and to galvanize them into proactive engagement with world issues.

Over the 5 years of TSGH, there have been continuous efforts to improve the program by careful choice of speaker and topic, by improving student participation methods and by more effective promotion. Very innovative ways of heightening student participation have been introduced. In the last three years a system has been in place under which students can make requests for a particular speaker or genre of speaker and/or can request a particular theme. It is now also open for students to prepare a presentation on the theme of the day, present it before the guest speaks, the guest responding to the particular issues raised by the students. If this approach is used the speaker is notified about the scope of the student presentation beforehand.

This seminar series involves two forms of participation: voluntary lunchtime participation (TED style) and compulsory participation, i.e. as part of a class or whole grade requirement.

The overall total number of student attendances at seminar sessions numbers 14,992. The year-by-year breakdown of attendance figures is given below.

| | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 2014/15 | 2015/16 | 2016/17 | 2017/18 | 2018/19 |
| 1,408 | 4,319 | 4,388 | 2,914 | 1963 |

A total of 89 lunchtime seminars were offered over the five-year period of TSGH, some speeches being available on YouTube. The year-by-year breakdown of sessions is as follows:

| | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 2014/15 | 2015/16 | 2016/17 | 2017/18 | 2018/19 |
| 17 | 25 | 20 | 17 | 10 |

The total number of speakers across the five years numbers 122, of which 76 are male, 45 female and 1 transgender:

| Academic Year | Total | Male | Female | Transgender |
|---------------|-------|------|--------|-------------|
| 2018/19 | 12 | 7 | 5 | - |
| 2017/18 | 18 | 13 | 4 | 1 |
| 2016/17 | 32 | 16 | 16 | - |
| 2015/16 | 38 | 24 | 14 | - |
| 2014/15 | 22 | 16 | 6 | - |

Guest speakers have included representatives of a range of Japanese agencies and organizations connected to the five key themes of TSGH including representatives from the Cabinet Office, the Ministry of Foreign Affairs, JICA, the Japanese Red Cross, Japanese NGOs, Japanese universities or international agencies and organizations such as IMF, WHO, ILO and UNICEF. Speakers have work experience in international development and humanitarian fields. A small number of university students (including Tamagawa graduates) have appeared as speakers in recent years.

Over the five years of TSGH the thematic balance of seminar topic is as follows: Environment: 11.2%; Poverty: 14.4%; Human Rights: 16%; Diplomacy and Leadership: 16%; International Cooperation: 42.2%.¹¹

In our 2017 evaluative report we recommended that mechanisms be put in place to link the seminar series to the curriculum.¹² Those mechanisms remain less than sturdy, save in the case of the Model United Nations program (see 3.4.3) where the lectures are directly connected to the MUN agenda.

3.3 Super Global Leaders

The Tamagawa Super Global Leaders (TSGL) 48-Point system started with the commencement of TSGH. It was conceived as a means of stimulating student interest in actively participating in various TSGH activities.

Grade 9 to grade 12 students participating in various activities laid out in the TSGL 48 point list can accumulate points over 4 years. At the end of each year, the small numbers of students that are ranked at the top of the scoring table receive recognition through a school graduation ceremony in the case of grade 12 students or an end-of-year ceremony in the case of grade

¹¹ Most speakers spoke to more than one theme, signaling such in their lecture description. If a speaker declared that they were speaking to more than one theme they are given one point for each theme in the counting method used.

¹² Kagawa, F. & Selby, D. (2017). *Tamagawa Academy Super High School (TSGH) Program: External Evaluation for the Academic Year 2016-17*: Tokyo: Tamagawa Academy

9-11 students. In the academic year 2018/19, eight grade 12 students and 8 grade 9-11 students were recognized for their achievement.

The originator of the scheme felt it a good idea to incentivize adherence to the TSGH program, remarking on Japanese love of collecting things. The scheme has, however, come in for criticism. First, it has been remarked that the number of points allotted to various kinds of involvement and achievement is rather rough and ready. For instance, while two points are awarded for taking the World Studies elective or the Global Studies elective both of which go over a year, four points are awarded for participating in one of the two time-limited study abroad programs that are available (see 3.5). Similarly, participating in the (intensive) Model United Nations elective earns three points while winning an award in an English recitation contest earns four points. Reference to facility in English also connects to the further point that the points weighting in the list awards English competence more than global learning. ‘Winning a competition in English’ earns five points as does high performance in English language examinations (such as TOEFL or IELTS) The subliminal message is that English competence is the *sine qua non* of global skills competence. There is also the suggestion from some students that the system benefits the privileged given that participation in a rather costly study abroad program earns four points. The argument is also put that the focus on points becomes an end in itself rather than the cultivation of a global humanitarian ethic. With the close of TSGH the scheme is being discontinued, those in charge of its successor program, the Tamagawa Super Science High School not wishing to continue the scheme.

3.4 Elective Programs/Courses

3.4.1 Global Studies

The grade 10-12 Global Studies elective gives students the opportunity to learn about international issues while pursuing a focus of their own choosing. From the plethora of issues falling under the themes of environment, human rights, poverty, diplomacy and international cooperation, students opt for a research topic of choice and working on their own or in teams conduct in-depth research before reporting their study by means of a display or exhibition, a presentation at school or at a conference and/or by writing an essay. One 65-minute lesson per week is devoted to the elective but it is open to students to seek additional guidance from the two teachers overseeing the program whenever needed. Teachers reckon that they devote an average of 30 minutes per week to out-of-class support of students but with intensive support periods close to student presentations when much more time is given over to the program. Students can take the course twice at different grade levels.

Students taking Global Studies tend to have a prior interest in international relations and issues or an interest in a specific burning issue that they find they can study through the program, an example being three female students who wanted to find a study home for their interest in

South Africa and the upcoming Tokyo Olympics. Students are also attracted by the opportunity to learn in a style of their choice with space for interdisciplinary learning. ‘You can choose what you want at the level of intensity you want,’ commented one student. Another pointed to the opportunity to consult with teachers from outside the program about their interdisciplinary topic. The known intensity of the program was, however, something of a deterrent to some students ‘It is very demanding,’ said one teacher, ‘and students have the opportunity of choosing from a wide range of electives.’ Students interviewed also pointed to the localism of much of the student body. ‘When people hear “global” they think of outside Japan and they don’t see the “global” in the “local”,’ explained one. Others pointed out that much of the international documentation to be consulted is in English and this is a disincentive to taking the program. *Box 1* lays out the number of students taking Global Studies over the four years of TSGH (2014/15 figures not available).

Box 1: Student Taking the Global Studies Course

| Academic year | Total | Male | Female |
|---------------|-------|------|--------|
| 2018/19 | 23 | 1 | 22 |
| 2017/18 | 26 | 1 | 25 |
| 2016/17 | 29 | 0 | 29 |
| 2015/16 | 16 | 0 | 16 |

Global Studies teachers explain that during the first half of the year there is a focus on using interactive learning to evoke student interest in a range of issues and to develop critical thinking and the ability to work with multiple perspectives but this gradually gives way to lessons given over to advising on individual student projects. There is, therefore, a shift through the year from a group dynamic to an individual orientation. Teachers report that both class and individual sessions are about helping students overcome any loss in direction by introducing a ‘methodological scaffolding’ in which they learn to dig deeper for information, learn how to frame and explore critical questions, and learn how to present. The freedom to study, thus, has to be tempered not ‘by a manual but by models and patterns for enquiry and research’.

Interesting topics pursued include the student who researched and wrote a ninth grade module on Fair Trade with a lesson plan for teachers, the module actually being taught by a ninth grade teacher. Another example is the student who, using social media, gathered photographs of deprivation in developed countries and, again using social media, asked whether the place depicted was a developed or developing country. Teachers cite the Sustainable Development Goals as the primary topic of choice with issues surrounding poverty and discrimination also regularly being picked up. Environmental topics figure each year but are chosen by just a few.

Benefits and lessons of the Global Studies course were seen by students as: ‘being able to do what we wanted if we seized the opportunities’ , ‘if we are motivated, support will come our way’ , acquiring a widened outlook, and ‘being able to communicate what we are doing outside the school’ .

3.4.2 World Studies

The grade 12 World Studies elective is offered in English and in Japanese in a parallel timetable. The aim of the course is threefold:

- Helping students understand the link between global issues and their own lives and experiences
- Helping students imagine the perspectives of those who live in different social and cultural contexts
- Empowering students to become active and responsible agents of change in creating a more equal and democratic society at all societal levels.

The course is taught over one school year with four periods of 50 minutes allotted per week.

The range of themes covered in class is wide-ranging including: mass media and stereotypes, issues surrounding poverty, prejudice and discrimination, LGTB issues, world population, terrorism, international cooperation, intercultural relations, human rights and responsibilities, the rights of the child, refugees, the nature of citizenship, the Sustainable Development Goals, peace, conflict and disarmament, climate change, and futures at all levels, local through global.

For students interviewed what marks out the classroom experience is the student-centered learning approach that combines with the treatment of global themes. The general experience of students is that their teachers commonly conduct lessons from the front with the students seated in rows and taking notes whereas in World Studies classes, the aim is to give voice to students and have them engage with each other in discussion and debate usually in response to some provocative stimulus. Lessons, students note, regularly begin with a lively role-play, a simulation exercise or whole group or small group interaction that is followed first by an emotional processing and then a surfacing of key issues.

In interview, the World Studies teachers are at pains to explain how students are acculturated to ‘horizontal’ learning. ‘Our job,’ one said, ‘is to teach how to discuss and to move students from responding passively to responding actively in a free atmosphere. We begin with a less controversial, a lighter, fun but involving topic, mass media, where the students won’t bump heads, and where students can practice how to discuss, dialog and argue without personalizing any critique of others. But then the subject matter gets more and more

controversial with the learning stimulus material designed to surface multiple opinions. The approach is to foster confidence in giving and exchanging opinions.’ As the program progresses there is an increasing focus on developing emotional intelligence, i.e. emotional, connective and empathetic responses to human (and other than human) predicaments studied. For a recording of thoughts and feelings, a diary is assigned to each student that the teacher may or may not see at the end of each semester depending on whether the student is comfortable with sharing what is a personal record. The teachers most powerful memories of the course concerned role plays and simulations that gave students a vivid experience of meeting people from a diametrically different culture or experience of being refugees or members of a marginalized and discriminated minority.

Students interviewed attest to the awareness raising, perspective changing and emotional impacts of the World Studies program. One spoke of her sense of shock as scales fell from her eyes as she thought about how intractable some global problems were. Another spoke of her narrow understanding of the world outside Japan before she joined the course and of how immersion in the course changed her perceptions. ‘My perceptions of places changed,’ she explained, ‘I had an image of the United States as great, standing for freedom and sparkly but I now see that in reality it has problems to. I now see the darker side, and I also see the darker side of Japan, too.’ All spoke of the level of respect they now had for those affected by the multiple crises facing them, and the respect they had for those who were trying to help. All also referred to the skills they had learned through the active learning approach: how to work towards consensus, how to take on board multiple perspectives; and how to articulate opinions and bring those opinions to the discussion table.

Significantly, some of the students interviewed attested to the influence of the course on their proposed career path; one wanting to go to university to study social issues before taking on a career trajectory aimed at addressing social problems; another declaring that as a result of the course she intends to study refugee issues at university before embarking on a career in the refugee field.

Box 2: Students taking the World Studies course

| Academic year | Total | Male | Female |
|---------------|-------|------|--------|
| 2018/19 | 27 | 0 | 27 |
| 2017/18 | 22 | 3 | 19 |
| 2016/17 | 23 | 1 | 22 |
| 2015/16 | 30 | 3 | 27 |
| 2014/15 | 34 | 3 | 30 |

3.4.3 Model United Nations and Section MUN

The Model United Nations and Section MUN is an elective class offered as both a general and International Baccalaureate (IB) course for grades 9-12, the students using mainly English as they develop global perspectives, obtain topic expertise, develop their communication and negotiation skills, and practice leadership. The course can be taken repeatedly if students wish

There are a number of unique characteristics in MUN. First, an interdisciplinary team of teachers is in charge of the course; second, it provides a rare opportunity for general course and IB course students from different grade levels to learn and work together. Third, it fully employs student-led and active learning methods and teachers play a role as facilitator.

The teaching staff view MUN as a means of focusing on global issues not touched upon in most other classes. Students choose the global topics to be covered during the year. Working in small groups they conduct research on the chosen topic(s) from the perspective of a foreign country assigned. Student groups then role-play as delegates to the UN and simulate a UN General Assembly.

A key objective is to practice negotiation skills, consensus building skills and problem solving skills, competencies, according to one male teacher, not taught in most Japanese schools.

In 2018-19 students chose the following three topics: the Afghan conflict, Iraq and disarmament, and building an interim government in Iraq. The Iraq war theme captured in two of the choices became the thematic choice for the Tamagawa inter-school MUN conference for the year as arranged by the students. In the February before the conference to be held a year later students on the course are asked to join an organizing committee. The next month and prior to the beginning of the new school year the committee determines the overarching topic for the following conference, for example peace or poverty. The choice of general topic then shapes the choice of the three in-depth topics to be considered in class during the year. Each topic is addressed through a similar process of two or three rounds of research and presentation, research teams exploring the topic through the lens of their chosen country. As the year unfolds the conference topic is sharpened and in the summer vacation the organizing committee starts preparing the inter-school conference event. Through the fall semester successive draft versions of the event proposal are honed and towards the end of the semester the class is used as a testing ground for the upcoming conference. Students each take on a role, most as country ambassadors but some as monitors and rapporteurs, in what will be role-played as a session of the UN General Assembly. Test runs are used to practice the event. Meanwhile, other schools are approached to participate or renew their participation.

Other schools involved do not have a MUN elective and credited course although a minority have an after-school MUN club. Some schools thus come to the event with less intensive preparation. It follows that there is a significant difference in depth of understanding of topic

and process between Tamagawa students and visiting students.

Tamagawa Academy has hosted an annual MUN conference from the start of TSGH. At the fifth MUN conference on the rebuilding of Iraq in 2019, 110 students from twelve schools plus Tamagawa attended, engaging in intra-country discussions and writing of resolutions, moderated and non-moderated caucus meetings, and speaking and negotiating mutually beneficial ways forward at general sessions. Back in class, Tamagawa students gave inputs on how they might have improved their performance while the committee discussed the quality of its conference organization.

MUN teachers see their role as that of adviser, administrator and facilitator. The aim is to hand over more and more responsibility to students as the year progresses. ‘Students grow in activity and agency,’ said one teacher. ‘Teachers become close to redundant. This completely transforms the teacher/student relationship. There is an equalization of role over time.’ A male student expressed appreciation of the move away from frontal to facilitative teaching. ‘Students play a large part in running the class through the organizing committee. It’s student-centered and you feel comfortable in sharing and enquiring about what you don’t know. The class is also distinctive in its regular use of the Internet.’

Students are assessed on the quality of their research, how well they understand their topic and on their performance in in-class MUN events. They hand in a folder of their country research file and UN speech text with position and policy papers for grading.

There has been a significant drop in numbers taking the elective in recent times so class size has been almost halved (50>50>26 in the last three school years). The teachers of the program are unclear as to why this is happening. Even a recruitment drive by the students themselves was less than successful. One explanation put forward by a teacher is that in the year just ending the class was made an exclusively grade 10/11 course whereas it had earlier spanned grades 9/10/11. Some students place a different interpretation on the fall away in student numbers, suggesting that some are deterred by the demanding nature of the program.

3.5 TSGH Study Abroad Programs

3.5.1 African Studies Study Abroad Program

African Studies is an extracurricular study abroad program for grades 9-12 aimed at learning about real life issues of poverty and human rights in a southern African country. In 2018 twenty students visited the Republic of South Africa for nine days in a program that included a visit to an illegal settlement where they witnessed dire poverty, a visit to the Pretoria branch of the Japan International Cooperation Agency followed by a visit to a JICA-funded disabled persons support center, a visit to the Sterkfontein caves world heritage site, an intercultural exchange

in Cape Town, a visit to Robben Island, the place of imprisonment of South Africa's first President, Nelson Mandela, a visit to a 'township' from apartheid days and a visit to the Cape of Good Hope itself.

Students participating in the 2018 program had various motives for wishing to participate. One female student had as long-standing personal interest in food security issues in the African continent. Another wanted to join simply because South Africa was an unusual destination for Japanese. A male student was aware of Japanese development support for South Africa and wanted to see how it was implemented. Another, with an abiding interest in soccer, wanted to use the vehicle of soccer playing to get to know South African black youth

Students applying to join the program submit a paper explaining why they want to join. This is followed by an interview. In some years there are too many applications and the interview is used to filter out some applicants. In other years a recruitment drive is necessary to fill the places.

By way of preparation for the visit, students research a chosen area of interest and the places they are programmed to visit. They prepare a poster on Japan to explain Japanese life and culture to their hosts. They present a PowerPoint to the group. A special session is held with parents attending on customs and lifestyles in South Africa. However, and somewhat strangely, no training sessions on intercultural etiquette and behaviors are held.

Once in the field, teachers do not have to coordinate and watch over the schedule since a tour guide is hired to do this. Their role is rather to encourage interaction between shy and often culture shocked students and host students, to lead evening reflection sessions for students, and to organize an evening report back to the school in the form of a website entry.

Students in interview conveyed many powerful memories. They were impressed by the friendliness with which they were met and people's willingness to relate, comparing Japan adversely. They were delighted to see dancing and singing in the streets. They recall occasional loss of a sense of security. Very importantly, they were shocked by the huge disparities between rich and poor. They recall the smoke above Cape Town as cars were burned by groups in conflict. Some were shocked to learn at the disabled persons support center that inmates could not visit family and friends because of wheelchair shortages. They were as deeply shocked to discover disability being seen as a source of shame and as a bar to education.

Asked about their most powerful memories and impressions, teachers first talked about the slowness of life and the different time expectations before recalling their shock at seeing students cry when they first talked to black people and their need for support. They were then astonished at the ways things evolved with Japanese and African students enjoying a closely-

knit and warm relationship, subsequently maintained through letter and email contact.

Participating students attest to shifts in perception as a result of the study abroad program. ‘ I had thought that supporting development was enough but now I see that I must be concerned about practical implementation, water and sewage,’ said one. ‘ I came away optimistic that HIV/Aids can be rolled back,’ said another. ‘ I had researched poverty at school,’ said a third, ‘ but I realized I had not put my prejudices aside. I was shocked by the huge disparities in wealth. You cannot say that South Africa is a poor country’ . The visit confirmed one female student in her decision to take a social work degree at university.

A female teacher recounted that the visit had changed her way of thinking about happiness. Happiness as ‘ having has changed to one of being. Happiness depends not on what you have but on what you are’ . The same teacher was inspired by her visit to Mandella’ s prison; how the great man had never given up hope in the direst of circumstances. The visit had also confirmed her positive faith in students as she saw them, after initial fears and reserve engage ever more deeply with their South African counterparts.

Back at school two students presented their impressions to the citizens of Machida and others at an open session at the city hall. All made individual posters and presented at the school festival. There was limited pick up on their experiences in classrooms.

Box 3: Students taking the African Studies Study Abroad Program

| Academic year | Total | Male | Female |
|---------------|-------|------|--------|
| 2018/19 | 20 | 6 | 14 |
| 2017/18 | 17 | 6 | 11 |
| 2016/17 | 17 | 2 | 15 |
| 2015/16 | 13 | 4 | 9 |
| 2014/15 | 13 | 2 | 11 |

3.5.2 European Studies Study Abroad Program

This grade 9 to 12 study tour program initially arose out of the relationship Tamagawa Academy had enjoyed with the Goethe-Gymnasium, Frankfurt, Germany since 1989. Each year about fifteen Tamagawa students stayed with the families of Goethe-Gymnasium students, attended classes and, with their hosts, made visits designed to give them a hands-on experience of German culture. Interest in the annual visit waned and, with prompting from MEXT, the program was re-oriented to one of visiting international organizations based in Europe.

The European Studies Program is described as ‘an overseas training program with the aim of nurturing the qualities of global leaders’ . It aims to help students learn about ‘the diverse culture and history of Europe’ and enable them to develop a ‘multifaceted vision of various problems in the world’ .¹³ In January 2019 students visited international organizations and historical facilities in the Netherlands, Switzerland and Poland. In the Netherlands they visited the International Criminal Court to learn about war crime prosecution processes, the Japanese Embassy to learn about the relationship between Japan and the Netherlands, the Amsterdam National Art Gallery, the Jewish History Museum and the house of Anne Frank. In Geneva, Switzerland they had four interactive lectures/workshops over two days at four different international organizations: the UN Commission for Human Rights Office, the United Nations High Commissioner for Refugees, the International Labor Organization and the International Red Cross. Through the interactive lectures they learned about global issues and of the qualities needed to work at an international organization. From Krakow, Poland they visited the Auschwitz-Birkenau Museum and the Schindler enamel factory (the factory of the German businessman who saved many Jews from massacre).¹⁴

The reasons students gave for wanting to participate in the program are various. One male student wanted to develop further his interest in an international support career; three others were interested in actualizing knowledge on, respectively, problems of the European Union, Nazism and migrants/refuges gained from individual project assignments done. A female student became intent on looking more earnestly at the prospect of attending a Swiss university before following a career in combatting poverty and child labor.

As with the African Studies program, students wishing to join the program have to complete an application form, present a paper explaining their motivation and go through a screening interview. In preparation for the field visit, participants are required to research the destination countries and the UN and international non-governmental organizations they are to visit. They are divided into groups and make group presentations on what they have found before they leave. There is no intercultural training as such but students do engage with former program participants who share their notebooks from their trip.

It is clear that the visit to Auschwitz-Birkenau was a most powerful memory for both students and teachers. All knew of its shocking history but were visibly shaken by the reality. ‘This really happened in our world’ . ‘I pondered upon why anybody could think that this was a right thing to do.’ The lecture received, linking Auschwitz to what was happening in parts of the world right now, proved very powerful. For one male student the strongest memory came from the visit to Oskar Schindler’s factory leaving him deeply admiring of the businessman’

¹³ <http://sgh.tamagawa.ed.jp/en/category/vgg>

¹⁴ Ibid

s heroism and humanitarianism.

Personal perceptions in some cases shifted dramatically. ‘My mindset was completely changed,’ said one female student. ‘Before I was shy and retiring but now I see how important it is to speak up and be dedicated. I now speak up in class. I want to help solve world problems.’ A number of students spoke of how very impressed they were by the dedication, motivation levels, open-mindedness and flexibility of Japanese working for the United Nations and for international non-governmental organizations (see 4.1 for further discussion of this).

Back at school, the study abroad group gave one unscripted, conversational ‘big presentation’ to the whole school and one to each grade. Participants also shared their personal projects with each other. Only very rarely, however, did impressions and learning from the trip become a focus in classroom. A teacher in an Ethics, Literature and History class asking a female study tour participant to explain Auschwitz and a Mathematics teacher setting aside the lesson agenda for ten minutes while a male student described and answered questions on the European Studies experience are occasional, but rare examples.

Box 4: Students taking the European Studies Study Abroad Program

| Academic year | Total | Male | Female |
|---------------|-------|------|--------|
| 2018/19 | 18 | 3 | 15 |
| 2017/18 | 18 | 1 | 17 |
| 2016/17 | 17 | 3 | 14 |
| 2015/16 | 11 | 2 | 9 |
| 2014/15 | 16 | 6 | 10 |

3.6 Tamagawa Round Square International Conference

Round Square is a global organization of 170 private schools in 40 countries that undertakes conferences and community service activities at the international level to foster youth action. In 2003 the Tamagawa Academy President visited Round Square’s international conference in South Africa and, following that, the decision was made to prepare Tamagawa Academy for Round Square membership. Attendance by three Tamagawa students at the 2004 international conference marked the start of the school’s student-led activities.¹⁵ Tamagawa thus became the first of what are now two Round Square schools in Japan. The benefits of connecting with a community of likeminded schools on an international scale include age-appropriate conference participation, cultural trips and exchanges, and participation in

¹⁵ <https://www.tamagawa.jp/en/k12/international/roundsquare.html>

international service projects in support of communities in need. A range of professional development opportunities is regularly offered.¹⁶

At the time five Round Square students were interviewed, the number of Round Square members at Tamagawa Academy involved in steering the initiative stood at 60 with some 15 ‘core’, i.e. conference organizing committee members.

Round Square activities begin with the start of the new school year in April when a mini-conference is held to introduce Round Square to new students and recruit them into the organization. Students go on to set up and hold a conference with student representatives, and five Tamagawa students are chosen to attend the annual Round Square international conference.

The 2018 three-day conference took up the theme of ‘The Environment’ with some 45 students engaged in attending lectures and workshops on topics such as ensuring clothing for refugees, setting up collection systems for refugee clothing, garbage problems in the Philippines, garbage problems in Japan, the use of plastic for shopping bags and taking action on environmental problems. On the middle day a Model United Nations conference was held on ‘Water Problems in Africa’ with students representing 14 African countries encountering water problems.¹⁷

As its service program, the Tamagawa Round Square group collects clothing for countries in poverty, collecting clothing from the school community, people in the local area, other schools (primary and secondary), kindergartens, and nurseries.

Round Square students very much appreciate the latitude they are given. ‘We do everything ourselves; we have ownership,’ said one male student. ‘We get to do everything from start to finish,’ said a female student. ‘We can decide on the content of activities. We chose environment last time and human rights the year before that.’ ‘What stands out for me,’ said another female student, ‘is that everybody’s opinion is sought. It is democratic and consultative.’ The teacher overseeing Round Square agrees: ‘It is special because of student ownership, because of students acquiring confidence in presenting, because it’s so egalitarian, a level playing field.’

The group of five Round Square interviewees was at one in thinking that Round Square had given them the confidence to present and the ability to see and speak from different perspectives. They had also come to see the importance of asking lots of questions for

¹⁶ <https://www.roundsquare.org/being-round-square/how/>

¹⁷ <https://www.roundsquare.org/school/tamagawa-academy/>

clarification and understanding. This spilt over they felt into a shedding of their shyness in class where they were now forward in asking lots of questions.

Asked how to improve Round Square at their school, students interviewed were of the opinion that Tamagawa could do more by way of service projects. ‘We have not so many projects as in other Round Square schools,’ said one. ‘We hear of many more service projects elsewhere.’ It was also felt that the process of selection of five students for the annual international conference went against the grain of the Round Square student-led philosophy. ‘It could be more open,’ one said. The Round Square teacher felt that recruitment would improve if Round Square awareness-raising forays were made into the Tamagawa elementary and middle school. The younger students ‘could be given something to look forward to’.

3.7 Curriculum Development and Connectivity Issues

In integrating a global dimension into the school curriculum, there are broad strategies to be followed. First, a school can opt to introduce a core program that is mandatory for all students. This secures widest student exposure to global issues and global thinking but by demanding its own timetable space creates significant reverberations across the curriculum, taking time away from other mandated subjects. It may well run up against national curriculum demands. Second, a school can seek to infuse a global perspective across the curriculum and into some - or all - existing subjects. This may well meet teacher resistance and will certainly involve a process through which teachers of various subjects need to accommodate to and receive training in infusing a global dimension into their teaching. Third, a school can choose to provide globally themed courses on an elective basis. This is the ‘low hanging apples’ approach, easiest to adopt and meeting least resistance. The first and second options bring global learning to the whole student body. The third limits the number of students exposed to global issues.

The TSGH approach has been to continue with elective courses already in place, i.e. Global Studies, World Studies and Model United Nations, meaning in reality that only a small number of students are exposed to global thinking.

Box 5: The Number of Year 12 Students (Academic Year 2018/2019) who took TSGH optional subjects in the last three years

| | |
|---|----|
| All three from the following: Model UN, Global Studies, World Studies | 3 |
| Two from the following: Model UN, Global Studies, World Studies | 10 |
| Model UN (once) | 19 |
| Model UN (twice) | 6 |
| Model UN (three times) | 0 |
| Global Studies (once) | 5 |

| | |
|------------------------------|----|
| Global Studies (twice) | 1 |
| Global Studies (three times) | 11 |
| World Studies (once) | 27 |

TSGH refrained from seeking a mandatory globally themed course given the significant pressures teachers are under, their busy timetables, lack of interest on the part of some and other institutional obstacles. For similar reasons the systematic building of a cross-curricular approach - in which a global dimension would be built into different subjects at different grade levels to overall cumulative effect - has been eschewed. Likewise, the systematic mapping of TSGH knowledge, skills and attitudinal learning outcomes across the curriculum and vertically through the grade levels has not happened, so an important organizational frame for cross-curricular provisioning is not in place. ‘We have been too busy and too thinly stretched with a focus on the day to day,’ the TSGH coordinator remarked.

Part of the problem in going down the mandatory course or whole school cross-curricular avenue, he further muses, lies with the very success of Tamagawa Academy. ‘There are perhaps too many initiatives, a problem arising from the school’s success.’ There was ‘no chance to get SGH mandatory curriculum space’.

It has been remarked earlier that the experiences of students returning from study abroad programs are but rarely taken up as a learning and sharing resource in class by subject teachers. Likewise, classroom consideration, reinforcement and elaboration of topics considered in the Global Seminar Lecture Series is ‘less than sturdy’. A female World Studies student remarks that ‘other teachers don’t seem aware of the world studies course and are not picking up global themes in their own classes, except in the case of readings in the English class’. A fellow female student is of the opinion that ‘it is left to students to make connections’ across the curriculum and ‘it is the enthusiast global students who cross-fertilize the curriculum’.

The interlinking of TSGH curricular and extra-curricular elements with the wider curriculum has happened but not in an overly considered and structured way. More in evidence are interconnections forged between different curricular and extra-curricular strands all falling under the TSGH umbrella and not least because student enthusiasts tend to pick up competencies and ways of seeing the world that easily translate between the strands. Students in interview speak of strengths developed though participation in one TSGH strand feeding into other, including curriculum, strands. Round Square student participants interviewed felt that their confidence level as bolstered through Round Square had fed into their performance in TSGH classes. ‘Round Square and SGH are therefore not mutually exclusive but not altogether connected,’ said one female student.

Opinions on the curricular approach adopted under TSGH vary. One male Global Studies

student felt that, outside the electives, TSGH had not really affected different parts of the curriculum, that it was ‘confined to corners of the school’. A female student taking the same program considered that ‘in particular parts of the curriculum there is a concentration of the global but unless you looked for opportunities you could easily avoid getting globally involved’. Another male Global Studies student declared himself not in favor of a mandatory course but felt that the Academy should take the course of ‘embedding the global across the curriculum more thoroughly’. A female student attending the same program judged that ‘at the moment the situation is that those who are interested can get involved but a lot of students can miss being faced by the global situation’. Some students harbored the feeling that TSGH should have done more to involve a larger proportion of students. ‘Opportunities are being taken up by a selected group,’ said one. ‘Enthusiasts pick up the opportunities while others are not interested even though global issues will affect everyone. The school should be more pushy about getting people involved.’

According to the chief of curriculum, the movement towards greater curriculum linkage is underway but that ‘it depends on the interest of particular teachers.’ ‘Some teachers are looking for new material, for new activities; they are thirsty for more.’ So cross-curricular movement is underway but not in a fully planned way. As we will see (4.4), the spread of interest in the global seems to be riding on the back of the spread of interactive learning across the school.

The chief curriculum coordinator also notes that other super global high schools have also taken the electives path not least because students want to follow mandatory courses that most enhance university entrance prospects.

For the director of academic affairs, curriculum linking needs to be more thorough and more systematized. ‘Programs are not linked very well. We need to find ways of connecting overseas programs and overseas students that are visiting and we are hosting to the curriculum. We give the chance to present but that is all.’

For the director of the senior secondary division a most promising development is the bringing together of meetings of TSGH personnel and TSSH personnel. It is a ‘means of firming up subject overlap, of creating a flow of ideas between the two, a deliberate attempt to be interdisciplinary’. Is it working? ‘Well, teachers think it is a good idea; they are working together linking issues and topics of their classes. Lead teachers for subjects are going to each other’s meetings to communicate about joint initiatives.’ The MUN elective has pointed the way in this regard with science teachers invited to contribute on climate change and a social science teacher invited to share his deep knowledge on Islam.

This promising development in curricular cooperation might, in different form, have come about earlier had one particular structural decision not been made. For a ten-year period, the TSGH

coordinator had been present at Head of Department planning meetings in his capacity as Head of Social Studies. In the run-up to his becoming TSGH coordinator his place at Head of Department meetings was taken away. It was at these meetings that important curricular directions, including forging interdisciplinary links, were determined. So at the outset of TSGH its ability to influence and shape curriculum development was impaired.

Section 4: Impacts on Learners

4.1 The Spread and Reach of TSGH

In 2018-2019 Tamagawa Academy has a student population of 904 (377 male and 527 female). Estimates as to what proportion of the student body has come into direct and close contact with the TSGH program pretty much coincide. The TSGH coordinator estimates that out of the 904 students 50 (c.5.5%) are ‘deeply engaged’ with TSGH, while an additional 40 to 50 (c.4.4%-5.5%) are ‘moderately engaged’ with the remainder (88.9%) are ‘not so engaged’. As many as 100 students (11.1%) and sometimes more attend the lunchtime Global Seminar Series. The group of Global Studies students interviewed estimate that there are 40 students ‘deeply involved’, i.e. participating in three or more activities under the TSGH umbrella. Others, they say are touched by the program, for instance by attending a lecture, but to say they are ‘involved’ would be something of an exaggeration. A member of the SGH Committee in focus group declared one of the key weaknesses to be that at TSGH events you saw the ‘same old faces, the same teachers, the same large group of students’. ‘There is a core, committed group of students,’ she added, ‘but the project is not affecting the whole school.’ This prompted another SGH Committee member to wonder whether ‘more could have been done with mandatory course idea’ but she then recalled that this had not been pursued because ‘we knew the curriculum was full’. Certainly, carefully planned pursuance of the cross-curricular approach, as discussed immediately above, would, if successful, have opened TSGH to influencing a much wider body of students.

According to the TSGH coordinator, 80% of his estimated 10% of fully engaged students are female. A perusal of the charts in section 3.4 confirms that participants in TSGH events have been overwhelmingly female. Asked why this was so, a female World Studies student interviewed suggested that the very preponderance of females was intimidating for boys, citing the case of a boy who retreated from the class because of the presence of so many girls. A sister student agreed that, for that very reason, the continued preponderance of girls was self-perpetuating. She also floated the idea that culture gives girls a natural bent towards unconditional sympathy and care. A World Studies teacher agreed: ‘In my opinion, it takes a really special boy to volunteer his feelings and opinions,’ citing a boy who ‘turned beetroot red’ under dialogic scrutiny from female peers. According to MUN student interviewees, girls

sit more happily with group work. For one of the MUN teachers, the preponderance of girls is a ‘mystery’ but ‘true of MUN generally’ . From several quarters came the view that, worldwide, girls are more naturally fitted to courses and programs with a strong humanitarian and environmental leaning and that the preponderance of girls in TSGH simply reflected Japanese culture. The question has to be asked, however, as to whether strategies might have been developed and put in place by this flagship project to recruit male students and so somewhat move towards greater gender balance.

4.2 Changing Perceptions; Changing Personal Visions

There is abundant interview evidence of the impact of TSGH electives and other initiatives on learner perceptions. One parent interviewed explained that out of her experience of MUN her daughter was now bent upon improving her English but also set upon becoming an international volunteer, having already become involved in volunteer work with a local non-governmental organization. Another parent talked about how through involvement with TSGH activities her son had achieved a ‘root understanding of issues; an all-rounded and professional approach’ . A third explained how her daughter had become inspired to join a volunteer program in Cambodia and, now back home, was organizing the collection of learning materials to send to Cambodia. All six parents interviewed nodded in assent when asked whether their child’s TSGH experience was influencing their choice of career.

Students taking one or more electives attested to the impact on their perceptions, attitudes, sense of themselves and the world, and consequent behaviors. ‘I now seek consensus in groups,’ said a female World Studies student. I try to see problems from multiple perspectives. I read newspapers and look at the news. I have a greater sense of social problems. I want to go to university to study social issues.’ ‘I see how embedded problems are and I now have a ground level of respect for those affected and those trying to help,’ said another. ‘I have learnt to shed prior perceptions of an issue and see things through other lenses,’ explained a female MUN student.

As we have noted, students on the TSGH study abroad programs to South Africa and Europe underwent some radical shifts in perception, scales falling from their eyes. African Studies students returned to Japan with a clear understanding that there are no clear answers to world problems but that there has to be action not just words. All on the study visit declared themselves shocked and surprised by the huge and visible disparities in wealth. The experience made up the mind of one female student to study social work at university. A girl on the European Studies tour indicated that the power of the Auschwitz experience had committed her to working on world problems.

Seeking to summarize the TSGH effect, a Round Square teacher felt it had ‘created a sense of internationalism among the students’ . She went further, adding that the growing ethos of

internationalism and active learning allied to the considerable potential for English learning was leading prospective students to want to join the Academy. ‘There are prospective students who are coming because of SGH. At entrance consultations they ask about SGH. On open schools days parents and students ask about the international dimension.’

4.3 Characteristics of the ‘Whole Person Global Leader’

In the TSGH proposal to MEXT of 2014 there is a depiction of the ideal ‘whole person global leader’ :

Someone who has a strong will and flexible ideas, courage, humility, exceptional communication skills, self-reflective ability, excellent English and mature Japanese language skills, a capacity to work with government officials with a firm attitude and care for the young generation.¹⁸

In describing ‘the shape of the project’ the TSGH website identifies its vision as the ‘nurturing of whole-person leaders, who will choose a career in an international organization’ . To realize that vision, broad student learning goals are set out:

We develop their communication, language and leadership skills, teach them to understand different cultures, to develop an interest in worldwide issues, to act with determination, and to have a strong will.¹⁹

As touched upon earlier, TSGH has not elaborated an overarching framework of grade-appropriate knowledge, skills and dispositional learning outcomes that would serve to realize those goals. As we suggested earlier, this has held back cross-curricular implementation under SGH and also made efforts at student evaluation blunter than they otherwise might have been. That said, there have been fascinating developments in understandings of the ‘whole person global leader’ idea going far beyond the initial conception among students immersed in the TSGH initiative.

Asked in focus group interview to describe the key features of the ‘whole person global leader’ , students from various elective courses and informal programs came up with the following identifiers:

- ‘Someone who can look at a given problem, work towards a solution and bring people along with them’ (World Studies female student)

¹⁸ Tamagawa Academy SGH Proposal to MEXT, 2014 (form 6, p.3)

¹⁹ Retrieved from: <http://sgh.tamagawa.ed.jp/en/overview>

- ‘Not just about a lot of leaders meeting but someone who is able to activate small groups and the grassroots’ (World Studies female student)
- ‘A person who understands, can converse on and can act on global issues’ (Global Studies elective female student)
- ‘Someone who can address global issues on their own; find the issues, address and help solve them’ (Global Studies elective female student’)
- ‘Someone always seeking new meanings, setting their aims according to a sound ethic, and getting on with realizing them’ (European Studies male student)
- ‘Someone who follows a service model of leadership, who drives and steers the conversation; who avoids hiding away like many past leaders have’ (Model UN female student)
- ‘Given the weight of information in the world today, a leader is someone who can identify helpful and relevant information’ (Model UN female student).
- ‘Global leaders are those that listen to each other, seek inclusivity, are open-minded and listen to opinions, seek to have people follow the best path together; their leadership is not vertical but horizontal (Round Square female student).

European Studies students in focus group were particularly articulate and persuasive in their depiction of the ‘Whole Person Global Leader’ basing their perceptions upon having seen staff of international organizations at work during their European study tour. ‘I have seen workers at international organizations, always searching for commonalities, learning through digesting field experience, continuously learning while most Japanese stop learning after school, multidisciplinary in inclination. All of these traits are those of the whole person global leader’ (European Studies female student). ‘I was impressed by the Japanese international workers (although their numbers are relatively low). They link several fields together; they relate problems to each other; they all work as spokes in a bicycle wheel. They are really brilliant. I was amazed at their wide, deep and fluid knowledge’ (European Studies male student).

The four female postgraduate students meeting in focus group engaged in wide-ranging discussion on what they had come to understand as whole person global leadership from their time at the school. Whole person global leaders, they felt, understand the importance of diversity, of respecting cultural differences and engaging with different perspectives and ideas. They are ‘not afraid to take risks’ . They are able to engage others, to ‘seek out common ground for changing the world’ . They seek to understand different cultures. ‘The global leader does not stand out but tries to cooperate with others to effect change. Anyone can be a global leader’ .

Teachers interviewed were less forthcoming in elaborating the horizontal model of leadership articulated by their students. In teacher focus groups the ‘Whole Person Global Leader’ is variously described as:

- ‘Someone who brings emotional and logical thought together to create a logical solution’ (World Studies male teacher)
- ‘One who recognizes the meaning of diversity’ (World Studies male teacher)
- ‘Someone who understands the multi-faceted nature of global issues and that there are multiple perspectives on them’ (Model UN female teacher)
- ‘A leader who is inclusive, open to different perspectives, and takes people towards leadership’ (Model UN female teacher)

One male World Studies Teacher was dubious about the concept of the ‘whole person global leader’. ‘Why not,’ he asks, ‘just use the term “well-rounded person” which he says carries the meaning of ‘whole person” while, for him, ‘global leader’ seems to be about ‘creating the super hero’. For yet another teacher (of the Global Studies elective) the term is superfluous in that the ‘ideas are reflected in the core spirit of the school anyway’. TSGH is ‘just a natural part of the school. When TSGH ends the ethos of the school will keep students ‘thinking, asking “how” and “why”, and constantly questioning’.

These reservations notwithstanding, it would seem an important TSGH legacy to formally capture the now elaborated conception of the ‘whole person global leader’, a conception that perceives leadership as horizontal, collaborative, inclusive and service-related. This might take the form of an addendum to and consequent enrichment of the Academy’s twelve precepts of education, perhaps especially those precepts relating to ‘Zenjin’ (harmonious) education, ‘Rosaku’ (experiential, creative and action-oriented) education and ‘Global Education’.²⁰

4.4 Active Learning

It is unequivocally the case that interactive and experiential learning have become a hallmark of TSGH. There is abundant evidence from students, teachers and senior management that the five years of the project have wrought a paradigm shift in learning that is rippling out to subjects across the curriculum. According to the project coordinator, Tamagawa Academy is being seen as a model school that enshrines what MEXT is currently trying to promote in terms of active learning. On open day events for parental visits and student recruitment, interactive learning in action is there in classroom for parents to observe. Tamagawa is also becoming a magnet for teachers from other schools who wish to observe interactive learning before implementing it in their own classrooms.

For one parent interviewed, the TSGH milieu of interactive and action-oriented learning had

²⁰ Retrieved from: <http://www.tamagawa.jp/en/about/mission/twelve.html>

fostered ‘an overarching sense of empowerment’ in her son and opened his eyes to different perspective on the world. Another parent talked her daughter’s TSGH-induced ‘expressive engagement’ with family debates and discussions sometimes ‘going on for hours’.

As we have seen (3.4), the three TSGH electives are conducted using various modalities of interactive, experiential participatory, student-centered (often student-led) and action-oriented learning that often spills out of the classroom and into the school and community. The World Studies program offers an impressive cocktail of media deconstruction activities, cooperative learning, mock elections, role-plays, intercultural simulations, future-oriented activities, negotiating activities, group ranking, clustering and categorizing activities, film response activities, and interactive sessions with visiting speakers. Through the impressive array styles, there is a pattern to each lesson of reconnecting as a group, experiencing an activity or engaging with some stimulus, a working through of emotional responses, followed by debriefing and reflection. Another evident pattern is a sharing and pooling of students know, an identification of what is not known (the learning challenge), and work towards filling the knowledge gaps identified. The feel of the course is one of shared and horizontal leadership. The World Studies program has been the primary theatre for piloting the learning activities that are to be compiled in the TSGH teacher handbook (see Section 5).

The Global Studies and MUN electives are based upon a similar learning paradigm. As we have noted (3.4.1), Global Studies students are engaged in a range of interactive learning activities to pique their interest, develop critical thinking skills, and face challenge from multiple perspectives before moving into individual research mode. As we have also noted (3.4.2), in the equally, if not more, student-centric MUN elective, teachers ‘do not so much lecture as explain, and get students being active’ as they move through a repeated process of planning, researching and presenting. The same pedagogical paradigm underpins the Round Square initiative where as one male student put it ‘we have to do everything ourselves so we have a sense of ownership of what we do’.

The Academy’s chief curriculum coordinator explains that ‘the success of interactive learning in some classes is being noticed and is spreading’ but that ‘there hasn’t been much spread of global themes, teachers not seeing the opportunity in their syllabus’. That said the piloting of the TSGH handbook is helping spread interactive learning on global themes to new curriculum areas. Handbook activity piloting is currently bringing active learning focusing on global issues to English, Japanese and Mathematics classrooms.

The director of academic affairs sees a sea change happening that is still in its incipient stages. Interest in interactive learning is now spreading beyond ‘self-selected enthusiasts’, and as it spreads, other teachers are also picking up TSGH themes in their classroom. ‘I am not saying this applies to all teachers but some teachers are becoming involved in the project and taking on the learning and teaching ethos which they are conveying through their subject.

Beyond the learning approach they are incidentally picking up themes. There is a conservatism among many teachers but TSGH has unsettled this somewhat.’ So, over time, global themes might ride to acceptance on the back of interactive learning.

For the chief curriculum coordinator, the process of empowering students in their learning has long term and potentially radical cross-curricular implications. ‘If students move away from passive receptivity to active two-way learning, it enables students to come to class with and express themselves through an interdisciplinary lens. They thus become more multi-disciplinary in what they ask of teachers and we create, de facto, a shift to interdisciplinary curriculum.’

Section 5: Legacy Matters

Questions concerning what would be the legacy of TSGH were put at each interview conducted, senior staff and teachers also being asked about plans in place to secure that legacy.

In this regard, it is worthy of note that consideration of legacy has only been turned to belatedly. While the 2017 evaluative report raised the importance of considering legacy in good time and made several suggestions,²¹ and while the issue was also raised at successive TSGH High Panel meetings, the first formal meeting to consider legacy only took place in mid-January 2019. Quizzed on the matter of legacy, there was some sense amongst SGH Committee members that legacy would take care of itself. ‘There is no need for a strategy,’ one member said. ‘Legacy will be more organic arising from those involved’. Hopefully, this is not wishful thinking. Committee members were confident that ‘90% of practice will remain’ but this betrays a somewhat stasis focus on preserving what is rather than adding, evolving and striking out in new directions. Will the Committee itself survive? The question provoked laughter, a ‘not sure’ and ‘the Boss will decide’. Recognizing what one Committee member calls ‘the big challenge of time’, it would, we suggest, not go amiss to proactively develop and present a coherent proposal for the Committee’s continuance and ongoing remit to the executive.

A number of staff and students interviewed foregrounded active learning as the key legacy of TSGH (see 4.4). There was some uncertainty as to the extent to which TSGH was primarily responsible for the take up of interactive and experiential learning across the school. It clearly

²¹ Kagawa, F. & Selby, D. (2017). *Tamagawa Academy Super High School (TSGH) Program: External Evaluation for the Academic Year 2016-17*: Tokyo: Tamagawa Academy

had been a key influencer but, in the background, MEXT was promoting ‘discussion style’ learning and in Academy the Super Science Global High School was also advocating active learning. To some interactive learning’s ‘time had come’ but this is not to in any way belittle the contribution of TSGH. It has brought a rich student-centered, critical, empowering, locally connected, paradigm shifting and activist quality to active learning as indicated in the sections above. This is well captured in the teacher handbook of learning activities that is a key tangible from the project (see below).

For the project coordinator, a key achievement of TSGH has been to connect Tamagawa Academy to the near and far outside world and in so doing it has helped students see that ‘diversity is beautiful’. There have been significant partnerships forged with the locality, local, national and international non-governmental organizations and far-away countries and places. Organizations, he believes, have changed their image of Tamagawa from one that more or less raised its drawbridge on the wider world to one that is welcoming of connection and partnership. ‘Organizations are now very happy to connect and engage with us. They have changed their mind about us. A diverse array of lecturers - LGTB people, soldiers, scholars, government people, graduate students with a story to tell - now come to the school.’ Finances allowing the Global Seminar Series will continue, perhaps on a reduced number of lectures each year.

The SWOT focus group exercise conducted with the SGH Committee (see Section 2) revealed some further legacy strands. These included: continuance of international exchanges and visits by foreign students, a rise in quality of student presentational skills including through the medium of English, the openness of the staff to sharing teaching and learning ideas, strong promotional (PR) contribution for potential students. Placed against these positives they listed as legacy detractors, *inter alia*, workload burden, difficulty in finding time to take initiatives, lack of whole school engagement with TSGH, no clear budget, and lack of senior management leadership.

For some interview respondents the key legacy of TSGH lies in the intangibles. A member of the Tamagawa Academy executive team spoke of the sea change he sensed in student thinking towards wanting to make a contribution to a better future in which they prioritize ‘not just their own lives but the state of the world’. For a Global Studies teacher the key contribution of TSGH was to reinforce the mission of the school to ‘keep students thinking and asking “how?” and “why?” as they question everything’. ‘It is a ‘natural part of the school’. For a member of the SGH Committee TSGH had internalized in people’s thinking ‘the image of a globally-minded school,’ something that would not easily be discarded.

Some very concrete legacies were proposed. A MUN teacher expected MUN to be accepted as an independent studies course. There was also a broad expectation that most of the electives would continue as would the study abroad opportunities (the school is considering

local community sponsorship of students). The Super Global Leaders points system was to be scrapped as the Super Science High School teachers were not interested in its continuation. A question mark also hung over the World Studies elective in that MEXT was proposing a new subject focusing on citizenship and contemporary society that would employ active learning. It would have a commencement date of 2021 alongside which world history and geography were to become mandatory subjects. These moves, said the TSGH coordinator, ‘might infringe on a global issues focus’ .

For a member of the senior executive, TSGH has led the way in equipping the school for the new university entrance process to be instituted in 2023 when the application process and criteria will become more holistic and include whole person profiles that do not just focus on grades but also on overall involvement in and contribution to school and community life as well as immersion experience in active learning.

For two interviewed members of the school executive and for several members of the SGH Committee, the most important legacy was the teacher handbook, titled *Meeting Global Challenges: Learning and Teaching the Sustainable Development Goals*. Currently being prepared for publication in partnership with Sustainability Frontiers and to be published by Tamagawa University Press, the book that will be made available to teachers across Japan. ‘It is wonderful that other schools will be able to use it,’ said one executive team member. ‘Key for us will be to think how to use it in each subject area. Publishing the handbook is not an end but a platform for the future.’

In summary, some key points and recommendations concerning consolidation of the TSGH legacy:

- Attention has turned too late to securing the legacy. A more systematic, studied, deliberative and proactive approach going over several months, even through the last two TSGH years, could have been more thoroughly instituted to great effect
- With the end of the TSGH period senior management and key stakeholders (including, importantly, students) could hold a formal review meeting for internal reflection on ways and means of best sustaining and building upon the TSGH legacy
- The elaborated conception of the ‘whole person global leader’ as described in 4.3 should be written into Tamagawa Academy’s mission statement
- A strong curricular legacy has not been built but this could be made good by employing and promoting the forthcoming handbook to achieve a global dimension across the curriculum
- It remains important in this regard to still map out, grade by grade and across the curriculum, the knowledge, skills and attitudinal learning outcomes that will help foster the ‘whole person global leader’

- If at all possible, the World Studies elective should be retained as it has become a particularly fertile and influential space for innovative interactive and experiential learning; its links and overlaps with Global Studies and MUN should be actively reinforced
- A purposive approach to remedying the current serious gender imbalance in participation in TSGH formal and informal activities should be developed and implemented and outcomes of any recruitment drive be evaluated annually
- An electronic clearing house mechanism should be put in place for the sharing of student-centered, interactive and participatory learning activities and approaches, with occasional staff development sessions being held to consider learning innovations of cross-curricular potential
- Means of retaining and further developing openness to the community through the Global Career Lecture Series and through in-community projects emanating from the elective courses and study abroad programs should be put in place
- The SGH Committee should continue with a new and clearly defined remit and authority to both retain and further develop and embed the TSGH legacy; as such it should be given responsibility for taking forward the legacy suggestions enumerated here

Section 6: Acknowledgments

The authors, David Selby and Fumiyo Kagawa, would first like to thank the TSGH Coordinator/Chief, Munetaka Soai, for his unflinching support in arranging and overseeing the schedule of interviews held in December 2018 and January 2019. We would also like to express our appreciation for his agreeing to three long interviews and for answering our seemingly never-ending questions. His calm enthusiasm, warm friendship, sensitive direction and encouragement have been a delight throughout.

We would also like to express special thanks to our two wonderful translators who guided David through the interviews: Satoko Tabata; Tommy Saunders

Many thanks, too, to the three members of the Tamagawa Academy Executive Team who gave time over for interview. Their contribution has been invaluable. They are: Akira Hasebe, Director Upper Secondary Division; Ikuya Kawasaki, Chief Curriculum Coordinator; Keiichi Watase, Director, Academic Affairs

Thanks also to the four postgraduate students who returned to school to give generously of their TSGH experience: Kentaro Oka, Chinatsu Satoh, Kisa Nagafuji and Kako Motosugi

We were delighted to interview a selection of parents of current students. We thank them for participating in interview. They are: Shiho Satoh, Chie Ohtani, Ruchika Vemuri, Otoa Ishihara, Yuko Komiyami, Junko Inomata.

Then we would like to thank those Tamagawa teachers we interviewed. They, too, made this study possible. They are: Hidetoshi Takei, Peter MacInnis and Munetaka Soai (World Studies); Ryotato Yoshida and Masaya Arimitsu (Global Studies); Yoshifumi Gotoh and Azusa Hamano (MUN); Yuko Maeno, Kanako Kobayashi, Ayami Yokoyama, Masafumi Shimizu, Yoshifumi Gotoh (African Studies); Takeshi Oh-hara, Ayami Yokoyama, Kyohei Abe, Ryo Shimazu, Yohei Inaishi (European Studies); Ayami Yokoyama (Round Square)

Special thanks, too, to the members of the SGH Committee who agreed to participate in a SWOT exercise and interview after their normal meeting. They are: Takeshi Oh-Hara (History), Ayami Yokoyama (Mathematics), Yoshifumi Gotoh (Japanese), Yuko Maeno (Mathematics), Kenji Yokomatsu (SGH Administrative Division), Makoto Yuasa (Japanese, Grade 5-8 Division), Naruko Takahashi (English, Middle Division), Munetaka Soai (Civics), Kanako Kobayashi (Japanese), Norifumi Maeda (English, IB Division)

Last but by no means least we would like to express our heartfelt appreciation to present students who gave of their valuable evening to spend time virtually talking with us. They are:

Momoko Ishihara, Ririka Yamauchi and Anna Tanaka (World Studies); Michiru Tsujimura, Marin Nagaoka, Kana Takeno and Vemuri Harshavardhan Vijay (Global Studies); Harsh Vemuri, Aoi Arai, Mayu Kitamoto, Sara Gotoh and Aiko Kitami (MUN); Michiru Tsujimura, Kana Takeno, Ai Kuboshima, Kano Nishimura, Aoi Aral (African Studies); Ryo Mizuki, Shota Kuroda, Kao Hanamura, Ryoma Utsunomiya, Reika Ogawa, Taisei Suzuki, Akihiro Kurihara (European Studies); Keita Nakayama, Chinatsu Satoh, Riho Ohtani, Kokone Ilmura, Sara Gotoh (Round Square).

平成 30 年度 主な **SGH** 生徒研究成果集

| | |
|--|-----|
| 1. SGH 全国高校生フォーラム発表研究 | 112 |
| 2. アフリカン・スタディーズ ポスター発表 | 113 |
| 3. ヨーロピアン・スタディーズ ポスター発表 | 120 |
| 4. ワールド・スタディーズポスター発表 | 120 |

Iran-Saudi Arabian relations and its effect on the Middle East
The oil price politics in the Middle East

SGH Number: 2619 Tamagawa Academy Upper Secondary Division, Tokyo

Key words: Crude oil price, Saudi Arabia, Iran, Middle East, Geopolitics

1. Introduction

Last year I conducted research on how to stabilize the unstable region of the Middle East. Though this research I theorized a new cold war-style conflict between the two largest powers, Saudi Arabia and Iran. The relation of these two nations in the middle east geopolitical stage is profound and seems to not have any ending in sight.

This year I based my research on the relations of Iran, Saudi Arabia, and the United States through the changing oil prices with the changing vision for Saudi Arabia's economy.

2. Methods and Results

The research was based on a review of the foreign policy of Iran, Saudi Arabia and the United States. All of these nations have a profound effect on the geopolitical stage of the middle east.

Recently oil prices have been falling starting in 2014. After the price of crude oil hit a historic high in June 2008 they had been falling steadily until late 2014. Though they were sighted to rise again, once the 2015 Iran deal was signed prices started to drop again.

The Saudi economy is heavily dependent on the nations large oil reserves. However, the new leader of Saudi Arabia has been trying to change this through his "Vision 2030", and needs large oil revenues to fund this plan. On the contrary, Iran already has many non-oil industries and has similar crude oil extraction costs as Saudi Arabia. To combat this Saudi Arabia has been using its relations with the United States to limit Iran's ability to export oil to other nations.

Another nation that is now not able to produce oil is Yemen. Saudi Arabia has been fighting one of the deadliest wars in recent history. This war could simply be seen as a campaign to limit Iran. However, it is also possible to theorize that Saudi Arabia is trying to use its military to create more revenue for its own oil industry.

3. Conclusion

Iran, having a large population, a diverse economy and similar crude oil extraction costs, is looking to increase its influence in the Arab world. Saudi Arabia is using its special relations with the United States to limit the ability of Iran to export oil to other nations. The proxy wars these nations are conducting in places such as Syria and Yemen have a great effect on the stability of the whole region.

With Saudi Arabia needs higher oil prices more than ever before. They are working extremely hard to limit other nations ability to export their oil. With this it could also be theorized that Saudi Arabia is using the war in Yemen, not only to limit Iran's influence in the region but also to limit the oil that can be exported from Yemen.

I think that if foreign powers stop meddling in the middle east affairs, it would be easier to stabilize the region. In addition, these nations in the middle east need to find new industries to end their addiction to oil and not compete to export the same product.

My research is still incomplete and in its infancy. I would like to look into the long history of the middle and find out more about the baseline reasons for the instability in the region.

References

Media

Iran and Saudi Arabia are fighting for supremacy of the Middle East - Vox.com
The Iraq War and the Arab Spring set the stage for today's proxy conflict - Vox.com
Islamist militants strike heart of Tehran, Iran blames Saudis - Reuters

Data

Crude Oil Prices - 70 Year Historical Chart - macrotrends.net
Saudi Arabia's Oil Price Sweet Spot - oilprice.com
Cost of producing a barrel of oil and gas - Wall Street Journal
And others.

Awards

2017第2回関東甲信越静地区SGH生徒課題研究発表会英語発表金賞

「今なお存在する人種問題」

アパルトヘイトとは？

日本語では、**人種隔離政策**と呼ばれる。黒人と白人に分けられる政策のこと。(人口の割合は、黒人8割、白人1割、その他1割。)20世紀から始まった。第二次世界大戦が終わってから、アパルトヘイト政策がより強まる。具体的な政策として、人口登録法、施設分離法、集団地域法などがあった。

具体的な政策

人口登録法

- 生まれたときから、**黒人(アフリカン)**
白人(ヨーロッパ人)
カラード(混血の子孫)
アジア系に分けられた。

施設分離法

公共施設が、黒人と白人で分けられる。それ以外に、**ビーチ**、**トイレ**、**公園**、**公園の中にあるベンチ**、**横断歩道橋**なども分けられた。

提案された政策

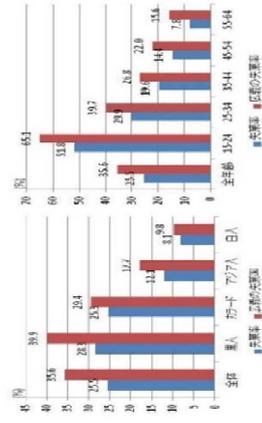
学校が足りていなかったり、金銭的に貧しい子供達がいる。

→教育が受けられない子供たちのために簡単に勉強できる場所をもっと作る。

(下のグラフ)みたいに若い人たちの失業率が多い。

→大人でも職に就けない人が多い(特に黒人)から、**教養**や**技術**を共有できる場所を作る。

図表 20 年7月の失業率 (左:人種別、右:年齢別)



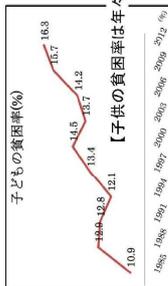
研修に参加しての感想

日本では、見れない光景が実際に自分の目で見れてよかったです。特に印象に残ったのは、不法居住区です。この場所では、冷蔵庫など当たり前のものが、そろっていない現状がありました。だから、今普通に生活できていることに感謝することが大切だと思います。また自分が実際に想像していたよりもかなり柔えていたのは、驚きました。しかし柔えている場所とそうでない場所の格差がかなりありました。そのような格差は、昔あったアパルトヘイト政策の影響がいまだに消えていないのかと思います。

テーマ「なぜ貧困は何世代にも渡り続いているのか？」

貧困とは？

食し、食事が満足に取れず教育も受けられず生活に困っていることに黒人が多い。



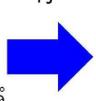
【子供の貧困率は年々増加している。(大人も)】
貧困にたくさんの人々が陥った原因は**アパルトヘイト政策**、**アパルトヘイト政策**とは人種を使った**経済政策(人種隔離政策)**で、白人達が綺麗な世の中を作ろうとして黒人達を奴隷にした。その時代の黒人達は白人と同じような質の良い生活、教育を受けられることができず、全てにおいて差別されていた。



黒人の失業率は47%

現在実施されている政策

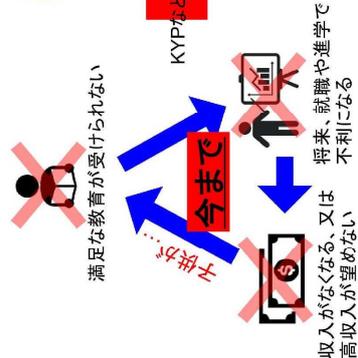
私たちが訪問したヨハネスブルグにあるケンブリッジではKYPという団体が貧困で苦しんでいる子供達に1日2回食事を提供しコンピューターの使い方などの勉強を教えている。またスポーツなども子供達にやらせている。



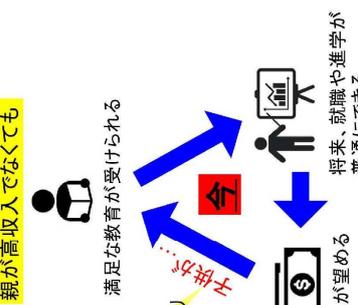
これにより...

- ・2回分の食事を貰った子供達が1回分などを家に持ち帰り家族とシェアするため食費代が少しくも浮く。
- ・コンピューターの使い方などを小さいうちから学ぶことにより将来企業に勤められることができる。
- ・スポーツなどをみんなですることにより、人との付き合い方を学ぶことができる。

貧困が続く理由



親が高収入でなくても



プロジェクトはすべての貧困地域で行われているのか？

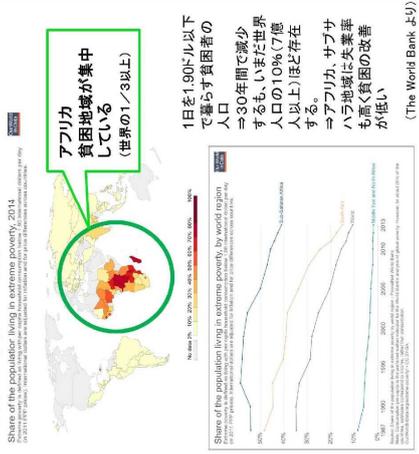
すべての貧困地域でプロジェクトを行うにはたくさんの方の助けが必要で、今はできていません。私たちが少しでも資金活動などをすることでより貧困で苦しんでいる人たちの少しながら助けになると思います。

研修に参加しての感想

私はこの研修に参加する前貧困など私にはほど遠いものと考えていました。ですが貧困地域に訪問した時私と同じくらいの子供達もたくさんいて、家を出てきた時、あまりの小さく可愛かったです。同じ人間なのに私はこんなにも違う生活をしていて、いかに恵まれているかを実感することができました。今回研修で学ばせていただいたことはこれから私の人生に大きく関わると感じています。

テーマ「日本のODA(政府開発援助)はアフリカでの貧困の解決につながるか？」

現在の貧困の現状



貧困の歴史的原因(例:南アフリカ)

- ・植民地支配、奴隷制
- ・アパルトヘイト政策(1948-1994)
- ⇒白人による特定の人種(黒人)に対する社会的な差別。政治や経済活動、生活の自由に至るまで制限された。

影響 経済的困難や教育を受ける機会が限られていたことが原因で、貧困から抜け出すことが世代を超えて極めて難しい。

貧困を継続させる“五大要因”

貧困についての「無知識」、貧困解決に対する「無関心」「病氣」による生産率の低下、権威などの「不正直」、援助されることへの「依存」⇒**貧困の悪化**

(参照: <http://cee.vcn.bc.ca/comp/index.htm>)

ODA(政府開発援助)とは

- ・日本では1954年から始まった「途上国の社会や経済を支える国際協力活動」の一環。実地機関としてJICAが存在する。予算は国民の税金で賄われる。
- ・返済を義務づける「政府貸付」と無償支援「贈与」、専門的な技術や技術を持つ人材の派遣、育成を行う「技術協力」がある。
- ・ODAの対象は国の特性によって異なる。日本の場合、アジアが多いのは地理的に近い
- ⇒貿易など関係が密接、戦後処理の影響など
- ・懸念される問題
- 国際社会での地位、自国への利益などODAの性質上政治性が高い、多くの支援が非効率、貧困者の役に立っていないなどの批判がある。
- ⇒貧困の多いアフリカより、貿易の関係が密接なアジア地域や戦略上重要な国の支援が偏っている。
- ⇒食料などの人道支援よりも、都市部の空港、ダムなどの経済インフラ強化の比重が大きく、地方の貧困の解決に役立たない。

南アフリカで学んだ取り組み

- ・途上国の人びと自らの手による発展を支える「自助努力支援」の重視
- ・日本の強みを生かした援助(例:算数セットを使った教育)
- ・その他への支援(例:障害者支援)
- ・ODA縮小問題
- ・懸念される問題との比較
- ⇒南アフリカ
- = 風物気味などにおいて非常に重要な国
- ⇒JICAは地方への支援も多々行っている一方で、都市部の上水システムなど経済インフラが多い。



日本のアフリカでの貢献度は、前述した問題点や積極性の縮小などで低いと考えられるが、独自の強みを生かした形での援助など、限られた形ではあるが貧困の解決につながる考えられる。

研修に参加しての感想

今回のアフリカ研修で、メディア上で知らなかったアフリカの歴史や貧困の現状などを実際に目で吸収することができた。JICA訪問では貧困解決への取り組みや問題点を理解できただけでなく、島なる文化で育ったスタッフ同士が普段と違う交流しているのを感じた。また、アパルトヘイト時代に政治犯が収監されたロベン島の収容所を、元収容者の方のガイドで見学することができたのは、南アフリカの歴史を学ぶ上で非常に貴重な経験となった。これらの経験をこれから学内の学習や、貧困についての知識として生かしていきたいと思う。

研究動機: アフリカ内で貧困が酷い原因として教育が挙げられない環境が原因ではないかと考えた。そこでどのような政策を行えばよいかを調べた。

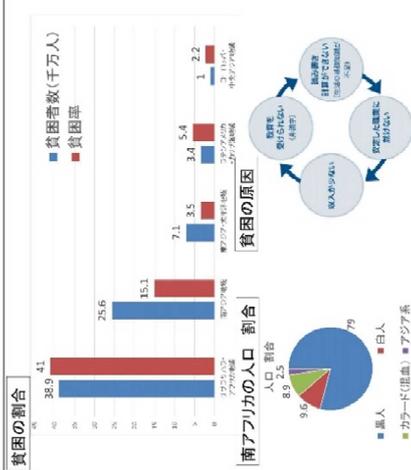
結論: 学校にかかる費用を無償化するをすれば、教育を受けられる環境は作れるのではないかと。

主な背景

- ・黒人及び有色人種の失業率が高い
- ・黒人は高等教育の機会も少ない
- ・貧困層への電力・水力のサービスの供給は改善されている
- ・病院へのアクセスは低い
- ・農作物への貧困が集中している
- ・女性の貧困率、失業率は男性よりも高い。
- ・孤児の割合は黒人系アフリカ人において特に高い。

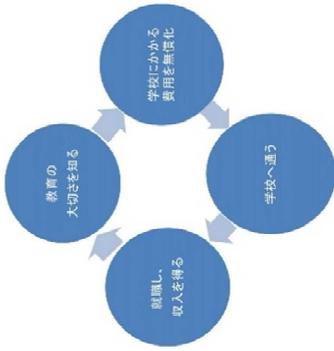
国家開発計画

- ・「2009〜2014年中期戦略的組み」貧困及び失業率の半減、人種や性別差別的撤廃など5つの目標を掲げている。
- ・「国家開発計画2030」2030年までの貧困撲滅と不平等の削減を目標。13分野について具体的な目標と行動計画を示している
- 1994年以来、社会保護は貧困削減のために重要となっている



提案する政策

- ・JICAのボランティアへ参加する
- ⇒算数プロジェクトを行う際、算数を教える教師が不足しているため
- ・KYPなどの団体への支援を行う。(寄付など)



参考文献

- ・<https://www.klipdownyouthprogram.org.za/>
- ・<http://globainewsview.org/archives/4668>
- ・<http://unesco.org/jp/terakoya/issue/>
- ・<http://kosekitzemi.net/seminar/saitou.pdf>
- ・<http://www.worldbank.org/ja/news/feature/2014/01/08/open-data-povet/>

実際に行われている政策



1. JICAでの取り組み
 - ・ABEインシアティブ
 - ・日本研究センターでの活動
 - ・産人材育成プロジェクト
 - ・算数教育プロジェクト

2. KYP (Klipdown youth program)

Klipdownにある教育施設。
(目的)

- ・子供たちに大学に通うための教育を行う
- ・貧困から救うための機会を提供する

3. 政府の政策

貧困が原因で学校に通えないという問題を踏まえ、教育費の無料化を提案している

2016年度の経済成長率は0.3%ほどである。

総論

初め、南アフリカに対するイメージは貧困がひどく、危険な場所というものが多かった。しかし、実際に現地へ行き、現地の方と話をするととてやまやさい方ばかりで、自分たちが体験すると笑顔で手を振ってくれました。

貧困層に住む方々を見て、裕福な暮らしをしている私達はとても幸せなのだ改めて思いました。一人でも多くの人が教育を受け、国が発展し、貧しい暮らしをしている方々が少なくなると、募金などの活動を行っていききたいと思います。

テーマ「現地訪問による現状と国際協力体制」

現状と問題点



・下水処理
・廃棄物処理

・地域によってはサイクリル処理施設が存在するが、サイクリル処理後の利用価値が高い重などを優先的に処理する。

生ごみ、ゼリー袋などが路上に放置されている

☆大気汚染・水質汚濁・悪臭などの原因

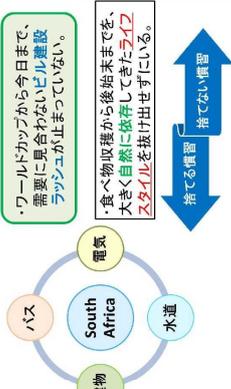


歴史的背景



FIFA World Cup 2010

・ワールドカップ開催に伴い、南アフリカでは、急速にインフラが整備された。

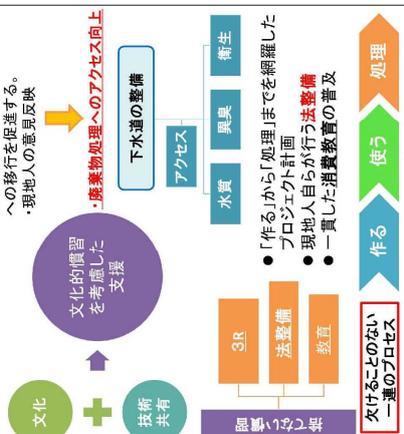


現在実施されている対策とその問題点



◎「使う前・使い方の支援・協力がほとんどを占めている。南アフリカの人々は、「みんな」で行おうという考えではなく、個人は個人で行おうというスタンス。

提案したい対策



研修に参加しての感想

South Africa / Japan
Multiple cultures / 1 culture
12 languages / 1 language

◆立ち並ぶビル群などから、アフリカ地域トップクラスの経済力を意識

◆JICA訪問やタウンシップなど、「生の声」からわかる南アフリカの現状

・近年、大気汚染・水質汚濁・廃棄物処理などこれまでに人類発展の裏側で犠牲となってきたものへの対応が問われている。今回の研修を通して、南アフリカ発展を目標とした国際協力には十分であるが、消費教育などの分野では、いまだ多くの支援と協力が必要であると感じた。

・失業問題など日本と共通するものもあり、国際協力体制を続ける必要性を強く感じた。

◎どの分野においても、当事者が興味・関心を持たねば意味がない。現状解決の機構づけと実践に関しては、どの分野においても教育の重要性は変わらない。

テーマ「本当の南アフリカを伝えるには」

現状と問題点

多くの人は南アフリカと聞くと「怖い・貧困・黒人」といった、イメージを持っている。(去年の自由研究での約800人からのアンケート結果)

問題点

- ・メディアやSNSがつけた南アフリカに対しての「偏見」を、多くの人が信じ、南アフリカに対し、「偏見」というフィルターがかかっている。
- ・「偏見」に対しての興味も薄れ、南アフリカの本当の良さを理解できずに、現状が続いてしまう。
- ・メディアやSNSの影響力は大きい。
- ・危険なところも存在するが、全てではない。「偏見」をなくし、南アフリカを理解することが必要である。

歴史的背景

アパルトヘイト

20世紀、南アフリカ連邦の国が成立したと同時に、人種差別的な法律が作られ、この体制をアパルトヘイトという。法律には、300にも超える、黒人やカラードは奴隷として扱った状況下の中、労働や差別を強いられた。

これがきっかけで、多くの人は南アフリカに対し、「偏見」を持つようになったのではないか

目的は、多くの南アフリカ人は反対運動を行い、国民が団結してアパルトヘイトを終わらせる目標に向かった。強硬派→身分証明書を燃やした。暴力的反対ではなく、和解を求めていたが、通じず。ソエト放棄→高校生による反対運動。国民は和解や融和を求めたが、政府に通じなかった。

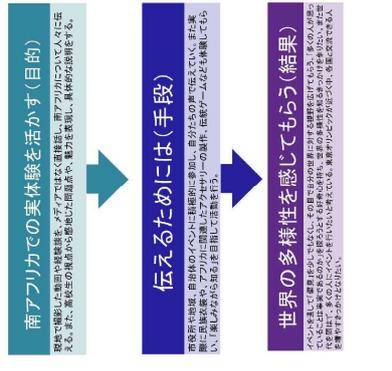
本当の南アフリカとは(日本との比較)

①能力性
タウンシップで黒人医師が行った誤診、貧しい生活をしている人々が多い。しかし、教育や医療の発展、衛生面の改善などを挙げて、タウンシップがもたらした多くの人の生活の向上から、最近では若い世代が自国を誇りにしている。

②ネット・スマホ
現実は、アパルトヘイトの歴史を語り継いでいる。多くの人がスマートフォンを持っており、SNSを通じて、自分たちの生活や文化を発信している。また、多くの人がスマートフォンを持っており、SNSを通じて、自分たちの生活や文化を発信している。

③南アフリカと日本の関係
南アフリカは、最近JICAの援助を受けて、基礎的施設を整備するなど進んでいる。しかし、日本企業も南アフリカに進出している。また、多くの日本人が南アフリカを訪れており、観光客が増えている。また、多くの日本人が南アフリカを訪れており、観光客が増えている。

私たち高校生ができる解決策

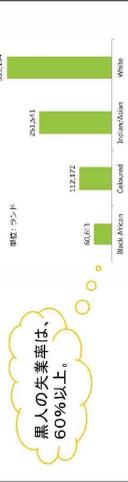


研修に参加しての感想

私は去年から自由研究で南アフリカについて研究を続けていました。私も多くの人も同じく、南アフリカに対して怖い、貧困といった勝手なイメージをしていますが、しかし研究を続けていき、この研修に参加したことで、南アフリカの人の温かさや、フレンドリーな人柄を感じ、自分が持っていたものは「偏見」だったと気づくことができました。南アフリカは、アパルトヘイトという恐ろしい歴史がありましたが、それだけに焦点を当ててではなく、他の面の魅力を発見し、良い面を知ることが必要だと学びました。私が体験した「偏見」の間違いを多くの人に伝え、「偏見」のない目で世界を見ることの大切さを多くの世代の人に伝えたいと強く感じました。また、自分自身も偏見を持たずに、多くの挑戦をし、世界を様々な面から見、多様性をさらに研究していきたいと思っています。

テーマ「食料問題の解決策」

食料問題の大きな原因は「**貧困**」
人口の増加によって食料の供給が追いつかない。
負しい人には、食料や安全な水が供給されず健康状態が悪化するという問題がある。
アパルトヘイトの影響で撤廃後も黒人の高い失業率や治安の悪化の原因。人口の約80%を占める黒人の平均所得は下のグラフをみてわかる通り、一番低い。よって、人口が一番黒人の失業率が多い為、食料を買うお金がないと考えられる。



食料を十分に摂取できない理由

作っている食べられない。
アフリカでは雨期が少ない為、降水確率も低い。そのため、天候の不順や自然災害が起こると十分に食べられないままでなく、安定した収入を得ることも難しい状態になってしまっている。
温暖化の影響
地球規模の気候変動によって、世界各国で異常気象が頻発している。また、土地が干ばつや砂漠化し、水不足が深刻化している。また、高温に対応できる種が少ないため生産が困難となり食料危機につながる。

テーマ「アフリカの貧困問題」

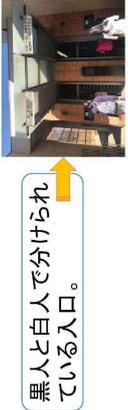
現状と問題点

現在、アフリカではヨハネスブルク・ケープタウンでも共に**失業率**がとても高く、中でも黒人の失業率は割合は**48%**である。多くは**水不足**や**電気供給不足**、更には**3食の食事の確保**も難しい状況である。



歴史的背景

これらの問題の背景として挙げられるのが、**アパルトヘイト(人種隔離政策)**である。この政策により、アフリカに住む黒人は政治的権利、経済的権利もなく、白人の居住者が増えたと土地を増やし**黒人を強制的に移住**させた。これは**経済的な問題**が一番の理由とされている。



黒人と白人で分けられている入口。

<対策①>

JICAが行っている協力は、飢餓の苦しみを解決する為、に土地にある**農作方法**や**品種改良**の技術の指導を行っている。下の写真は、南アフリカで現地の人々が日本人に**農作方法**の指導を受けている時の様子。
その他にも、**水**の行き届いていない地域に**安全な水**を供給したり、**水道**や**井戸**の整備も行っている。



<対策②>

SDGsでは農業生産性を高める為、**遺伝子組み換え**などの**バイオテクノロジー**の研究が進められている。アフリカの**ような発展途上国**は**農業**を主な**収入源**としているので**生産性と収入**を**倍増**させる**対策**が行われている。そして、**見た目の豊かさ**や**賞味期限**を理由に**無駄**に**販売**に**される**フードロスを**なくす**取り組みもされている。
人口も**自然災害**も**ますます増加**すると**予測**されている。2030年までに**飢餓**を**ゼロ**に**することが**できるか**が目標**とされている。

◎安定した食料供給

国民全員に食料が行きわたる為には、持続可能な生産が前提となる。
アフリカは世界でも**栄養不足**に苦しんでいる人の割合が**極めて高く**、**食料増産**の**必要性**がある地域である。**米**の消費量が急増している、**土地の土壌**や**水質**に**慣れる**為、**アフリカ**の**食料不足**を**なくす**ことができるかと考えられる。

◎栄養改善

慢性的な**低栄養**状態の人が多く、**最低限**必要な**栄養量**を満たすだけの**十分な食糧**を確保できていない。
JICAでは、**ユースグレナクッキー**を**子供達**に**提供**し、**栄養バランス**や**健康状態**を**良く**する**活動**が**ハングラディッシュ**で行われている。**ユースグレナ**には**59種類**の**栄養素**が入っていて、**免疫力**などを**上げる**ことができる。また、**ユースグレナ**には**消化**吸収を**妨げ**る**細胞壁**が**存在**しない為、**効率よく**栄養補給を行える。この**活動**を**参考**にして**南アフリカ**にも**ユースグレナクッキー**を**提供**することで、**栄養不足**を**減らし**ることができると思う。

現在実施されている対策とその問題点

ヨハネスブルクでは**タウンシップ**内に**KYP(Klipfontein Youth program)**という**施設**がある。そこでは**朝食**と**屋食の供給**や、**制服**や**学校へのコスト**の**サポート**など他にも**様々な支援**をして**貧困者**への**対策**(主に**子供**を中心として)を図っている。夕食は**食材**を**貧しい家族**に**提供**する**が問題点**として**一家全員分の量**があるわけではないという事である。

また、**ケープタウン**では**水不足**が**ヨハネスブルク**よりも**深刻**な為、**節水の呼びかけ**をしているが、**1日**に**使**用している**量は50リットル**と**なかなか**厳しい**のが問題**である。

提案したい対策

もともと**自然の水**の**供給**が少ない**乾燥**地帯でも、**効率的**に**水を**得る「**仮想水**」の**輸入**という**方法**がある。**生産・製造**する**のに多量の水**を**必要**とする**食料**や**製品**を**輸入**すれば、**間接的に水を**輸入するのと同じ**こと**になり、**それだけ国内での水の消費**が**少なくてすむ**という**原理**である。

この**対策**を**南アフリカ**にも**取り入れ**れば、**降水量**が**少ない**という**理由**での**水不足**は**少し**は**解決**されると考えた。

研修に参加しての感想

実際に**南アフリカ**を訪れて、**私のイメージ**と**違う**ところ**がいくつ**も**あり**驚きました。**孤児院**の**子供達**が**サッカー**をしている**時**や**食事**をしている**姿**は、**楽しそう**で**私たちと**変わ**らない**ように**感じ**ました。実際は、**学校**に行け**なかったり**、**家族全員**が**満足**する**だけの食事**が**なかったり**と**様々な問題**がありました。また、**バス**で**タウンシップ**を**離**れて、**少し**走ると**高層ビル**が**立ち並ぶ**発展している**地域**が**見えて**きました。同じ**国**で**こんな**にも**違**っていることに**驚**きました。
JICAや**タウンシップ**を**訪問**して、**食料問題**の**現状**が**身近**に**感じ**られる**ようになりました**。水不足を**解決**する**為**に、**水道**を**設置**する**など**、**食料**も**国民全員**に**渡る**よう**色々な対策**を**練**っていく**必要**がある**と思います**。また、**JICA**や**赤十字**の方**だけでなく**学生**の私たち**は**何を**すべきか**を**考える**ことも大切**だ**と思**います。

研修に参加しての感想

私の中で**アフリカ**=**貧困**、**治安**が悪い**というイメージ**が強**く**あったが、**実際**は**アフリカ**全体が**貧困**に**陥**っている**という事**では**な**かったし、**水不足**に関しても**全く**水が**ない**くらい**深刻**な**のか**な**と思**っていたり、**井戸**から**出**たりする**水**は**濁**っている**のだらう**と**思**ったが、**自分**が**思**っていた**以上**に**発展**している**事**や**貧困**では**ある**もの**の**現**地の**方々**は**大人**も**子供**も**希望**を持って**いる**よう**な**笑顔**で**生活**している**、驚**いた。また、**今**自分**が**送**れ**ている**生活**が**い**かに**裕福**であり**それが**当**たり**前**ではない**という**事**に**改めて**気**付**けた**ので**、**大変**重**大な**経験**にな**った。

テーマ「不法居住者の教育環境」

不法居住区、不法居住者とは？

政府が認めてない空き地に廃材やトタン板などで勝手に小屋を作り生活する人たちのことです。

南アフリカには数え切れない不法居住区があり、何万人という人たちが厳しい環境で生活しています。

不法居住者の教育環境

不法居住区内にも学校はありますが、学校の数と先生の数が足りません。そのため不法居住区から離れた学校へ通っている子どもたちもいます。

また、学校に通うためにお金もかかり通えない子どもたちもいます。そういった子どもたちには国や団体が支援を学校へ通えるようにしています。



研修に参加した感想

不法居住区に行く前、子どもたちは学校に行けていないと思っていました。ですが、最低限の学習的教育は行われていました。一方で、例えばゴミ処理などの常識的教育はまだ進んでいなかったです。常識的教育は、生きていくために大切なので今後教育が進んで欲しいです。

南アフリカの教育について

保育園、幼稚園があり、小学校が7学年、高校が5学年で、義務教育は小学校1年生から高校2年生までです。

現在は、アパルトヘイト時代の人種による教育の格差を無くし、教育改革が進められています。

私が考える解決策

- ・学校の数が足りない→増やすことが必要
- ・各不法居住区内に住む子どもたちの学校を補う
- ・先生の数が足りない→海外から先生を呼ぶ
- ・質の高い教育を受けられるようにする
- ・お金の関係で通えない子どもたちがいる→学費がある程度の金額にし、みんなが通えるようにする

←不法居住区の様子

テーマ「南アフリカから学ぶ人々が考えるべきこと」

アパルトヘイト(人種隔離政策)

アパルトヘイト時代の年表

- 1652年 ケープタウンがオランダ人によって作られる
- 1910年 南アフリカ連邦成立・アパルトヘイト始動
- 1945年 第二次世界大戦終結
- 1948年 総選挙実施 国民党が勝利
- 1950年 人口登録法・施設分離法・集団地域法・パス法
- 1960年 3月21日 シャープビル虐殺事件
- 1963年 ロバートソブクウェ解放・ロベン島に収容
- 1964年 ネルソンマンデラ逮捕 終身刑の判決
- 1976年 6月16日 ソウエト放寒
- 1980年代 安保理で南アフリカに対する経済制裁
- 1982年 政治囚釈放宣言
- 1984年 南アフリカがデフォルト宣言
- 1990年 ネルソンマンデラ釈放
- 1991年 ロベン島の囚人全員釈放
- 1994年 ネルソンマンデラ大統領就任・アパルトヘイト完全廃止

黒人、カラードに対する差別化を認めた法律

人口登録法: 生まれた瞬間にその人の人種が決められる法律
施設分離法: 公共施設を人種ごとに分ける法律
集団地域法: 人種別に居住区分けられる法律
パス法: 黒人の人々には移動の自由が与えられない法律
シャープビル虐殺事件: 反対運動の時に警察官がバニックになり銃を乱射し、69人の黒人が殺された。
ソウエト放寒: 黒人の高校生が学校の勉強に関して反対のデモをして殺されたり、逮捕されたりした。

342年間、白人の支配続いた

アパルトヘイトのことが世界中に知られて、様々な国からの批判や圧力を受けた結果、廃止された。

スラムの現状

ヨハネスブルグの不法居住地
孤児院でKYPの活動

- ・貧困により子供たちが犯罪を犯すことを防ぐ
- ・子供たちのご飯の提供
- ・チキンやフルーツなどたっぷり栄養管理されていた

ケープタウンの黒人居住区

- ・アメリカの企業の援助
- ・コミュニティセンターの設置
- ・様々な目的で使われている
- ・学校登校の援助
- ・インフラ、保険制度あり
- ただし、十分なものではない

(共通点)
あたりにもゴミが多く、水が流れるところにはベドロがたまっていた。
系の中には薄暗く電気も最低限しか使っていないようだった。

JAICAの活動

- ・人材育成能力強化とインフラ開発(産業など)
- ・社会弱者の社会参加
- ・障がい者支援
- ・南部アフリカ広域民間プロジェクト
- ・算数教育プロジェクト

私たちがができること

- ・人種が違っても私たちと同じ人間であることを認識すること
- ・2020年のオリンピックに向けて、様々な人種を通して盛り上げる
- ・世界に目を向け、募金などの寄付をしてみる
- ・偏見をもっていることを自覚すること

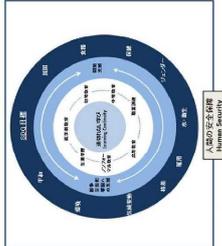
研修に参加しての感想

アパルトヘイト博物館に行ったこととても衝撃を受けました。さらにロベン島へ行き、犬小屋より半のぼうが狭いという現実に、ここ何年間も閉じ込められていた人々の気持ちを思うと、想像もつけないくらい辛いことがすぐぐに分かりました。ダウンスリップでは私たちが想像していた生活をしていない人ばかりです。それでも南アフリカでは様々な人や国の支那があるから、そ衣食住が最低限でも安定している生活を送ることができています。今、差別ということがやっやと世界中に認識されてきましたが、それでもまだ、様々な差別の痕跡は残っています。だからこそ、私たちは貧困、差別、人権に対して重く受け止め、向き合っていくかなければならないと思いました。そのためには世界各国でその認識が深くなくていいかと思いましたが、そのことによってアパルトヘイトが廃止されたい世界は変わっていくことができると思いました。

テーマ「 貧困家庭におかされる子供たちにとっての平等な教育とは？」

● 現状と問題点

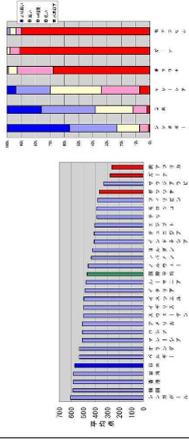
子供にとって勉強することは、最低限のことであり、勉強をすることができないと、大人になって社会に馴染むこともできないし、物事を考える力も身に付かなくなってしまう。その勉強する権利は決して私達だけでなく、世界中の子供全員が持つべき権利である。



JICAの教育プロジェクトは人間の安全保障の考えに基づいた活動を行っている。南アフリカの子供たちは計算方法や発音力を学ぶ機会がなく、高校生くらいの年代でも、計算が出来なかつたりする。学校に行かれないかつたりもするため、勉強方法が不確かな部分も少なくない。

● 歴史的背景

南アフリカの子供たちは概して理科が苦手であることが、下のグラフからも読み取れる。その大きな原因の一つは教師の指導力不足である。日本では、教員養成課程から現職教員研修まで継続的、かつ、段階的に教師の能力向上を支援する仕組みがあるが、アフリカの国の多くでは、教師の強化知識や授業実践能力の不足を補う研修が整備されていない。



● 現在実施されている対策とその問題点

JICAの教育プロジェクトでは、ABEインキュベーター、日本経研センターによる教育、産業人材育成プロジェクト、算数教育の四つを行っている。ここでは日本の専門家家が彼らが理解できるようなやり方を考え、丁寧に教育がされている。しかし、ターゲットは中間レベルの貧困層の子供のみ。では、この子供たちよりも貧しい生活を送っている子供たちは、教育を受けることは不可能であるのか、ということがこの活動の問題点である。



● 提案したい対策

JICA障害センターの障害当事者をメインとした役員で構成されているというように、教育プロジェクトを受けた中間貧困層の人が、最高層のレベルの貧困に侵される子供たちにもその計算方法や考え方を教えるという施策。方法を教えたとしても教えることは不可能であるかもしれない。このアイデアが、またさらに多くの子供たちの才能や可能性を見つければいいのではない。



● 研修に参加しての感想

今まで紙や画面越しで見たり、聞いたりしていたものを目の当たりにして、驚くことや裏しい現象が多くあることに改めて気づかされました。タワシニアで私たちが配ったお菓子は我が先が配ったお菓子が先にと取り合ったり、幼児院で配られた一日に二回の食事を大事に食べたり、それでも思い切り遊んだりしている子供たちの生きるパワーには莫大な強さを感しました。またそれと同時に、私たち普段の生活がどれだけ幸せで感謝すべきことかが身が身に染み込みました。普段の生活に感謝して生活するとともに、この経験を周りにシェアして、この現状がさらに多くの人々に伝わればと思います。とても良い経験ができました。

テーマ「南アフリカの教育と環境において日本にできることは何か」

● 現状と問題点



有名企業は大きな国内市場に目を向け、白人専用居住区に住宅を建て、白人専用居住区近辺に工場を建てた。白人専用居住区近辺には白人専用道路が整備され、バスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。また、白人専用道路にはバスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。また、白人専用道路にはバスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。

アフリカ圏における貧富の差は想像を絶する。アフリカ圏内では、白人専用道路が整備され、バスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。また、白人専用道路にはバスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。

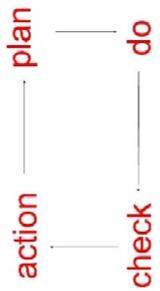
● 歴史的背景

南アフリカで起きていることについて、白人専用道路が整備され、バスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。また、白人専用道路にはバスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。



● 現在実施されている対策とその問題点

<算数教育プロジェクト> 南アフリカの青年失業率の55%が女性であることが、女性専用道路が整備され、バスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。また、女性専用道路にはバスやタクシーなどの公共交通機関が充実している。



● 提案したい対策

日本人は教育重視の国であり、社会人になってもから年々専門職の需要が高まっている。また、日本人は教育重視の国であり、社会人になってもから年々専門職の需要が高まっている。



● 研修に参加しての感想

今回アフリカに行ったことで、驚くことや裏しい現象が多くあることに改めて気づかされました。タワシニアで私たちが配ったお菓子は我が先が配ったお菓子が先にと取り合ったり、幼児院で配られた一日に二回の食事を大事に食べたり、それでも思い切り遊んだりしている子供たちの生きるパワーには莫大な強さを感しました。またそれと同時に、私たち普段の生活がどれだけ幸せで感謝すべきことかが身が身に染み込みました。普段の生活に感謝して生活するとともに、この経験を周りにシェアして、この現状がさらに多くの人々に伝わればと思います。とても良い経験ができました。



なぜユダヤ人の迫害は今も続いているのか

1. 研究動機

私は小学生の頃にアン・フランクの伝記を読み、ユダヤ人迫害について初めて知った。その頃はまた世界の人権問題や迫害について十分な知識がなかったが、最近アンネの日記を改めて読むと私たちの生活からは想像できないほどの苦難や生活状況を強いられ、その原因・ユダヤ人と聞くと「ヒトラー」や「迫害」の言葉が思い浮かばせる世の中に疑問を抱いた。そして、少しでも良くする方法を探るためこのテーマにした。

2. 当時のユダヤ人の環境

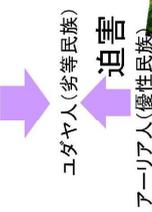
ユダヤ人の迫害は今も終わっていないが、ヒトラーが権力を握りアウシュビッツを建設した頃は今よりもあからさままで、ユダヤ人を人と思わない行動を繰り返した。ヒトラーは、反ユダヤ主義であったためアウシュビッツを建設させるとヨーロッパ各地のユダヤ人を拘束させ、アウシュビッツで労働を課した。また、労働できないと判断された人をガス室で殺すなどの事をし、ユダヤ教徒を苦しめた。右の写真のようにヨーロッパ各地からユダヤ人が集められた。アウシュビッツでは多くのユダヤ人が殺されたり働かせられたりしたがユダヤ人を殺すのはユダヤ人であり、処理をするのもユダヤ人であり、アウシュビッツで働いていたユダヤ人でないヨーロッパ人は一切手伝わなかった。ヒトラーがユダヤ人を捕まえてアウシュビッツに送るようになると左の写真のような隠れ家に引っ越し生活した。これはアンネフランクが住んでいた隠れ家である。



右の写真はアンネフランクの日記でありこれではユダヤ人迫害を象徴する唯一の物でありこれは隠れ家での生活やヒトラーの政策がかかっている。

3. ユダヤ人迫害の背景

反ユダヤ主義
ユダヤ人の特徴
・イエスを磔にし、キリスト教を冒瀆する存在
・器用で商売上手
ヒトラーはユダヤ人を「自国を持たず国を破壊する存在」とした



迫害

ユダヤ人(劣等民族)
アーリア人(優性民族)

4. 反ユダヤ主義のデモ
2018年4月17日ベルリンで、イスラエル人の男性がシリアからの難民である男性に襲われている映像が公開された。この男性はユダヤ教徒ではなかったがユダヤ人と間違われ襲子であるキツパを被っていたためユダヤ人と間違われ襲われた。その一週間後4月25日に、ベルリンの事件を受け反ユダヤ主義に抗議するデモが、ドイツ各地で行われた。ベルリンでは2000人以上がデモに参加した参加者は、「ドイツでは宗教の自由がある」や「ドイツで暮らすユダヤ人は常に恐怖を感じている」などのコメントをした。昔から続くユダヤ人迫害は今も終わることなく、反ユダヤ的な発言や話題は増えている。下のグラフは政治的な理由がもとで起きた事件PMK(Political Motivated Crime)の件数である。2016年と2017年のデータであり、一年間で右派・左派ともに少事件数が減っている。10000しかし宗教的な原因で40000件ほどの事件が起こっているのはとても大きな問題である。



5. 今後の課題

アウシュビッツなどで起きてしまったユダヤ人の迫害は消えることがないが、それを受け止めて今の社会をより良くする事が必要だと思った。また、今のヨーロッパには宗教の自由があるためユダヤ教を故意に迫害する理由はなく、今のユダヤ人はイエスを殺したわけでもない。この問題は急速な解決は難しいが、皆が宗教の違いを理解し、人それぞれ良さを知ることが大切である。

6. 参考文献

・ユダヤ人について - NHK
・ユダヤ人の迫害 - NHK
・ユダヤ人の迫害 - NHK

人権-女性の社会進出の現状

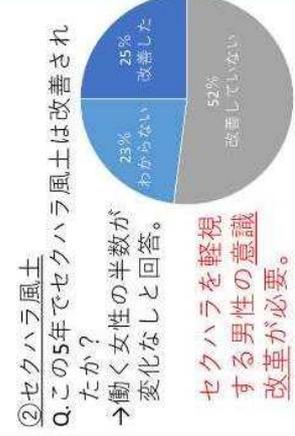
1. 研究動機

一年間のスクラップ学習を通して欧米諸国と比較することで日本社会での女性の社会進出の重要性と難度を目的に当たりました。また、同時に女性活躍の現状の改善が必要であることを感じた。

2. 事実

①ダイバーシティ
→女性活躍の推進は社会や企業に多様な性、多面的な考え方や、生産性をもたらす。

②セクハラ風土
Q.この5年でセクハラ風土は改善されたか?
→働く女性の半数が変化なしと回答。



③女性取締役登用率



5. 参考文献

日本経済新聞 4月16日-11月15日
総務省 労働力調査 2018年9月分

3. 結論

→改善の余地はあるが少しずつ女性の社会進出のための動きが始まっている



女性就業率初の70%台
M字カーブが緩やかに

背景には...

①待機児童の減少・学童保育の増加
→政府が掲げる目標として
2020年までに待機児童0
2024年までに定員30万人分増

②政府と企業による女性復職のための支援
→職業実践力育成プログラム短期化
→退職時と同じ待遇で再雇用する制度(一定期間内)

4. 今後の課題

①相互尊重の定着
→尊重の欠如は多様化リスクの原因になる
②企業内の管理職層の改革意識
→ダイバーシティの重要性や時代背景の違いを理解する

ナチスドイツにおけるユダヤ人差別の要因

玉川学園高等部2年 高安春菜 池田悦美

1. 研究動機

私たちはユダヤ人迫害について興味を持ち、ヨーロッパアンタリズムに参加した。そこで、様々な機材を見てユダヤ人が迫害されたわけはならなかったのかと疑問に思った為このテーマで研究を行った。

2. 基本知識 ユダヤ人差別の実態

ホロコースト→ ナチスドイツ政権におけるユダヤ人大虐殺のことを指す



大虐殺に至るまでの経緯

- (1) ユダヤ人にステッカーを貼り、目で分けるようにされた
- (2) ゲットーに収容された
- (A) 稼働労働可能者、自衛隊員以外
- (B) ヨーロッパ各地にあったユダヤ人が強制的に住まわされた住居地区
- (3) ゲットー内にある広場や運河で選別が行われた
- A線にいた者→ポーランドのプロシユ強制収容所に送られた
- B線にいた者→各地の収容所に送られた
- 残ったものはその場で殺された
- (4) プロシユ強制収容所でも多くの人が殺され、最終的にはアウシュビッツ強制収容所に送られ毒ガスや銃によって殺された
- アウシュビッツにおいては、ユダヤ人がユダヤ人を殺す処刑をさせられていた。

※ステッカー

3. 反ユダヤ主義

反ユダヤ主義とは、ユダヤ教徒およびユダヤ人への敵意、憎悪、迫害、偏見を意味する言葉である。従来の宗教を主因とする反ユダヤ主義と、新たな人種説に基づく反ユダヤ主義の二つがある。前者においては、キリスト教が信仰されているヨーロッパにおいて、ユダヤ人はキリストを殺した「悪」とみなされていた。その為、ユダヤ人は昔から差別されていた。

4. ポピュリズム

ポピュリズムとは、大多数の意見を聞き自分の意思を持たずに行動してしまうことを指す。この考え方は、ホロコーストなどの非人道的な問題でも、「大多数の人的な流れが来るのならば良いのではないかい」という世の中の流れが出来てしまった原因の一つと言える。

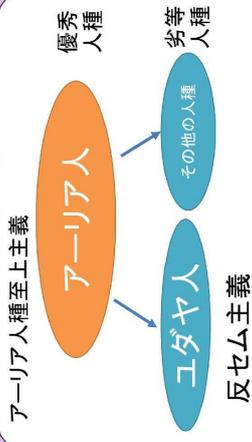
8. 結論

ももとの反ユダヤ主義の風潮が土台にあり、それをヒトラーが利用してポピュリズムによって民衆に受け入れられユダヤ人迫害に繋がってしまった。

参考文献 <https://careerpark.jp/33989>

<https://www.nhk.or.jp/kokusaihouhou/catch/archive/2018/05/0514.html>

5. アーリア人種至上主義



ナチスでは、ユダヤ人を経済活動から排除する「脱ユダヤ化」と共に、ユダヤ人資産のドイツ人への移譲とその活用を目指すアリア化が行われた。

6. ヘイトスピーチ

ヒトラーはユダヤ人を悪者にする内容のヘイトスピーチを積極的に行った。

◎ヒトラーがよく使用したスピーチ方法

- ① 強詞弱語
 - それ以外の選択肢もあるにも関わらず、与えられた選択肢の中で、物事を判断してしまいがちな心理状態のこと
 - ex) 二者択一法...「戦争か平和か」「ユダヤ人に支配されるか」
- ② 単純接軸
 - 演説中に同じフレーズを何度も繰り返して語ることで、サイアンス効果とも呼ばれる
- ③ 黄金時効果
 - 人間の思考や判断能力は、夕方になると疲労や周囲の暗さなどが相まって低下することを利用して自分の意見は正しいと大衆に思わせること



7. 現代に通じていること

この反ユダヤ主義は現在にも通じており、近年でもユダヤ教徒をあることを理由にした暴行事件が起きている。また、ナチスドイツ政権におけるユダヤ人迫害は難民問題など様々な社会問題との共通点を見出すことができる。このような事実を強く受け止め、負の歴史を無駄にしない努力をする事が重要である。

身近な人権と労働問題

玉川学園高等部 10年 武田侑梨 田中晴絵

動機

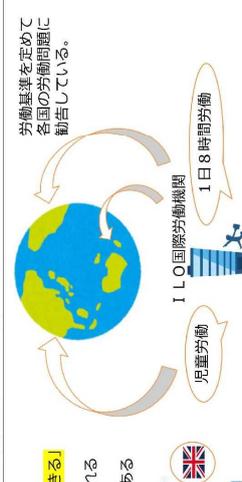
私たちは今回ヨーロッパアンタリズムに参加し、多くの国際機関を訪れた。そこでは貴重な話をたくさん聞くことができた。なかでも特に興味を持ったのがILO国際労働機関の方の話だった。いま世界では子ども・女性に対する労働問題、重労働問題など多くの労働に関する問題が起きている。これらは私たちが住む日本でも課題とされている問題だ。私たちは日本でもこのような問題が起きているのだから多くの人々に理解してもらい、これからどのようにしていけばいいのを考えてみるきっかけになればいいと思った。

日本とヨーロッパのタイムスケジュール

日本は残業が多く、実際には労働時間が週60時間(1日当たり12時間)だとされている。

フランスでは残業という概念がない労働時間は週35時間(1日あたり7時間)

※日本では0Lとして、朝フランスでは朝出勤準備をさせていた女性



フランスでは残業という概念がない労働時間は週35時間(1日あたり7時間)

1919年ベルサイユ条約によって国際連盟と共に誕生した。ILOの継続する目的は、社会正義を基礎としてのみ確立することができる。ILOは国際機関の中では唯一、各国の政府、労働者、使用者で構成される三者構成を取っている。これは、政策策定、計立案時には、経済を動かす社会的パートナーである労働代表も、政府と等しく発言する権利を持っている。

187の加盟国の政府と労働者が自由かつオープンに話し合う

子ども労働問題

日本に児童労働はないのでは？アフリカとかの問題じゃないの？

世界には2億1800万人の子供が就労している。このうち10人の子供はアフリカ地域とアジア太平洋地域にいる。

2017年 15歳少女がアフリカバリエール中に13メートルの深窓から転落死する事故が発生

労働基準法の年少労働基準規則第8条 満16歳に満たない者を高さ5メートル以上の場所で働かせてはならない

重労働問題

日本では、労働者人権をあまり問題視していない。労働者の利益が最も重要視されるような社会システム

公認のストライキ 労働者人権の見直し 長時間労働の削減

私たちにできること・政府や会社がするべき対策

外国人だから悪そう。女性だから弱そう。誰かと同じように接する

政府や会社がするべき対策

個人労働時間、有給休暇取得の見直し

参考文献

- [1] 南フランスで働く！とある日の私のタイムスケジュール <https://wakuwork.jp/archives/11194>
- [2] 国際労働機関 (ILO) http://www.unic.or.jp/info/un/unsystem/specialized_agencies/ilo/
- [3] 「難民は有用な人材」日本企業に雇用の動き <http://www.afnbb.com/articles/3169672>
- [4] 金谷理：女性労働者をめぐる現状 <http://www.zenoren.gr.jp/jiyosei/2007/070720-05.html>
- [5] 国連からの最近報告 日本の長時間労働と健康状態の29万人の存在 https://www.picim-blog.com/entry/slavery_of_japan_2016-08-10
- [6] 児童労働報告書 (EJ) https://www.ilo.org/wcmsp5/groups/public/---asia/---ro-bangkok/---ilo-tokyo/documents/publication/wcms_615276.pdf

ドイツから考える現代の移民難民問題

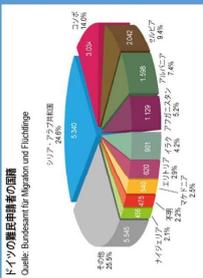
玉川学園高等部 2年 黒田晶太

1. 研究動機

現在のEUの問題に移民難民の問題がある。そこでEUの中で移民難民を一番受け入れているドイツから世界の移民難民問題について興味を持った。

2. 基本知識

アラブの春によって中東やアフリカに多くの難民が生まれ、ヨーロッパやアメリカなどの国に難民申請を行っている。
ドイツはシリアやアラブ共和国など中東からの難民が多い。



3. ドイツと難民

ドイツが難民を受け入れる理由
① 第2次世界大戦でナチスドイツがユダヤ人や大連に迫害したのを反省したため
② 治安の悪化
③ 2010年ベルリンのクリスマスマスケットでのテロ
④ 難民申請者による犯罪の増加
⑤ 少子高齢化によって人口が減り、移民難民が増えることにより国民が働きにくくなる
⑥ 一国民の不安が高まる



5. 結論

移民難民が快適に暮らせるために自国の難民認定基準の緩和を目指すべきである。
移民難民と国民の平和的な共存の理解を深めるべきである。

参考文献

「日本のテロ危険度は本当に低いのか」『IRONIA』<https://ironia.jp/article/6681?m=2>
「日本の難民認定はなぜ少ないか? -制度面の課題から」『難民を知る - 認定NPO法人 難民支援協会』
<https://www.relief.or.jp/jar/report/2017/06/09-0001.shtml>
「地球上の世界の東方ドイツとEU」小学館

日本は受け入れた難民に対してどのような対応をするべきか ～ヨーロッパとの比較から考える～

玉川学園中等部 3年 北村春花

1. 研究

私は今回の研修でUNHCRを訪れて世界での難民問題の現状、また日本が難民をあまり受け入れず対応も不十分であることを知った。そこで今回、難民が自由に生活するために、これから日本はどのように改善していけばいいのかわいて研究を行った。

3. 日本・世界の対応

2016年：トルコ：350万人 ドイツ：26万3622人
⇒日本：28人と桁違いに少ない
日本に申請される難民のうち0.2%のみ人口1000人あたりの難民申請者数
スウェーデン：8.4人(スイスとほぼ同じ) ドイツ：2.5人
↓スウェーデン・スイスの人気度が高い

5. 難民への日本の文化の教育

世界中に移住してきた難民たちには、その国についての知識がほとんどない
⇒周りとコミュニケーションも取れない状況
日本：政府が難民と認められた人に対し、半年間初歩的な日本語、日本の社会などの仕組みなど教育している
スウェーデン：難民と認められると、SFI(無料のスウェーデン語教室)に通えるようになる
SFIとは
・修了試験に合格する・先生に認定されることで卒業
・様々なレベルによるコースがあり、自分に合ったレベル・ペースで学べ、どのレベルを目指すか自分で決められる
・ゆっくりとスウェーデンの社会についても学べる

スイス：カルチャースクールで、難民申請者に入国してから就職に至るまでの文化的な基本知識を教育する
日本では学べる期間に限られており、学びづらい環境

ヨーロッパでは難民に対しての教育の環境が整っている
日本も、レベル習得による卒業とするべきでは

6. 結論・今後の課題

日本に逃げてきた難民が、これから必要最低限の生活をににあたって
1. 一人一人の習得ペースに合わせて、日本の文化の教育を行っていく
2. 就労についての制限を緩和し、状況に合わせて柔軟に改良を行っていくことが重要

日本より難民への配慮が行き届いているヨーロッパ諸国でも問題は多発している
⇒難民への対応を進めながらも一人一人に細かく気を配り、柔軟に対応していくことが必要

2. 基本知識 難民

難民：人種や宗教、国籍、政治的な意見などを理由に、迫害を受ける恐れがあると見て国外に逃れた人。
迫害を受ける恐れ地からの避難者も含まれる。
難民発生国：シリア、アフガニスタン、南スーダン、ミャンマー、ソマリア、コンゴ民主共和国 等
2017年に紛争や暴力、迫害によって移動を強いられた人は6860万人に上る。そのうち国内避難者が4000万人、難民が2860万人、庇護申請者が310万人となっている。

4. 難民の就労への障害

日本：日本では、就労するために多くの障壁がある
難民申請を行ってから6カ月で就労許可が出る
(6カ月経たないうちに申請が通った場合、その時点で就労許可が出る)
また仕事へのサポートがほとんどない

スウェーデン：語学と職業訓練、実習を組み込んだ2年間の支援プログラムを実施。受講すること引き換えに社会福祉手当が受けられる。
⇒専門知識の必要ない仕事が多い
就労率：1997～99年に移民として来たらうち就労した人
⇒2年後：30%・10年後：65%
難民のためのプログラムで就労した人
⇒受診1年後：男性28%・女性19%

スイス：3～4年の間、週に3.4日職場で仕事を学び、1日だけ学校に通うという就業と教育を並行して行う実業教育制度
就労率：25歳未満の就業率
⇒96.7～92.5%(2015年)

日本では難民への仕事のサポートが極端に少ない

まず就労の許可の基準を寛容にしなが、難民の基礎能力を考慮して
少しずつ規律の改良を重ねる必要がある

参考文献

1. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/>
2. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
3. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
4. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
5. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
6. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
7. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
8. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
9. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
10. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
11. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
12. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
13. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
14. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
15. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
16. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
17. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
18. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
19. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>
20. 認定NPO法人 難民支援協会 <http://www.relief.or.jp/press/20170427/>

1940年代のユダヤ人迫害と現代におけるユダヤ人差別の違いについて

10年 金剛組 林杏音

研究動機

私は、ユダヤ人迫害について興味がありヨーロッパアンスタデューズに参加した。ヨーロッパアンスタデューズでは実際に迫害が行われていた場所や博物館に行き、1940年代のユダヤ人迫害の歴史を学ぶと共に現在もそれが全く無くなったわけではないということも学んだ。そこで、現在どのような迫害を受けているのかや、何故起きているのか気がなった。1940年代と現在に起きているユダヤ人迫害の内容を比較した。

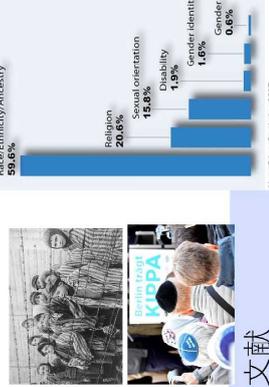
現在のユダヤ人迫害問題

○時代背景
・第二次世界大戦後からドイツは反省に立ち、外国人の排斥や民主主義を主張するネオナチなど反ユダヤ主義を徹しく取り締まってきた。しかし最近ユダヤ人をターゲットとする事件が増えつつある。

○原因
・はっきりした原因は定かではないがいくつかは考えられているものがある。
①欧州に移住するイスラム教徒で、彼らの中には反ユダヤ主義の歴史を持つ国出身の者もいるから。
②若者の失業が増え、移民やユダヤ人に対する反感が生じているとも言われている。
③最近ならでのソーシャルメディアの情報が原因となつていられるとも言われている。例えば、パレスチナの子供たちの死体や瀕死の状態を写した画像、手足を失った画像が溢れている。

○内容
・反ユダヤに因縁する書き。
・ユダヤ人の教師と生徒が殺殺。
・ユダヤ教の伝統の帽子のキツツバを被っていた男性が暴行を受けた。
・ユダヤ料理店に対する嫌がらせや脅迫などが問題となっている。

Bias Motivations
The 7,106 single-bias incidents to LCR in 2017. A substantial number of victims by age group and gender.



参考文献

- [1] 反ユダヤ主義 ニューズ NHK <https://www6.nhk.or.jp/kokusaihoudou/catchy/index.html>
- [2] SYNDOS 欧州で無敵の兆しをみせる反ユダヤ主義 <https://synodos.jp/international/10279/>
- [3] Reloaded ユダヤ人が迫害されたわけ <http://chiba-chiba.com/jew-europe/>
- [4] 連年の場 AUSCHWITZ-BIRKENAU案内所
- [5] FBI News 2017 Hate Crime Statistics Released <https://www.fbi.gov/news/stories/2017-hate-crime-statistics-released-111318>

1940年代のユダヤ人迫害

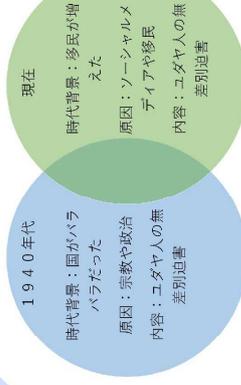
○時代背景
・キリスト教はユダヤ教から起源を持つ。
・キリスト教を救世主として認めなかったユダヤ人はキリスト教を脅かす存在として人々から憎まれていた。このような反ユダヤ主義は20世紀に入っても根強く存在していた。

○原因
①ドイツのナチ思想の根本に民主主義、共産主義ユダヤ人への嫌悪やドイツ民族の排他防衛感があった。
②アドルフ・ヒトラーは第一次世界大戦敗北により弱ったドイツをまとめるためユダヤ人という明確な敵を作った。また、独自の国を持たないが世界的にも優秀な人材が多かったユダヤ人をヒトラーは恐れていた。

③衛生学に関心があったヒトラーは優勢民族がヨーロッパを統一するべきと考え、劣等民族のユダヤ人を国外に追放することを目標とした。
④様々なことが制限されたユダヤ人が閉まると、自ら身も何かが役に立って立って立っていかないと考えた私は、このテーマと深く向き合うことにした。

○内容
・ユダヤ人の人数が多く追放が不可能だった為ゲットーと呼ばれる移住区に隔離を行なった。そこでの生活では強制労働をさせられ、食料も十分に与えられず、多くの人が命を落とした。
・1941年にユダヤ人問題の最終的解決が決定され、年齢や性別、思想に関係なくすべてのユダヤ人が殺害された。最初の頃はゲトローでの集団処刑や餓死によるものだったが、最終的にはアウシュビッツなどの収容所でのガス室で大量殺害することになった。

1940年代と現在の比較



① 研究動機

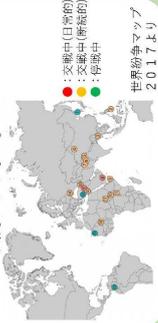
私は今まで、国際問題や国際機関についての漠然とした知識しか持っておらず、今回の研修でいくつもの衝撃を受けた。

その1つが戦争であり、数十年前に日本でも起こった戦争が、未だに起こっている国々がある。しかし、その現状は体験した人々にしか分らないもので溢れている。多くの人にこの事実を知ってもらいたい。自分自身も何か役に立って立って立っていかないと考えた私は、このテーマと深く向き合うことにした。

③ 戦争・紛争が起きている地域

現在、戦争・紛争は南米、東南アジア、アフリカ、中東で多発的に起こっている

戦争一国家間で行われる軍力を用いた争い。国と国の衝突で起きている。紛争一回よりも規模が小さいグループ同士の武力による争い。



⑤ ICRCの保護対象

●戦争・紛争が起きている現地の赤十字社と赤新月社と協力して援助活動、保護活動を行う

保護対象：一般市民・家族を失った人・捕虜や負傷兵

家族の再統合：紛争でバラバラになってしまった家族を再開させる

援助活動：様々な状況に対応できるように多種多様な人が集まって組織されている一EJ)食料が整うように働いている

⑥ ICRCの今後の課題と私達ができること

①厳しい職場下にどれだけICRCの職員が到達し、援助できるか。

→援助が必要な現場ほど侵入が難しい

②現地の思想や民族によっては肌の色や髪の色で拒否されてしまい、支援にいけない職員がいるために人手不足が発生している。そのため、様々な国の職員が多く必要。特に、日本人も必要とされている。

③物資の援助を行う際、送る側は何も考えずに送っている。よって現地で必要のあるものが足りず、必要のないものが余ってしまった。そこで、私達も物資を送る際は必要と供給を考慮して送ること、受け取る相手が活用しやすいように整理して送る必要がある。

④二度と戦争・紛争が起きないようにということを認識し、今回の研修に参加して得た知識も含めて、話しやすい同年代の人を中心に伝えていく必要がある。

参考文献

日本赤十字社ホームページ URL : <http://www.jrc.or.jp/>

国際赤十字社から見る戦争と課題

玉川学園高等学校2年 小林 萌恵

② 基本知識

国際赤十字社とは、世界中で戦争・紛争犠牲者の支援、医療や保険、社会福祉事業を行っている機関。

赤十字国際委員会(ICRC)、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、各国赤十字・赤新月社の3つから成り立っている。

ICRC→戦争・紛争が発生した地域に行き、人助けをする

IFRC→災害や感染症に対する手助け

各国の赤十字・赤新月社→各々の国での人道的な活動

→今回はICRCに目を向ける

④ ICRCでの取り組み

●国際人道法上の義務を順守させるために紛争当事者と接触

→紛争において人間として守るべき最低限のルール

E x) ・兵士と一般市民の区別
・捕虜や拘束者の待遇
・無差別攻撃の禁止
・攻撃に関する事前警告

Q どのようには守らせ、説得するか

・戦時の際に人道法を広く喚起
・裁判で裁く
・中立の立場を一貫する
・影響力のある第三者の協力

それでも買えない場合は
当構内で説得

●ヘルスインレンジャー

保護や援助にまわっている赤十字職員や、負傷兵等を治療している病院がわざと狙われて攻撃される事件が多発

それが二度と起こらないように喚起する



国連人権理事会は

中国のウイグル問題についてどう対処すべきか

玉川学園高等部 10年 續麻瑛子

1. 研究動機

今回この研修で国連人権理事会を訪問して、現在起きている人権問題にはどのような対処が必要なのか気になったから。また、ウイグル族の人権問題は深刻に問わず必要以下でしか報道されていない為、このテーマにしたい。

3. 基本知識：国連人権理事会の働き

国連人権理事会は、元となる国連人権委員会を改善したものであり、国際連合機関の1つである。47の理事国を中心に、国際連合加盟国すべての人権保護状況を定期的に見直している。また、集団的な人権侵害などを対処している。

4. 問題点

- イスラム諸国からの批判を受けにくく外交的な試み**
 - 中国が政府が巡回しトルコ政府に対して経済的関係を脅かす可能性がある
- ウイグル問題に対するイスラム諸国の沈黙**
 - 現在トルコ政府からウイグル問題に関する公式のコメントは出ていない

6. まとめ

私はこの研究を通して、世界にはまだ知られていない大いなる人権問題があるという事を知り、「自分は関係ないからいいや」のように他人事で終わらせず、「自分はどうすべきなのか」と考えることができる人になりたいと思った。

2. 基本知識：ウイグル族について



5. 問題点の解決策

現在の中国は、自由権の中でも信教の自由、報道の自由などが守られていない。国連人権理事会は、中国のウイグル問題に重点を置き、ウイグル問題の深刻さを報道をし、国連総会での採決で「ウイグル人の強制収容の撤去」や「国連監視団の受け入れ」などの賛成派を増やせようとする。しかし、一気にこのような対処をしようとするのは内政干渉との批判を受けてしまう可能性がある。できるだけ多くの国でウイグル問題の深刻さを報道するべきだと考えた。

7. 参考文献

- https://www.bbc.com/japanese/2018/08/180814_uyghur_china
- <https://www.nytimes.com/2018/08/14/world/asia/uyghur-china.html>
- <https://www.reuters.com/article/us/central-asia/uyghur-china-idUSKBN16H155>
- <https://www.abcnews.go.com/International/wireStory/uyghur-china-1-11838434>

21世紀におけるユダヤ人差別

玉川学園高等部2年 藤岡愛里 森島里咲

1. 研究動機

第二次世界大戦中にナチスが行なった、「ホロコースト」というユダヤ人差別問題は世界中に知られているが、現在ほとんどのユダヤ人差別問題が発生し、その対策はされているのか気になったから。

2. 基本知識 ホロコーストとは

ホロコーストとは、第二次世界大戦中のナチス政権とその協力者による約600万人のユダヤ人の国家的、官制的、組織的な迫害及び殺害を意味する。人類史上もっとも大規模な屠殺である。1933年11月にドイツで政権を握ったナチスは、「ドイツ人を「優れた人種」であると信じる一方、ユダヤ人を「劣った人種」とあるとみなし、脅威であると考えた。第二次世界大戦勃発後、ナチス内前には「ヨーロッパにおけるユダヤ人問題の最終的解決」を行おうとする動きが強まり、ドイツ国内や占領地のユダヤ人を拘束し、強制収容所に送った。収容所では強制的労働を課すことで労働を通じた絶滅を行い、犠牲になったユダヤ人は600万人を超えたといわれる。

アウシュビッツ第一収容所の入口

4. 現在起こっている問題

第二次世界大戦後、外国人の排斥や民族主義を主張する社会的、政治的運動であるネオナチによる反ユダヤ主義や、近年ドイツで一部のイスラム教徒の移民や難民(主にイスラム教徒)の間で新たな反ユダヤ感情が高まりつつある。ユダヤ料理店に対する嫌がらせや脅迫、小学校でのイスラム教徒の子供によるいじめなど差別的な行為、反ユダヤ主義的犯罪などが相次いでいるという問題がある。第二次世界大戦後再びこうした差別が生まれた理由としては、様々な問題が起因となっている。その中の一つとして、イスラム教徒が多数を占める国から新に入国した移民が持つ偏見や固定概念が影響していると考えられる。これらが東欧からの古い移民や一部ドイツ人が持つ反ユダヤ主義思想と合わさり、現在の潮流を生んだとされる。

5. 取り組み・対策

ドイツは第二次世界大戦後からホロコーストという悲劇を許した反省に立ち、迫害を逃れてくるユダヤ難民や、移民を積極的に受け入れたり、反ユダヤ主義をなくすための教育を徹底しておこなうなどして、二度と同じ惨劇が起こらないよう対策を行っている。また、これらの反ユダヤ主義的な非難を受け、ベルリン当局はユダヤ教団と手を組み、2015年に独立機関である「RIAS」を立ち上げている。その他に、ドイツ政府は2018年に内務省に「反ユダヤ主義問題担当官」といわれるものを新設するなど、新たな反ユダヤ主義問題の解決に取り組んでいる。

6. まとめ

これらの問題に対し、今後ドイツは様々な民族、宗教、そして異なる歴史を背負った人たちが暮らす社会であるということとを再認識し、国内のイスラム教団と連携して、難民や移民の社会統合を進めていく必要があるのではないだろうか。

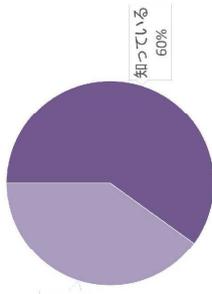
参考文献

- <https://www.youtube.com/watch?v=uhmmjg0momeu&list=PL9t3611556664f>
- <https://nhkweb2.stn.nippon放送.com/nippon放送/production-to-the-holocaust>
- <https://www.abcnews.go.com/International/wireStory/uyghur-china-1-11838434>
- <https://www.nytimes.com/2018/08/14/world/asia/uyghur-china.html>
- <https://www.reuters.com/article/us/central-asia/uyghur-china-idUSKBN16H155>
- <https://www.abcnews.go.com/International/wireStory/uyghur-china-1-11838434>

世界のユダヤ人人口



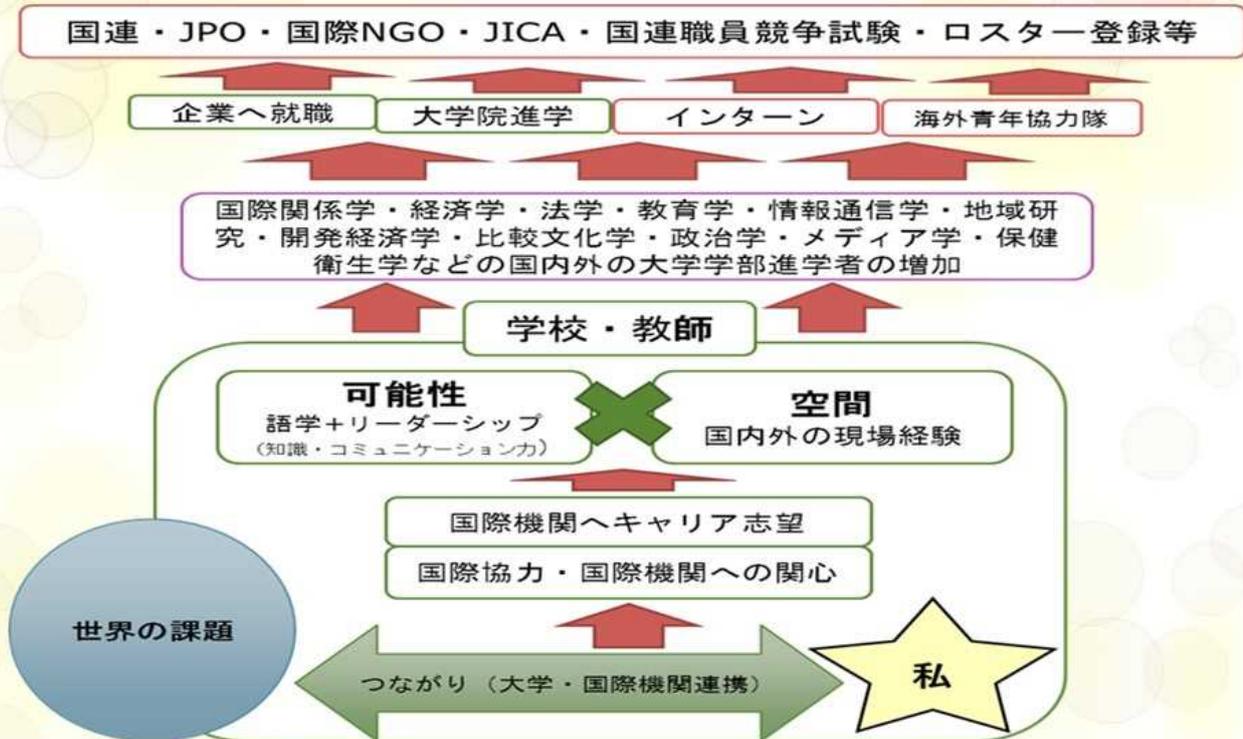
ホロコーストを知っているドイツの若者の割合



◆参考資料

玉川学園高等部・中学部 Super Global High School 構想概要

国際機関へキャリア選択する全人的リーダーの育成 仮説関係図



Student Enrolling Models for 4years in TSGH

SGH生徒の履修モデル



Tamagawa Super Global Leaders

| | | | | | | | |
|--|-----------|--|----------------------------------|---|-------------------------|--|---|
| 課題探究ステージ Stage for exploring issues | 高3 12年 | アフリカスタディーズ研修 ワールド・スタディーズ、 World Studies in English 海外トップ大学生との交流・CAS/Service@Tamagawa・パーソナルプロジェクト たまがわ国際会議の企画・運営・参加 | ヨーロッパ・スタディーズ研修 国内研修 高大連携授業 | Tamagawa Super Global Leaders 48 System、ラ ウンドスク エア実行 委員会 | | | |
| | 高2 11年 | 模擬国連(MUN)履修および企画参加 自由研究グローバル研究 | | | | | |
| | 高1 10年 | A. 貧困 A. Poverty | B. 人権 B. Human Rights | | C. 環境 C. Environment | D. リーダーシップ(外交) D. Leadership, Diplomacy | E. 国際協力 E. International Cooperation |
| | 中3 9年 | グローバルキャリア講座 Global Career Lecture Series Tamagawa Adventure Program (TAP) (Gr9-Gr10) | | | | | |

◆教育課程表

<平成28年度入学生適用>

| 教科・科目 | | 標準 単位数 | 第一学年 | | | 第二学年 | | | 第三学年 | | | | | | |
|-----------------|------------------|-----------|-------|-----|----------|-------|----|----------|-------|----|----------|-------|----|----------|-----|
| | | | 共通 | 選択 | 自由 選択 | 共通 | 選択 | 自由 選択 | 共通 | 選択 | 自由 選択 | 高大連携 | | | |
| | | | | | | | | | | | | 共通 | 選択 | 自由 選択 | |
| 宗教(礼拝) | | ** | 1 | | | 1 | | | 1 | | | 1 | | | |
| 国 語 | 国語総合 | 4 | 4 | | | 2 | | | | 3 | | | | 2 | |
| | 現代文B | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| | 古典A | 2 | | | | | 2 | | | | | | | 2 | |
| | 古典B | 4 | | | | | 2 | | | | | | | 2 | |
| | 国語演習 | * | | | | | | | | | 4 | | | 2 | |
| | 現代文演習 | * | | | | | | | | | 4 | | | 2 | |
| 地理歴史 | 世界史A | 2 | | 2 | | | | | | | | | | | |
| | 世界史B | 4 | | 2 | | | 3 | | | | | | | 2 | |
| | 日本史A | 2 | | 2 | | | | | | | | | | | |
| | 日本史B | 4 | | 2 | | | 3 | | | | | | | 2 | |
| | 地理A | 2 | | | | | | | | | | | | 2 | |
| | 地理B | 4 | | | | | | | | | | | | 2 | |
| 公民 | 倫理 | 2 | | | | 2 | | | | | | | | 2 | |
| | 政治・経済 | 2 | | | | 2 | | | | | | | | 2 | |
| | ワールドスタディーズ | * | | | | | | | | | | | | 2 | |
| 数 学 | 数学I | 3 | 3 | | | | | | | 4 | | | | 2 | |
| | 数学II | 4 | | | | 4 | | | | 2 | | | | 1 | |
| | 数学III | 5 | | | | | | | | 7 | | | | | |
| | 玉・数学III | * | | | | | | | | | | | | 4 | |
| | 数学A | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| | 数学B | 2 | | | | | 2 | | | | 2 | | | | |
| 理 科 | 玉・数学B | * | | | | | | | | | | | | 1 | |
| 科 | 科学と人間生活 | 2 | | | | | | | | 4 | | | | 2 | |
| | 物理基礎 | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| | 物理 | 4 | | | | | 3 | | | | | | | 2 | |
| | 化学基礎 | 2 | 2 | | | | 3 | | | | | | | | |
| | 化学 | 4 | | | | | 3 | | | | | | | 2 | |
| | 生物基礎 | 2 | | | | | 3 | | | | | | | 2 | |
| | 生物 | 4 | | | | | 3 | | | | | | | 2 | |
| | S S H科学 | * | | | | | | | | | 4 | | | 2 | |
| S S Hリサーチ科学 | * | | | 2~4 | | | | 2~4 | | | | | 2 | | |
| 保 健 育 | 体 育 | 7~8 | 3 | | | 3 | | | 2 | | | 2 | | | |
| | 保 健 | 2 | 1 | | | 1 | | | | | | | | | |
| | 選択体育・t a p | * | | | | | | | | 4 | | | | 2 | |
| 芸 術 | 音楽I | 2 | 1 | | | 1 | | | 1 | | | 1 | | | |
| | 美術I | 2 | | | | | | | | 4 | | | | 2 | |
| | 美術II | 2 | | | | | 3 | | | 4 | | | | 2 | |
| | 美術III | 2 | | | | | | | | 4 | | | | 2 | |
| | CPM | * | | | | | | | | 4 | | | | 2 | |
| | CGD | * | | | | | | | | 4 | | | | 2 | |
| 外 国 語 | コミュニケーション英語I | 3 | 3 | | | | | | | | | | | | |
| | コミュニケーション英語II | 4 | | | | 4 | | | | 2 | | | | 1 | |
| | コミュニケーション英語III | 4 | | | | | | | 4 | | | | | | |
| | 玉・コミュニケーション英語III | * | | | | | | | | | | 2 | | | |
| | 英語表現I | 2 | 2 | | | | | 2 | | | | | | | |
| | 英語表現II | 4 | | | | | | 2 | | | | | | | |
| | 英語会話 | 2 | | | | | | 2 | | | | | | 2 | |
| | 英語セミナー | * | | | | | | 3 | | | | | | 2 | |
| 英語演習 | * | | | | | | | | 4 | | | | 2 | | |
| 家庭 情報 | 家庭基礎 | 2 | 2 | | | | | | | | | | | | |
| 情報 | 社会と情報 | 2 | 1 | | | 1 | | | | | | | | 2 | |
| | 情報の科学 | 2 | | | | | | | | 4 | | | | 2 | |
| 総合的な学習の時間(自由研究) | | 3~6 | 2 | | 2 | 2 | | 2 | 1 | | 2 | 1 | | | 1~2 |
| 玉川大学連携 | | ** | | | | | | | | | | | | 14 | |
| 特別活動(労作・LHR) | | | (1) | | | (1) | | | (1) | | | (1) | | | |
| 履修単位数合計 | | | 33~37 | | | 33~37 | | | 31~33 | | | 33~35 | | | |

*は学校設定科目、**は学校設定教科

◆執筆担当 玉川学園 SGH 実行委員会教諭および担当

| | 項目 | 担当 |
|-------|--|--|
| 課題研究 | ①グローバルキャリア講座 2018 | 碓合 宗隆 (社公) |
| | ②Tamagawa Super Global Leaders 48 | 碓合 宗隆 (社公) |
| | ③12年公民科選択科目「ワールド・スタディーズ」 | 碓合 宗隆 (社公) |
| | ④SGH 海外研修「アフリカン・スタディーズ 2018」 | 後藤 芳文 (国語) |
| | ⑤自由研究「グローバル・スタディーズ」 | 吉田遼太郎 (英語) |
| | ⑥たまがわ会議 (ラウンドスクエア実行委員会) | 横山 絢美 (数学) |
| | ⑦ SGH 海外研修「ヨーロッパ・スタディーズ 2018」 | 稲石 陽平 (国語) |
| | ⑧ 模擬国連の実践を通じた外交・国際協力の理解 | 後藤 芳文 (国語) |
| 課題外研究 | <1>英語に対する取り組み | 有川 淳 (英語) 中村 優香 (英語) Joel Baker (English) David Wilkins (English) |
| | <2>広報・普及に関して | 碓合 宗隆 (社公) |
| | 研修参加生徒による生徒発表会や展示発表の実施 ペガサス祭、研究会 | 大原 健 (地歴) |
| | <3>運営指導委員会 (ハイパネル) の開催 | 碓合 宗隆 (社公) |
| | <4>卒業生に対する追跡調査 | 碓合 宗隆 (社公) |
| 資料 | 第三者最終外部評価報告書本文および日本語概要 Sustainability Frontiers 「Tamagawa Final External Evaluation」 | David Selby 香川文代 |

校正：小林 香奈子 (国語)

データ分析：前野 木綿子 (数学)

管理機関：横松 健二 (学園教学部)

海外交流アドバイザー・コーディネーター：濱野あづさ (玉川学園 SGH 事務局)

データ管理・運営補助・経理：都 慶子 (玉川学園 SGH 事務局)

発行日 平成 31 年 3 月 25 日

印刷所 株式会社 アイプレス

